

ぎ入れられたり」と。

アーサー・ハラムの遺き骸は斯くしてクレイヴドンなる累代の菩提所に安眠せり。されど安んぜざるものは蘭の如き香ばしく親しき友人を失ひたるテニスンが心中なり。日月梭の如く、爾來十有七年は夢の如くに過ぎて、一八五〇年六月、亡き友を追懐する戀々の情を寄せたるものは、一篇菲路の歌「追憶歌」即ちこれなり。されど追憶歌は一時に作爲せられたるにあらず。ハラムの死せる一八三三年の中に九、二十八、三十、三十一、八十五節等は作爲せられ、以下漸次大成せられたることパーソンズの言へるが如し。

追憶歌は、之を五方面より觀察することを得、五方面とは何ぞや。曰く第一菲路歌的、第二自傳的、第三代表的、第四哲學的、第五宗教的はなり。追憶歌の菲路歌たることは前既に言へり。左に自傳として觀察し、次に宗教上より觀察して此篇を結ぶべし。

此詩は自傳的なり。グラッドストーンは之を「一大獨語」と稱し、且つ曰く、此詩は決して爲我主義に墮落せず、かの神祕なる旅行に於けるマンテの如く、吾人に深遠なる

教訓を與ふと。テニスは嘗て其友人ジェームス・ノールズに語つて曰く、此詩は余一人の叫びにあらずして、全人類の叫びなり。詩に於ては私の憂は轉じて全世界の思想となり、希望となりぬ。そは葬式に始まりて結婚に終り、死に始まりて新生の確信に終る。神劇の一種にして、結末に於て愉快なるものなり。されば此詩は個人的なると同時に甚だ非個人的なる詩歌なり」と。

「追憶歌」を自傳的なりと云ふは二重の意義に於てなり。第一にこはテニスとハラムとが四年間の友情の回顧なり。第二にテニスとハラムとが十有七年間（一八三三年より一八五〇年まで）の心理的變化の活史なり。

「追憶歌」はテニスとハラムとの友情を叙すること極めて精緻なり。そは殆ど圓滿なりし二人間の趣味、感情、野心、憧憬の共通なりしを語る。斯かる純潔なる芝蘭の如き友情は眞に世上稀に見る所なり。

「追憶歌」によれば、二人が大學生活の親密なること蜜の如きを見る。彼等は昔ケンブリッジに散策し、漫歩し、テニスの在る所ハラムあり、ハラムの到る所又テニスンを見る。彼等は形影の如くに從へり、此黄金時代は晩年のテニスに取りて唯

一の慰藉なりき。詩中到る所に此種の慰藉辭あるを見るなり。テニソンはブルック  
 ラーに與ふる短詩に於て、母校の翁儼たる並木路の漫步を偲びき。テニソン  
 がハラムに對する友情は、それにも増して母校時代の思出となり、諸詩に歌はれ  
 たり。ハラムの語を用ふれば、此等き同胞の自覺は常に詩人の心中に存して其品  
 性を鑄冶し、其運命を支配せり。客あり、テニソンを訪ふて談一度ハラムに及べば、  
 詩人の容貌は頓に活氣を帯び來るを見しなり。  
 彼等母校に在るの日、青年の一群あり。テニソンの室に集りて、或は哲學と文藝と  
 を談じ、或は勞働の神聖を語り、治國平天下の道をも物語りぬ。テニソンとハラム  
 とは共に有名なる文藝談話會 (Conversation Society) の會員なりき。此會員は俗に「十  
 二使徒」と呼ばれたり。一八二〇年頃の設立にして同三〇年頃にはテニソン、ハラ  
 ム、トレンチ、アルフォード、トムソン、ブラックスレー、メリヰアール、ウチーブルス、ラッピン  
 トン、モリス、ケンテデー、スピッチング其他の名士を網羅しき。一八三〇年一月二  
 十四日、ブラックスレーがトレンチに與へたる書簡の一節に曰く、今やミルチスも  
 亦使徒となりぬ……ハラムとテニソンとの入會は實に談話會をして九鼎

大呂よりも重からしむ。實に地上の偉大なるもの、一なり云々。以て二人の重鎮  
 たりしを知るべし。

此會の會員たることは實に一種の名譽なりき。アルフォードは得意氣に其日記に  
 記して、使徒に撰ばれたりと云へり。會に討論あるの時もテニソンは非常に内氣  
 なりしを以て評議に加はることなかりしが、ハラムに至りては雄辯宏辭四筵を  
 驚かし、且つ熱心なる辯士たりき。

ハラムの家は倫敦にあり、又諸國に漫遊せしかば、彼は其年配にありては見聞も  
 廣く涉獵も深かりき。之に反してテニソンは父が牧師たる一小村の外に出でざ  
 りしかば、彼は常にハラムに師事したり。一八二八年十月、彼等のトレンチ・カレ  
 ヲに入學するや、テニソンは十九にして、ハラムは十七歳なりき。テニソンは當時  
 を偲びて二十三章、四十二章等に於て其友人の知的神來を追憶せり。一八三〇年  
 の夏期にありて二人はラインの清流に棹して南佛に航じたるが、此樂しき旅行  
 の記事は載せて第七十一章にあり。當時、ファルデナント王の暴政に反對せる一味  
 徒黨の面々は、主としてピレニオスの山中に隠れ居たり。二人は此處を過ぎりて

自由の神に祈り、其溪谷の美觀を愛しぬ。

テニスンは此美しき光景に對して、滿腔の詞藻を煥發せしめざるを得ず、その金聲玉振は發して「オエノン」となり、中に「チャウテレッツ」の谿谷を歌ひたるものあり。此美景は久しくテニスンが夢寐にも往來せるものなるが、一八六一年再びピレニアスに遊びて風光を吞吐するを得たり。乃ち「チャウテレッツ」の谿谷にて「In the Valley of Unteretz」と題するいぢらしき詩をものしぬ。一夜巖頭に立つて谿谷を眺むれば、谷間に沿ふの谿流は白泡を立てつゝ涓々として流る。夜は森々、流は涓々、思ふ三十二年の昔、余一心友と此地に遊びぬ。巖頭に踞して溪流を聞けば、流水は死者の聲の如し。嗚呼人世は夢の如く、流水落花杳然として去るも、この會遊の地に到れば、溪流も巖石も洞窟も、宛如として故人の面影ありと。

「追憶歌」には又テニスンとハラムとが各、其家庭に來往せしこと、エミリア・テニスンとハラムとの戀の事、ハラムの死後クリスマスに對する感想の差異なども見ゆ。

大詰はテニスンの小妹セシリア・テニスン(Cecilia Tennyson)とエドモンド・ラッシュン

ン(Edmund Lushington)との結婚を祝ひたる悦の歌なり。ラッシュントンはグラスゴウ大學の希臘語の教授にして、使徒の一人なり。八十五章にテニスンは彼を稱して「辭に眞にして行に切なり」と評しぬ。詩中又兄「チャールス」に及べるもあり。

「追憶歌」は又之をテニスンが内的生命の活史と見るを得べし。十九世紀の科學は一切の信仰を打破し去りて、唯物主義は信念の根柢を撼搖しぬ。テニスンは當代科學を攝取しつゝ、なほ且つ眼見るべからざる神性あるを確信し、此土を厭離すべき穢土と觀ぜずして、希望の天地と見做し、人性問題を解決せるなり。

「追憶歌」の第一段は淺薄なる樂天的自然觀を棄却せざるべからざるを歌ひたり。十九世紀科學の勃興と共に此世は弱肉強食の修羅場と化し去り、自然は悉く矛盾し衝突せるを以て、人類も亦不安の念に驅られ、十八世紀の樂天的觀は此處に打破せられぬ。第二段にありては唯物論的科學の見地より來れる自然觀は人類の恐怖を惹起したるを論じ、人類の運命若し果して斯くの如く不安なるものならば、人生に希望なし、正義公道も何するものぞ、神聖なる信仰も何するものぞ、生きて徒に物慾に耽らんは至愚の業なり、現世は遂に厭離すべき穢土のみ、されど

僅に斯くの如き思想に到達して人生問題を解決するを得ずと云ひ、第三段に至りて、廣大なる見地より自然の範圍と意義とを解釋してこそ此處に初めて新しき信仰と新しき希望とを生ずべけれと云ふを歌ひぬ。科學的見地よりは現世は苦界にして穢土なれども、知識獨り吾人の信念を成す能はず、一度人類本然の至性に觸れてこそ確乎たる信念は立つなれ。宇宙に一定の道德律あり、進歩あるは人間本心の絶對に要求する事實に外ならず。見よ戀人の心には死と雖その愛人の面影を奪ひ去る能はずと信じて、自ら心證の絶對なるを疑はざるにあらずや。要するに、追憶歌は現在の亂調子が大自然の大樂部の演奏に没入して、其諧調を整へ來り、茲に初めて聞かるべき大音樂の前奏たるなり。

以上畧、此篇の由來並に性質を説明したれば、最後に全篇の思想上の區分を試みて大體の構造を明かにすべし。此作は序の曲を以て始まり、大詰の曲を以て終る。序の曲と大詰の曲との間に百三十一節(Quintus)あり、各節の長さは區々にして一定せず、音律は全篇を通じて同一なり、而も抑揚音譜の位置、各語の長短、並に其配置法の巧妙なる變化によりて毫も單調に失せず、思想と詞句との調子極めて能

く合致せり。全篇百數十の節に分たれ、従つて各節各之を獨立の詩と見るも味ふべきよし多し。ざるが故に又一面全篇の連絡を明瞭に了解するは容易ならず、傳ふる所によれば作者自ら篇中に記されたる「三基督降誕祭日」を以て分類の目標となしたる由なり。

「序の曲は宇宙の光たり命たり愛たる神の御前に平伏して祈念を捧ぐる詞なり、以て全思情の歸趨を窺ふに足る。

第一部(第一節より第二十七節まで)は、悲哀の巻とも名づくべし、作者自ら偏に哀傷悲愁の思ひに耽る。

第二部(第二十八節より第七十七節まで)は、希望の巻とも名づくべし、憂愁の中に臍氣ながら一道の光用を認めて、之に向つて進まんとす。

第三部(第七十八節より第三百三節まで)は、平和の巻とも名づくべし、悲愁に動亂せる心緒漸く整ひて、茲に平和沈靜の觀念に入る。

第四部(第三百四節より第三百三十一節まで)は、歡喜の巻とも名づくべし、此部に至りて作者が天地は已に新なり、光明遍照の天地なり、茲に於て、已に宇宙を一貫せる

大威力は愛なりてふ心證に達せるを見る(此分類は人によりて様々なり。今此處に掲ぐるはゲナング氏の説なり)  
 大詰の曲は樂しき婚姻の祝歌を以て歡喜悅樂に充ちたる全篇の意を結ぶ。今作  
 例として左に數首を抄録すべし。

Strong Son of God, immortal Love,

Whom we, that have not seen thy face,

By faith, and faith alone, embrace,

Believing where we cannot prove;

御神の猛き御子、不死の愛なる耶蘇基督よ、

我等御面を拜みまつりしことなれば、

信仰によりて、唯信仰によりてこそ擁し奉れ、

證し示すこと能はざるに至れば、信じ奉らんのみ。

Thine are these orbs of light and shade;

Thou madest Life in man and brute;

Thou madest Death; and lo, thy foot

Is on the skull which thou hast made.

もろく、明暗の天體はイエスの物なり。

イエスは人間と禽獸との生命を造り給へり。

死をも造り給へり。而も見よや。

自ら造り給ひし頭顱の上に御足の跡を垂れ給ひしを。

Thou wilt not leave us in the dust;

Thou madest man, he knows not why,

He thinks he was not made to die;

And thou hast made him: thou art just.

イエスは我等を塵埃の中に見捨て給ふことなけむ。

イエスは人間を造り給へり。人間は其ゆゑよしを知らず。

彼は只死なんが爲めに造られしにはあらずと思へり。

實げにもイエスは人間を造り給ひき。イエスは正し。

Thou seemest human and divine,

The highest, holiest manhood, thou :

Our wills are ours, we know not how ;

Our wills are ours, to make them thine.

イエスは人の姿なれど神々しくぞ見え給ふ。

最高最聖の人こそイエスの姿なれ。

我等の意志は我等のものなり。

我等は何の故に然るかを知らず。

なれど我等の意志は我等のものなり。

これイエスの意志たらしめんが爲めなり。

Our little systems have their day ;

They have their day and cease to be :

They are but broken lights of thee,

And thou, O Lord, art more than they.

人間の小則は限りあり。

限りあれば則ち滅ぶ。

そは唯イエスが御光の切れくゝなるぞかし。

あはれ主なる御神よ、

御神は人間の小則よりも優れさせ給へるぞかし

We have but faith ; we can not know,

For knowledge is of things we see ;

And yet we trust it comes from thee,

A beam in darkness : let it grow.

我等には唯信仰あるのみ。我等は知ること能はず。

知識は我等が事物に就て見る所なればなり。

されど我等はなほ知識の神より來るを信ず。

知識は暗黒の一閃光なり。

其としてますます明かならしめ給へや。

Let knowledge grow from more to more,

But more of reverence in us dwell;  
 That mind and soul, according well,  
 May make one music as before,  
 But vaster. We are fools and slight;  
 We mock thee when we do not fear;  
 But help thy foolish ones to bear;  
 Help thy vain worlds to bear thy light.  
 知識はいよ／＼ますます／＼明かならしめ給へ。  
 されど我等の心には愈敬虔の念ひを宿らせ給へや。  
 知と靈と相和らきて。  
 曩の日のごと妙音樂を奏て得べし。  
 否更に廣大なる妙音樂を奏て得べし。  
 我等は愚なり淺はかなり。  
 恐れざる時は神をあびける。

されど主が愚なる者に御光を授け給へ。  
 主があだなる世界に御光を授け給へや。  
 Forgive what seem'd sin in me,

What seem'd my worth since I began;

For merit lives from man to man,

And not from man, O Lord, to thee.

願くは歌ひ始めしよりの我罪を許させ給へ。  
 我勤と見ゆるを許させ給へ。  
 勤は人々の間にこそ命あれ。  
 人と神との間には命なきものにしあれば  
 許させ給へ、あはれ御神よ。

Forgive my grief for one removed,

Thy creature, whom I found so fair.

I trust he lives in thee, and there

I find him worthier to be loved.

願くは亡き人を悼む我悲を許させ給へ。

彼は余がいと美しと思ひし神の子なり。

我は信ず、彼は神と共にあるを。

更に愛らしき様にて其處に在るを。

Forgive these wild and wandering eyes,

Confusions of a wasted youth;

Forgive them where they fail in truth,

And in thy wisdom make me wise.

願くは怪しく漂へる叫びを許させ給へ。

心すさめる青年の惑亂を許させ給へ。

真理にかなはぬ叫びは許させ給ひて、

神の智慧もて我を賢しくならしめ給へや

「追憶歌」は大要斯くの如し。吾人は既にテニスンに傳し、其大作の梗概をも物語り

ぬ。次には彼が詩歌を大觀して此篇を終るべし。

#### 六 テニスンの詩を評す

センツペリイ曰く、或人は米國詩風の傳統を論じて、テニスンを以てキーツに紹ぐものとなす。按ふに不當ならじ。テニスンが一八三〇年及び同三二年に作せる詩集中、其圓熟なる作は嘗てキーツが新舊兩派の風調を折衷せる清新の諧音あると共に、時に此折衷の不熟の燥音を有せしこと、かのキーツが“Greian Un”“La Belle Dame sans Merci”に見ゆるものと正に相同じ。然れども正當に兩者を比較すれば、物の比較ばかり誤解せられ易きはなけれど、其相異或は顯然たるものあらん。而も兩者素より大詩人たるに於て擇ぶ所なきは言を俟たず。キーツの短命なりしや、其作未だ圓熟に至らずして止みきと雖、彼をして若しテニスンが例の十年間になし、が如く、其作を自ら批判して、いろく、に修練し琢磨する餘裕ありしめば、其作必ずしもテニスンに下らざりしならん。げにもキーツが初期の作の幾分は、當時の批評家も既に難ぜしが如く、一氣にして千言立ちどころに成れる



が爲めに、概ね蕪辭巴調に止まり、好尚も觀念も粗雜淺薄なりしこと、テニスンが初期の作よりも甚しかりしならん。而も感情の精緻といふ一點より見れば、テニスンの作品中にはキーツが傑作に及ぶものなし。之を要するにテニスンとキーツとの類似は争ふべからず。彼等は共に繪畫的表現と音樂的表現とを併用する妙技を有し、彼等は共によく人道を解し、普通の事物にもわたりて靜穩平直且つ健全なる觀察を有せり。而して此點に於てはかの實際界を離れ、現世間を無視せざりしシェレに勝ること一等なり云々。

テニスはキーツに比すれば趣味更に深く、其進前の歩武も亦確實なりき。彼は詩人の天職と自家の才能とを認識し、古名作に參して、以て其長短美醜を研究し、深く自ら警醒する所ありき。されば其初期の諸作にも見るべきものあり。而して第二期に至れば詞藻情趣の朗々として誦すべきもの多し。其晩年の諸作に至りては思想高遠、想像豐贍、辭句精練、所謂金聲玉振なるものにして、前諸作の比にあらず。此期の作品は繪畫的なると同時に音樂的にして、其技巧の美妙なる、決してキーツ若くはシェレに劣るものにあらず。繪畫的なると同時に音樂的なること

は古今の詩人が詩歌の極致として夢想する所なれど、之に到達せるものは洵に少し。然るに成熟期のテニスはワッツワースが「エキスカーション」の如き運詞のくたくしさを醇化して、清婉なる短篇となしぬ。此點に於て彼は「神女王」の作者スベンサーに比肩すべく、スベンサーが「宮殿」及び「夢」は成熟期のテニスが短篇の面影あり、コールリッチ、シェレ、キーツ、ブレック等にも亦此種の作物あれども、テニスが圓熟なるには若かず。且つやオエノンの壯大なる律調はミルトンが没韻律語の山海の如きにも優り、無爲の島人のローマンチックにして而も高雅なるは、スベンサーが「神女王」の靈樂にも譲らず。而して時代の精神を歌ひ時代を代表する詩人として、何人もテニスンの如くなる能はず。彼は二様の見方に於て時代の精神を歌へり。第一は自然界を主觀的に歌ふと、第二は十九世紀の思想感情を以て過去の事蹟を謳ふと是なり。野菊に見る如き第一の可憐なる姿態は、ライダール湖畔人の詩宗より得來りたるなれど、而も其作物の如く無味乾燥ならず。第二の華麗と濃艶とはバイロン、スコットより得來りしなれど、而も彼等が作品の如く淺露粗硬ならず。ワッツワースも、スコットも、バイロンも、到底テニスンの如く時代の

代表的作家にあらず。十九世紀の英國はテニスンに於て初めて好箇の代表的詩人を見たるなり。

テニスンは曾てテニスン傳を著し、テニスンと時代との關係に論及して曰く、テニスンの幼時に當りて動亂の時期は既に去れり。かのジョージ三世が御世の下にありて、青春血氣に逸りしシムレー、バイロン等を驅りて憤激の文辭を弄せしめ、又コイル、リッチ、ウィットス等を感激せしめたるは、革命軍と保守派との必死の争闘なりき。阿鼻叫喚の聲なりき。金鉦太鼓の音なりき。テニスンの時代に至りては斯くの如き動亂なく、恰も疾風迅雷の後、天空靜穩なるが如し。此時に當りてはリッフォード、ピルは法律となりて發布せられ、歐洲に於ける平和の時代、英國に於ける樂しき繁榮の時代は將に來らんとせるなり。十九世紀中葉の平和時代は方に發展せんとせるなり。斯かる時勢の推移は好くテニスンの作品に現れたり。粗野にして猛烈なる要素は去れり。テニスンが地球、海、空等に對する印象は主として平和的、幽靜的、神祕的にして、彼は幸多き秋の野原を眺め、小川の漣を見て、其低唱を聞き、或は靜なる海の波の音を聞きつゝありしなりと。

さればテニスンの作品には、常に斯くの如き時代の面影ありて、道德上、社會上、宗教上毎に當代の進歩せる輿論を代表せり。されば嚴密に云へばテニスンが歌へる所は必ずしも十九世紀中葉の最も勝れたる思想にはあらず、又最も嶄新なる意見にもあらず。而も其作物は當代英國の上流社會の精神を代表せるものと云はざるべからず。當代英國の紳士にしてテニスンの作物を繕くものは、何人も其中に自家の思想感情の表露せらるゝを見るべく、自家の小照なりと思ふべし。これ豈に英國紳士を代表せる好詩人にあらずや。或る評家は曰く、晩年のテニスは英國人の新しき理想を歌ふ能はざりきと。然りテニスは豫言者にあらずるを以て、其作詩を以て一世を指導する能はざりしは明かなり。而もテニスは當時の新聞を歌ふことを怠れるにあらず、又能はざるにもあらずき。垂死のテニスは或は然りしならん。されど壯年期のテニスは常に時代の先達となりて新しき理想を鼓吹し、新しき思潮の流れに棹したるなり。例へば一八四二年に公にせられたる「ロックスレー・ホール」を見よ。テニスは作中の人物に托して自家の感想を抒らし、將來の希望をも陳べたり。此感想、此希望は即ち當時の進歩黨の

感想なりき、希望なりき。而して後に至りては、六十年後のロックスレー・ホールを公にして、以て保守黨の思想と疑惑とを歌へるを見よ。テニスン必ずしも時代の思想と没交渉なるにはあらずか。の皇女の女權論に觸れたる、若くは、美術宮の出世間熱の誤謬を諷刺し、暗に眞善美の一つ家の軒に住へる兄弟なるを道破し、其相関を説きて實世間と出世間との關係を歌へる、何れか時代精神に觸れたるものならざる。

要するにテニスンが理想は天則を畏敬し、不退轉の精神を推奨し、秩序を亂さずして進歩するにあり。義理人情を重んじ平等を愛して差別を忘れず、出世間に遊びつゝ、實世間に處するにあり。これゲーテ、カーライルの實踐せる所、テニスンの如きは詩人中の君子人たり。

## 第二編 小説家

### 第五章 フローベル

#### 一 小傳

フローベル(Gustave Flaubert)一八二一年—一八八〇年)は、フランスの小説家なり。一八二一年十二月十二日ルーアン(Rouen)に生る。父は外科醫にしてルーアンに開業しき。フローベルは其傑作「マダム・ボヴァリー」中にシャルルを描きて父の特性の多くを寫しぬ。母は最も古きノルマン族より出づ。フローベルは其市にて教育を受け、一八四〇年即ち十九歳まで郷土にありて螢雪の功を積み、同年巴里に出て法律を學びぬ。

彼は學校にては怠慢にして課業なども怠り勝なりしが、幼き時より文學を好み、年十一にして讀書に耽溺しき。彼の壯なるや、人呼びて、若き希臘人の如しと云へり。とぞ。人と爲り身體強壯、而も内氣にして嫺雅なり、眞摯なり、非常に利己的なり、

而して明かに何等の野心なかりき。彼は田園を愛して太く巴里を厭へり。彼はヴィクトル・ユゴーと交を結びぬ。されば其感化を受けたること大なり。一八四〇年の終に於て彼は又ビレニース及びピコルシカ地方に漫遊しき。巴里に歸りし後は陰氣なる夢を夢み、日々空想に耽り、世襲財産にて生計を營み居たり。父歿し妹のカロラインも死し、母は孤獨の身となりて寂しき云はん方なしとのことにて、フロイベルは一八四八年喜んで巴里を去り、又法律の研究を廢し、ルーアンに近き、クロアゼー(Croisset)なる母の家に歸省しぬ。此處はセーヌの流に沿へる樂しき土地なりしかば、彼は此家を以て己が住家となし終焉の地となすに至れり。一八四六年より五四年に至るの間、フロイベルは女詩人コーレー(Louise Collet)嬢と友誼を結び、二人が取り交したる手紙も頗る多し、其手紙はフゾグ(Fuzog)の言ふ所に從へばフロイベルの一生中最も留意すべき情事なりと。彼は修身娶らざりき。

此頃の主なる友人はマキシム・デュ・キャンプ(Maxime Du Camp)にして、一八四六年にはフロイベルはキャンプと共にブリタニー地方に旅行しき。一八四九年には東方に旅行し、路に希臘、埃及等の古代文明國を過ぎりて深遠なる印象を得たり。爾來折々巴里に

遊ぶの外、フロイベルは此地方を出でざりき。一八五〇年東方より歸るや、マダム・ポトツァリーを起稿し始めて、他に構思を試みざりき。苦心六年にして脱稿し、一八五六年、巴倫評論に連載せらる。この時政府は風俗壞亂の故を以て發行者及び著者を訴ふ。されど裁判の結果二人は放免せられたり。此小説の一卷となりて世に公にせらるゝや世人は大に之を歓迎したり。

後フロイベルは古物學を研究して、「サラムボ」(Salambo)を著はし、執筆怠らざりしにも拘らず、一八六二年までは完成せざりき。此書成るやフロイベルは再び時代の風俗を研究し始め、自家の少壯時代を追憶して「多感教育」(L'Education Sentimentale)を著はせり。此著は七年間に完成せられたるものにして、一八六九年世に公にせらる。此時までは彼は世塵を避け筆研に従事し極めて多幸なりしに、好事魔多く、纏て不幸の蝟集するを見たりき。一八七〇年普佛戦争の始まるや、彼は憂心忡々として遂に病を醸し、太く神經病を痛む。加之その心友は或は易簣して白玉樓中の人と化し、或は誤解して彼を遠ざかりて絶交せるあり。而して就中フロイベルの心を痛めたるは、一八七二年に其最愛の母と別れたること是なり。されば

彼は孤影悄然として、外に交るべき友なく家には温情ある母もなく、極めて寂しき生活を送ることとなりぬ。僅に其姪コムモンザル夫人(Comonville)あり、甲斐々々しく世話をなし、又特にジョージ・サンと親交を結び、時々はパリに出て、ゾラ、ド・デー、ツルゲーネフ、ゴンクール兄弟を訪ひて、以て些か慰むる所ありしのみ。されど幽鬱と荒涼とは深くフロイベルの心身を惱まし、病膏肓に入りぬ。如何なる國手も之を治療するの名案なけむ。さればフロイベルが勤勉力は毫も以前と異らず、彼は同一の強度と十全とを以て著作に従へり。次で「サン・アントワヌの誘惑」(La Tentation de St. Antoine)成る。こは一八五七年より着手せるものにて、一八七四年に至りて、漸く脱稿し、印刷に附することとなりぬ。同年「候補者」(Le Candidat)の失敗より、痛く失望せることなりき。一八七七年「アンクル・サムブル」(Un cœur simple, La légende de Julien l'Hospitalier, and Herodias)成る。以後フロイベルは眞面目なる態度を一變して、餘生を諷刺と罵倒とに費し、人智無用論、凡人遍在論の如きは口を衝いて出て來りし皮肉の最大なるものなりき。是等は皆断片的の説話なれども、暗譏奇絶、彼は自ら稱して自家の傑作となしたり。これ即ち「ポーターフィールドとベ

ーキンミン」(Bouvard et Pécuchet)なり。

一八七〇年以後、フロイベルは俄に年老ひて見えにき。一八八〇年五月八日、齡五十八の壯時に際して、彼は既に已に老衰し、一箇の廢人となり、遂に卒中の一撃にあふて倒る。彼はクロア・ヌセーにて逝去せしかども、遺骨はルーアンの先塋に合葬せらる。一八九〇年に至りて、畫家シャピエ(Chapin)美しき肖像を描く。今ルーアンの博物館に藏せらる。

フロイベルの性格には種々の特質あり。彼は内氣なること處女の如く、而も極めて感じ易く又尊大なりき。黙する時は死水の如く、一度口を開けば快辯激語浴々として流るゝが如し。一見矛盾するが如きも、素とこれ其體質に基くものなり。人と爲り風丰衛兵の如く、ウイキング(八世紀頃、歐洲の海岸を掠奪せる海賊)的の頭角を持ちたれども、其健康は幼より薄弱にして、死に至るまで神経病を憂へたりき。此紅顔の巨漢は私かに憎人症に罹り、厭世病に煩悶せり。彼が中等社會を嫌ふの念は少年時代に芽して、一種の偏狂症と化し去りぬ。彼は其同人を賤め、彼等の習慣と、彼等の智慧の缺乏と、彼等の美を輕んずることゝを賤めき。其叱咤の熱烈な

る、恰も律僧の戒律を嚴守するにも比すべきものあり。是等の特質はフロイベルが作風をして神彩あらしむ。彼は寂然孤獨、只筆硯に親み、時としては一週一頁の文を草して、而も決して満足せず、金聲玉振の文字を得んとして、推敲に苦心を累ねき。其間斷なき精勤は決して報ひられずと云ふべからず。其私信すらも平易にして正確なる言語の自然に湧き來る底の人ならざるを示す。彼は金玉の文字をば沸々たる額上の發汗裏より得來ること、なほ良工の額に汗して名刀を鍛鍊するが如し。アカデミーの評家として、嚴格の聞えある某氏の曰く、すべて彼の著作に於て、而して彼の著作の各頁に於て、フロイベルの文は模範的の文體なりと云ふを得べしと。今やフロイベルが佛國第一流の作家たることは萬人の等しく承認するところ、而して其第一流たる所以は其文體の遺勁と正確とにあり。抑、時文の病源は、其表白法の空漠にして不適切なるにあり。而して獨り佛國のみならず、恐らくは近代の歐洲の如何なる作家と比較するも、フロイベルの文體の如きは、毫も抽象不正確の措辭なし。されば文義透徹せざれば止まず。彼やロマンチック派と寫實派との混淆せる人なり。故に其文體も亦其人の

如く、怪むべきほど法度に適へるは、會、輓近の兩派及び各派の作家をして仰いで以て師宗となさしむるに足るものあり。彼が其目的を表現するに用ふる絶對的正確は、彼が著作の到る所に散見するを得。其小説の人物の肖像を描寫する時に於ては、殊に然りとす。彼の死後名聲の隆起せる有様は文學史上の奇觀なり。一八五七年「マダム・ボーザリ」の出版せらるゝや、之を賞揚するものよりも、誹謗するもの多かりき。其後此小説が新派の鼻祖にして人生の精細なる眞寫なることを知るもの少かりしを以てなり。須臾にして彼が天才を發揮せる此態度は全般に承認せられ、他をして接踵せしめたり。其死する頃は彼は全然自然派として知られたり。フロイベルの主義はエドモン・ゴンクール、ドデー、ゾラ等に非常なる影響を與へたり。自然派の衰微する今日、獨り彼ののみは尙其威名を持続す。これ一面に神光の具はるものあればなり。彼は單に寫實的なるのみならず、又實に眞に實相的なるものありしと、其明觀力は無限なりしと、彼の現象を視るや、最良の觀察家よりも明觀せること等、今や一般に承認せられたり。彼の作品は世俗に示すよりも、更に大に他の作者に示すべきものなり。彼は字彙句練して、其文體の表白を完

壁ならしめ、敢て俗流に伍して忙裡の頓作を喜ばざりき。蓋し彼は此種の作品を以て文藝に不忠實なるものと信じたるなり。英國現下の評家として有名なるエドモンド・ゴッスの所説は如上に盡きたり。左に露國の小説家にして批評家たるメレジコウスキの所論を掲げて、フローベルの天才的、病的方面を示さんとす。

## 二 メレジコウスキのフローベル論

メレジコウスキ曰く、バルザック其作中に謂へらく、天才は恐しき病なり。天才には心中に怪物ありて情操を蠶食す。天才と性格との間に平均を保つ事を得る人は偉人なり云々。惜いかな、バルザックの言は此處に止りて、天才の病原は如何、藝術的人格の發達が種々の點に於て道德的人格の發達と反比例するは何故ぞといふ詳細なる説明をなさず。何人も知るが如く、文學者、美術家、音楽家の屢、非實世間的にして、家庭に於ては嫌ふべき父たり、嫌ふべき夫たるまでに道德の壞敗せるあり。又其作中には極めて神經質なる言語を使用しながら、實生活にては屢、頑固なる利己主義者たる者あり。此美的の見方と、道德的の見方と、天才と性格と、此二

つの間の對稱の原因は必ず興味ある研究問題なるべし。

假りにラオコイソンの未路を以て例とせんに、ラオコイソんと其二子が大蛇に捕へられ煩悶せるをトロヤの市民は見る。多くの人は恐怖苦痛に迫られ、又救助せんと思ふ。臆病者は勿論手を下さず、勇らしき者は助けんとす。群集に彫刻家あり、他の騷擾し祈禱する中にありて靜觀す。此際には彼の道德的本能は全然美的好奇心に吞まれたるなり。涙を流せば見えざるべし、ラオコイソンが苦しき顔色をなすを喜ぶ。一旦翻然として我に歸りても尙印象の顯然たるものありて存す。斯かる事の度重るにつれて、常に事物を實際とは異りたる方面より觀察するに至り、過眼の事物悉く藝術製作の材料となる。空想又は觀念は鋭くなりて、道德的意志の活動鈍り來る。惡事も美しき形式の下には詩人の注意を惹き、善行も詩の材料にならずんば取るに足らぬものと見ゆるなり。

さはれ藝術家が客觀的に觀照するは他人の心持、行爲のみならず、等しく公平に自家の心持、行爲をも美的に觀照す。斯るが故に心理的なる藝術家は實際興奮せる折にも、複雑なる情操の中より偶然自他の矛盾を發見して、他人をも自家をも

信ぜざるに至る。

フローベルの書簡は此方面の研究に好箇の材料を與ふ。藝術は人生よりも高尚なりとは彼が凡ての事物に對する根本義なり。彼若き頃藝術の爲めに世を避けける折、友に與へたる書に曰く、藝術に埋れて他を避くる、不幸を遠かる唯一の道なりと。一年の後同じ友に忠告すらく、我なせる如く外界より避けよ。白熊の如くに棲め、汝の思想の外汝自身をも悪魔に與へよと。

婦人の愛も亦フローベルに取りては何等の意義だもなかりき。其許嫁の女に送りし文にいふ。否、君は余よりも我藝術を愛し給ふこそよけれ。藝術は決して御身を去らず。病も死も之を御身より奪ふこと能はず。唯一なる眞の思想を愛し給へ。眞理にして價值ある唯一のものを以て地上の愛に比較するを得べきかと。彼は詩を以て絶對的に人生より獨立せるもの、活動的よりも實在的のものと考へ居たり。

彼は人々が藝術を崇拜し、此世に眞の藝術家ありて、其人の生活及び思想が美的本能の盲目的機械たりし時代に生れざりしを悔みき。多くの藝術家にとりて美

は多少抽象的性質のものなれど、フローベルにとりては熱情ある具象對象なり。彼の製作は熟考したる自殺なり。而も狂者の熱情と、殉難者の謙遜と熱心とを以てす。モトバ、サシは彼の製作状態を詳述せり。頭下りて、顔額、頭等ぬれ、競技中の競技者の如くに體中の筋張りたり。彼は觀念又は言葉と決戦して、有意的に之を退け、或は結びて、超人的の力を以て漸々思想を纏め、遂に最後に到着す。

フローベルは一生の中、その鋭さに過ぎたる分析的傾向の破壊的なるを他人よりも多く経験したり。こは既に十七歳の折、友に與へし手紙に現れたり。曰く、我は常に解剖す。人が凡て純粹にして美なりと思へるもの、實は腐敗せるものなることを發見すれば、我は首を振りて笑ふ。我は斯く決論せり。凡ての根本は虚榮なり。吾人が良心と呼ぶものすら畢竟虚榮の隠れたる萌芽なり。慈善をなすには一部分には同情もあれど、他方には又我善をなせりてふ得意も交れり。と。彼又いふ、我は常に事物の對照を見る。小兒を見れば老年を想ひ、搖籃を見れば墓を想ひ、我妻を見れば其骸骨を想ふ。此故に幸福の光景は悲みの基なり。されど悲しき事は關係なし。外に涙の出でざるだけ内の悲みや多し。本にて讀みたる事は實在せる悲



哀よりも辛しと彼は己れの感情を親愛せる妹の墓に書きけるは、余は墓の如く冷やかなり。此故に大に煩悶す。又少年時代の友の葬式を記述せる書に、死者の身體は恐しき變化の徴候を示せり。吾等之を布にて二重に被へり。恰も埃及の木乃伊の様に見ゆ。我は其時それを見て經驗せる喜びと自由とを筆にすること能はず。霧は一面に覆ふ。森の木々は空に立てり。葬禮の燈は青白き黎明の中に輝く。鳥は轉る。我は彼の詩の一句を想ひ出だせり云々。フロイベルは全く友の死を美化し了りぬ。

エルサレムに滞在しける頃癩病患者を見に行きたることありき。其折の印象を記していふ。此處は市外の沼の傍にあり。十二人計の男女の病人一塊となりて、頭には被なく、男女の別さへ明かならず。身體には腐敗せる瘡跡あり。鼻のあるべき所は陰氣なる穴となりぬ。緑がくりたる襤褸の如きもの腕の先に懸かりたれば、眼鏡をかけて視けるに手なりき。一人の病人水を飲まんとして水邊に行く。口開きで齒齦なきを以て、上顎はつきりと見ゆ。我等の方へ足を引摺りし時、咽喉がたつきぬ。周圍の自然は静なり。流の漣、木々の緑、青春の活氣に充ちて、焼くが如き太陽

の下に涼しき天地を作れりと。此拔萃は客觀化せる小説より出せるにはあらた少しも主觀的情操を現さんとせざる友人に與へたる手紙より取りたるなり。而も斯かる憫れなる者どもを見て、憐憫又は同情の影だにも現さず。

フロイベルはジョージ・サンドに與へて言ふ、我は基督教徒にあらずと。彼は平等の觀念を嫌ひ、正義を無用とす。以爲らく、我は確信す、貧者が富者を嫉み、富者が貧者を怖るゝは、永く止む時なけん。愛の福音の如きは無用の事なりと。或友に送りし文にいふ、人間の正義ほど不安定なるものなし。隣人を批判せんとする人を見れば、我は其人を嫌ふか、憫れむか、或は大笑すべし。其研究は別として、法律ほど背理なるものはあらず。フロイベルは當時法律を研究せり。他の書翰にてフロイベルは抽象的にして乾燥なる義務の觀念は解釋するを得ず、そは人心に固有なるものにあらずと言へり。事實上フロイベルは道德上の理想を有せざりき。

フロイベル以爲らく、我が價值ありとなすものは世界に唯一つあるのみ。そは美しき律語なり。優美にして調和せる、調子のよき様式、太陽の暖かさ、好き景色、月夜、古き像、横顔の人物……我はマホメットと同じく運命論者なり。人生の進歩の爲

めに働くは無用の事たり。進歩などいふ曖昧なることを我は解せず。斯かる問題に就きて下らぬ事を聞かしめらるゝはえ堪ふべくもあらず。專政君主の昔を深く尊敬す。これのみぞ嘗つて現れたる人道中の最善なるものなる」と。ジョージ・サンドに與へたる書にいふ、我は殆ど確信を有せず。されど唯一つあり。そは世俗は愚物の集りなりと云ふこと。是なり。されば皆々とは云はじ。中には無数の見込あるものもあるをと。彼は又近世の科學をば中世の神學と同じく矛盾迷信として退けたり。ユームトの實驗哲學などは途方もなき愚なることなりと言へり。

フローベルの下層社會の觀察にいふ、如何に待遇するも、動物的人物は畢竟野獸たるに過ぎず。彼等の理想を高むることなどはなし。能ふことにあらずと。又信仰なく、道德の主義なく、政治上の理想もなきを自白して、失望の聲を揚げていふ。現代にては古き信仰を尊敬する事能はず。又新しき信仰を樹立する事能はず。我は凡てが依つて以て立つが如き觀念を求めて失敗せりと。是等の文は晩年のフローベルの態度を明示す。初めは藝術に據れり。今は藝術の依つて立つべき高き基礎を得んとせり。彼は仕事をなして忘れんとしき。されど疲るゝのみにて益、不満

足なりき。

彼は世俗を厭ひ、世俗を離れて孤影孑然たり。事既に悲劇なり。而して失望は少しづつ、彼を導いて極端に奔らしむ。或時ジョージ・サンドに送りていふ、本の手になき時、又は書かざる時は我は堪へて泣き出す。我は字義通り化石となりて、萬有との關係絶ゆるやうなる心地す。何人とも語らて幾週間も過す。一週の後、其間の特別の日又は出來事を想出すを得ず。日曜日に母と姪とに會ふ。唯夫れのみ云々。

ジョージ・サンドに送りし手紙は、何れも天才が病氣の犠牲となりし辛き自白ならざるはなし。彼は最後には唯一の慰藉たりし藝術をも捨てたり。徒に勞するのみにて作するを得ず。凡ゆるもの我を妨ぐ。他人の前にては押ゆるを得れど、獨りなる折は死ぬるかと思ふほど痙攣的に涙こぼると。晩年に至りて昔日に返らんよしもなく、さりとて己が生活を正さんよすがもなき時、フローベルは自問していふ、我美の爲めに、神、人生、人道などの信仰を破壊せり。而して其美すら世の凡べてのものと同じく、影と消えて頼むに足らざるものなりせば如何にせましや。我藝術の爲めに、生活、青春、幸福、愛などを捨てたり。而して其藝術は余が墓に入る前に

我を見捨てたりせば如何にせましや。臨終の際にいみじくも影我を包むと言ひけるミケランジロの言こそ、フロールヘルに似通ひたれ。

影は益々ゆるるなり日沈む。

痛み疲れて、今我は去らんとす。

“Is parte a mano a mano

Crescermi ognor pin l'ombra, e il sol vien mance

Et son presse a cadere, infernie e Stance.”

### 三 「マダム・ポワッリ」の梗概

ポワッリ夫人の夫シャルル・ポワッリの父親は退役の軍醫にして、大酒を好み、小供の教育などには一向無頓着なりき。母親は夫の放埒に愛相を盡かしながら、女の手一つにて家事を整へ、シャルルの行末に望を屬して頻に立派なる人物にせんものとかめ居たり。初めは村の寺院に通學せしめしが十五の折には年よりも稍、時期は遅れたれど、ルーアン町の學校に入學せしめぬ。シャルルは母の秘藏息

子にて、性來少しく愚鈍なりしが、勉強して級の中頃の位置を占めたり。木曜日には必ず赤インキにて長き手紙を母親に送りぬ。然るに三年の後には醫師にせんとして、母親は自ら退學せしめて醫學校に入學せしめんとし、知合の染屋の四階に部屋を借りて、寢臺を始め何から何まで一切新調して與へぬ。新參の醫學生は毎日講義に出て、筆記はせしかども、少しも了解すること能はず。されど一度も缺席はせざりき。去る程に漸く町の惡風に感染して茶屋酒の味も覺え、醫師の試験には見事落第せり。

親馬鹿とはいみじくも云ひけるものかな。母親は鶴首して好音を待ち、夢にもシャルルの放蕩を思はず。落第は試験官の不公平なるが爲めなりとて愛兒を勵ます。其後シャルルも大に精勵し、二度目には首尾よく及第し、トステといふ土地にて開業しき。此折も母親は萬事幹施し、年頃になりたれば早く花嫁を迎へ、初孫の顔を見んとて、財産附の未亡人エロイゼと云ふを娶らしむ。年は遠ひ、持參金もあり、シャルルは細君に頭があがらず。細君は又氣隨氣儘に振舞ふのみならず、嫉妬深くして、焼き方も尋常ならず。

或る夜夜中近くなりて六リ、七程なるレベルトより俄にシャルル先生を迎に  
來りぬ。患者はルイオウルとて有福なる農家の主人なるが、足に負傷せるなり。ル  
イオウルの娘はエムマと言ひて、後のボーヴァリイ夫人なり。シャルルが技術は頗る  
怪しきものなるが、幸にもルイオウルの負傷は幾程もなくして癒えぬ。シャルルは  
病家を見舞ふ中、漸々エムマと親しくなりぬれば、エロイゼは頻に嫉み焼きぬ。シャ  
ルルもエムマと相逢ふことをば見合せたり。然るに不圖したることよりして、エ  
ロイゼの財産が觸込ほど多からぬこと知れ、シャルルの兩親はいと立腹す。エロイ  
ゼは平生病身なりしかば、それ以來俄に吐血して死亡せり。シャルルも其時ばかり  
は悲しくて幽鬱なりしが、去る者は日々に疎きは世の習ひ、況してエムマの父は  
自らも妻に亡られたればとて深く同情し、自家に連れ行きて慰籍す。エムマとシャ  
ルルとは互に昔語りして學校時代の幼き夢に憬がれ、エムマは其折の紀念の本  
花環など示し、かば、二人の間は益々接近して相抱擁せずんば止まざるの概あり、  
遂に約婚をなすに至る。

エムマは空想に富める婦人なり。結婚するまでは人生の幸福、情熱、歡樂に耽ける

ことなどを夢想しては、果敢なき樂となし居たるが、さて結婚しけるに、シャルルの  
執拗、無遠慮、不行儀はうるさく、無能無藝にして大望なきシャルルに飽き足らず、世  
界の人を見るに、何れもシャルルの如き意氣地なきものなし。我同窓の人々の夫は  
必ず立派なる才氣ある、面白き、人好きのする、人目に立つ花々しき男子に相違な  
し。妾は何故にシャルルの如き人に嫁きたるかと思ひ内に芽しては色に出てざる  
ものなく、常に儻々勝ちにて、都會生活の華やかさ、學校時代の賞品授與式の光景  
など眼前に浮び來る。斯かる處にシャルルが療治せる緣故にてアンデルウイリル  
侯の夜會に招かる。老侯はルイ十六世の皇后の戀人なりきと唄はるゝ人にて、極  
めて社交に長じ、話も面白ければ、食堂にある間もエムマはあつと老侯の方の  
みを眺め、あの方が皇后とよ寝間を共にせられたる仁かと、感に入りて眺めつゝ  
あり、正餐終りて舞踏賑々しく始まる。徹夜の盛會も過ぎ、翌日夫と共に家に歸り  
來れば不平なること物足らぬことのみにて、益々夫に飽き足らぬ心深く、新聞を取  
りて流行界の記事を読み、ボーヴァリイの名が本屋の店前又は新聞紙上にて廣告  
せられ、吹聴せられて、フランス國中津々浦々まで知れ亘らんことを望む。斯くて

無味平板なる生活に飽き、殆ど辛抱し難くなり、覇氣なく野心なき夫、變化なく單調なる田舎の生活、一として不平の種ならぬはなし。エムマは漸く神経質になり、ヒステリーの的となり、氣むづかしくなり、機嫌悪く、顔色も蒼白に、身體も衰弱す。シャルルは風土の適せざるが爲めなりと思ひて、他の地方に移轉せんとせるが、漸く此地方の信用高まり來りたるを、今となりて移轉するは頗る辛し。されど最愛の妻エムマの病には代ふべくもあらずと決心して、斷然ヨンヱ、ユラ、ペーといふ市場町に移轉せり。以上前篇。

ヨンヱ、ユラ、ペーに着後間もなく豫て妊娠中のエムマは女兒を生みたり。シャルルの勇み喜べるに反して、エムマは子供の生れぬ前よりして氣が乗らぬ様子なりしが、女兒生れて後も所詮立派なる晴衣も着せ難ければとて、町の仕立屋にて間に合はせ物を製らしむ。證めて男の子なりせばジージと名づけて思ひ切つたる大事業をなさしめむと考ふるも、女の兒なれば如何ともし難く、名をばベルタと命じぬ。こは嘗つて侯爵邸にて聞さしことある名なるなり。去る程にエムマは土地の藥劑師のオーメーの書記レオンと云ふ若き男と相

思の仲となる。男は當世風の小才子にして小説を好みき。さればエムマは俄に眞面目になりて所帯じみたる女房となり、里子に遣りたるベルタの世話にもかひなく、しく、優しき、淑やかなる女房となりぬ。エムマは内心レオンに戀しけるが、戀ふれば戀るほど人目に立たぬやうにと心を碎く。女は男の戀て我心を覺る時節の到來すべきを思ひけるが、餘りに人前を憚るを以て男は最早諦めたるにあらずやと疑ふ。而して我ながら克己心の立派なるに驚く。されど又思ひは亂る。シャルルの少しも感附かざるは物足らぬ心地す。彼の甘たるき調子の心地悪しきよ。寧ろ打つなり蹴るなりしてくれなば、思ふ存分腹癢せもして見すべきを、シャルルの好人物なるサインロジストにはエムマも少からず心苛立つ。然るに田舎の生活に飽足らず思ひけるレオンは、老母の許を得て巴里の都に出づることゝなれり。さればエムマが許に訪れ、河梁の情を述べ、暇乞ひす。レオンは、ぢや先生はお留守なんですかと聞く。留守ですよとエムマは二度までも繰返して云ふ。言葉はなくて、互に顔を見合す。男は氣をかへて、ベルタに別れの接吻をせんことを望む。二人は互に胸の思ひを打ち明け得ず、あかぬ別れに袂を別つ。

レ・オンの去りし後エムマは毎日鬱ぎ居たり。シャルルの母親來りて、小説を讀ま  
 するを以てなりとて、之を嚴禁す。斯かる處にロドルフ・ブーランシェといふ可なり  
 有福なる三十男來る。男は獨身者にて、己が使ふる取者の出血療治を需む。ロドル  
 フは放蕩の男なり。エムマを一見してシャルルには惜き女と思ふ。ロドルフはエム  
 マを尋ぬ。エムマは顔色を變へて驚く。ロドルフは言葉を盡してエムマの憐みを  
 乞へる處に、シャルル歸り來る。ロドルフはその場を濁して、承れば奥さんが御加減  
 が悪いさうでなど言ひ繕ひ、乗馬は健康に宜しいから、自分の乗馬を一頭差し  
 上げるといふ。初の遠乗の森の中にてはエムマは未だ己が身をロドルフに任せ  
 ざりしが、されど戀人ありと思ひては心流石に若返る。爾來每晚人知れず文を通  
 はず。朝早くエムマは男の家に忍ぶ。エムマは遂に惑溺して人目に觸るゝに至る。  
 エムマの惑溺すればするほど、ロドルフは最初ほどは優しくせず、少しく厭氣に  
 なる。エムマは益々柔しくすれど、ロドルフは益々冷淡になる。後にはエムマはロドル  
 フを恐れ憚かるに至れり。此折しも故郷の父親より足の療治の御禮にとて、例年  
 の如く七面鳥の贈物來る。それには父の肉筆にてベルタの事など細々と書き、愛

に満ちたる手紙なれば、エムマは今更に故郷戀しく、己が周囲を見廻し、ベルタを  
 思ひシャルルを愛する方寧ろ幸福にあらずやと考ふ。シャルルは近頃評判の跛足の  
 新療法を試み居たりき。

斯くして折角悔悟しけるエムマが心は又もやシャルルを遠かり、ロドルフとの戀  
 再び燃ゆ。濡れざる前こそ露をも厭へ、濡れしエムマは大膽にも巻煙草を喫して、  
 天下晴れての夫婦の如く散歩に出づ。何時か村人の口端に上る。二人は驅落せん  
 とす。折柄ロドルフは突然身を蔭す。エムマ狂氣の如くなりて、それより病の床に  
 就く。悪事千里を走りて、エムマが隠くせる負債の穴あき、債鬼四方八方より攻め  
 來る。シャルルは患者を謝絶して、専心にエムマの治療をなす。負債の穴をも埋む。エ  
 ムマも本復し、以前は異りたる慈悲深き柔しき女房となる。シャルルの母親も、今度  
 こそはと心から満足す。或日シャルルはエムマを慰めんとて強ひてルーマンの芝  
 居見物にエムマを誘ふ。此處にて圖らずも昔馴染のレ・オンに逢ひ、三年前の戀  
 情は再燃す。レ・オンは今ルーマンの法律事務所に勤むる身なり。以上 上中齋  
 翌朝レ・オンはエムマの宿を尋ぬ。二人は思を三年の昔に走せて種々なる述懐

をなす。レオンは世馴れたれども未だ臆病なり。レオンはエムマの戀人となり。エムマは木曜毎にルーマンに行きては相逢ふ。金曜日の朝家に歸れば家中のもの皆彼女の心に満たず。レオンのみ染々と偲ばる。シャルルの母はエムマの負債及び其他の不仕末を感付き、立腹して村に歸る。エムマとレオンとは互に飽きて離れんとし、別れんとして腐れ縁の離るゝ能はず。債權者よりは益、嚴重に督促し來る。家政は紊亂し、家内は荒廢し、ベルタが靴下の破れをさへ繕はず。エムマは夜分は己が室に閉ぢ籠りて、シャルルを寄せ附けず。シャルルは臆病の爲めなりと思ひて、獨り心を悩ます。エムマは財産を差押へらる。萬計盡きてレオンに融通を乞ふ。レオンは躊躇して申譯をなす。エムマは事務所の金子を融通せんことを乞ふ。されど結局は要領を得ずして、勞れ果て喪心して歸宅す。エムマは自暴自棄になりたるなり。シャルルは好人物にて愈、表沙汰となりても女房を疑はず。エムマ遂に窮迫してロドルフを訪ねて助力を乞ふ。ロドルフは劍もほろゝの挨拶をなして、すげなくも之を拒絶す。エムマは果ては其身を賣らんとして失敗す。絶望の餘り病に犯され、遂に亞砒酸を服して死にぬ。エムマが未だ息を引かざる前に

兒のベルタを枕下に連れ來るあたりの描寫頗る巧みなり。

エムマの死後、シャルルはロドルフやレオンの文を見て、初めて姦通の事實を知り、絶望喪心して門を閉ぢ人に會はず、間もなく庭のベンチに凭れたるまゝ、人知れず死す。ベルタは叔母に引取られて紡績工場に通ふ。(以上下篇)  
これ「マダム・ボヴァリー」の梗概なり。

## 第六章 ツルゲーネフ

## 一 其幼時と青年時代

ヴォルガの流永へに緩く、ウラルの峰遠く連なる邊、雪唯白き茫々たる廣野に平和の幾代を眠れりしスラヴの民が、一度覺めては孜々として人文史上に活躍しけん跡こそは實に近代の由々しき誇なりけれ。森と雪と北風とウォトカ酒とに培はれし野の人々の劍に戀に燃え猛る醇なる心が我等に與ふる新しき哲學と新しき藝術とは、あはれ如何ばかり憧憬と感慨とを誘ひたりしぞ。トルストイは言はずもあれ、ツルゲーネフ、ドストイエフスキ、ゴーゴル、ゴリキ、チェーホフ、アンドレーフ、近代文學史は廣く世界の思想界に提供せられたる是等の名をば、何時にても列擧するに躊躇せざるべし。就中ツルゲーネフは其醇き情と暖き筆と數寄變轉のいと趣ある生涯と、永へに藝術の子達にとりては青き燈たらんか。

イヴァン・ツルゲーネフ (Ivan Turgenev) 一八一八年—一八八三年は露西亞の舊都モスクワの西南なるアツォール (Orel) の町に生れたり。家は富みたる貴族なりければ

幼き程は祖母が棲める閑かなる田舎の別墅に送られて穩に生ひ立ちぬ。いさゝ水古き園を走りて、白楊魚、鰻などの遊ぶ姿おかしく、榛、接骨木、忍冬、さては黒薔薇、折々の色美しく生ひ茂りて、和かにして健かなる北國の田舎の自然は、幼き詩人に如何ばかりの感銘を與へたりけむ。是等自然の色、句、響の他に、彼は二人の僕を友としたりき。一人は後西比利亞に歿したるが、哲學者の口吻もて若き公子を教へ、其後年の自由主義の萌芽を培ひ、一人は、流行外れの物語歌うたひ聞かせて、其燦爛たるべき詩想を孕みしといふ。稍、長じては家にありて獨逸語、佛蘭西語を學びしが、十五歳にして初めて出て、モスクワの大學に入り、一年にして轉じてペテルブルグの大學に赴きぬ。此處を出て、後遠く伯林に遊び、ツンプト (Zumpft) に就て古言學を、ワルデル (Wardel) に從ひて哲學を修めしが、此折學びしヘーゲルの思想は其後年の政治上の見解に影響する所少からざりしとぞ。一八四一年二十三歳にして再びペテルブルグに歸る。

之より前ツルゲーネフは其郷里に在りし頃、母が數多の農奴を虐遇するを幼き柔かき心に痛ましく覺えて、此制度に甚しき反感を抱きしが、一八二五年、所謂十



二月黨が武力を以て露西亞に憲法政治を敷かんとせし計畫脆くも敗れ、皇帝ニコラス一世赫怒して黨員を驅るや、ツルゲトネフの伯父ニコラス亦其一人として辛うじて身を以て佛國に逃れ、ツルゲトネフが伯林在留の頃は屢之に會して自由思想を鼓吹せられき。斯くて彼が年少の頃より已に芽みし悲惨なる農奴生活に對する同情と地主貴族の尊大横暴に對する反抗の念とは益々深く強くなり、遂に飽くまでも貴族生活を保存せんとする母と相容るゝ能はず、自ら之と絶つに至れり。されど一家の財政は尙母の掌中にありて、忽ち生活上の困苦を感じ、已むなく屬吏の職に就きしが、雖て之を棄て、只管文筆に従事するに至りぬ。

一八四五年處女作なる詩「パライシ」(Parasha)を公にす。時の有名なる批評家にして、會つてペテルブルグの大學にて相知りしベリンスキ(Belinsky)の賞讃する所となり、之に勵まされて四七年「ホーリツ」とカリヌイチ(Khor & Kalinytch)を出せり。これ蓋し彼が文壇的地歩を築きし第一作にして、其自然と人生とに對する精緻なる觀察と重厚なる態度とを見るべく、作者が爾後五年間の短篇二十五を集めたる「獵人日記」の卷頭を占む。一篇の旨趣は、作者が田舎に銃獵に赴きたる折、村

の小地主と知己となり、其二人の下僕の境遇性情を描寫せるに過ぎずして、所謂結構なく意匠なしと雖、淡々たる筆路、質朴正直なる二人の小作人の性格、田舎の粗野敦厚なる風俗習慣を彷彿せしむ。

一八五〇年母歿するや起ちて悉く其領土内の農奴を放免して自由の身たらしめぬ。されど頻繁たる外國の放浪生活と、此急激なる農奴解放と、一八五二年モスクヴの新聞に掲げし文豪ゴッゴルを弔ふ詞とは、太く政府當路の嫌ふ所となり、同年外遊を禁ぜられぬ。是に於て其領地に蟄居して悶々たる愁を抑えしが、五五年諸友の斡旋にて禁を解かれ、再び自由の身となつて故國を去りぬ。其追懷録は記して曰く、我社會の現状、特に吾等貴族の現状、吾は之を思ふ毎に嫌惡の情に堪へず、憤慨の念に燃えんとす。吾は到底斯くの如きに安住するを得ざるなり。吾は陳き陋しき俗習に従はんよりも寧ろ自ら殺さんことを撰ぶと。其憂憤の状況ひ見るべきにあらずや。されど我等は彼が此不幸なる數寄放浪の境遇が、偶露佛否廣く世界の文藝に如何ばかり貢獻する所ありしかを思ふて、彼の此出郷を祝せざるべからず。實に彼の之より後の半生は佛京巴里に送られ、是に彼の幾多の

大作あり、幾多の新しき藝術上の努力生れたればなり。

## 二 其佛蘭西生活

ツルゲーネフの佛蘭西生活は文藝批評家ピアルドーとの親交を以て始まる。ツルゲーネフがピアルドーと初めて相知りしは、一八四三年二十五歳の折、遊獵の途次なりき。ピアルドーは既に稍、文壇に名を得て、露西亞文學の傑品を佛譯せん企あり、其夫人又若くして文藝の嗜深く、唱歌に巧にして、此夫妻が若き薄運の詩人に與へし慰藉と奨励とは決して少からざりき。一八四七年、ピアルドーがゴリゴリの翻譯に取掛かりしよりツルゲーネフは常に其傍にありて之を助け、タラスブルバ(Taras Boulba)狂人日記(Memoires d'un Fon)昔の夫婦(Menage d'Aurefois)等を出版せり。此夫妻と共に其年伯林に遊びし事あり。此頃ツルゲーネフは甚だ資財に窮し、老僕が心遣ひの微少なるスープ、オムレツ等に饑を凌ぎ、金を得ん爲めに獵人日記の執筆に忙しかりしが、此窮境を救へるは實に此夫妻なりき。其年ピアルドーが家に彼は幾多の文星と會するを得たり。女流作家として令名

ありしツルゲーネフも、露西亞文學の翻譯に一家をなせしメリメモ、シャルル・エドモンも、皆此處に相知りしなり。後エドモンの斡旋にてサンド・ブーヴ、テオフィール・ゴチエ、ゴンクール兄弟、テヌヌ、ベルテロー、ルナン等とも交を結べるが、此處にいと興味あるは、當時の新文學の精英を以て成る所謂「五人會食會(Diners des Cinq)」の事なり。ツルゲーネフが一八五八年初めてフロロベルを知りてより、其交情餘所自にも美しく濃かなりしが、七二年フロロベルの家にてゾラ、ドーデーと知り、之にゴンクールを加へて、月毎に小やかなる料理店に集ひて友情を暖めつ。此處には多く戀と女と語られ、彼等が人世の解釋者、批判者としての修養に資するものありき。此「カフエ・リッシュ」に集ひし諸文星の會合は一八八三年ツルゲーネフの歿するまで連續したり。斯くて彼が佛蘭西生活は實に佛蘭西の文豪と握手するを得しのみならず、又獨逸のオーエルバッハ、亞米利加のハウエルス、英吉利のジョージ・エリオット等とも交を結びたり。斯く彼の外國の空氣を吸ふこと長きに及びしは、纏て稍、此作品の空氣をも更へしめ、其性格の色彩をも更へしめけんも、又其周圍に感化を與へたること少しとせず。當時佛蘭西の文壇はフロロベル、ゾラ等の精

進によりてロマンチズムの桎梏を破り、寫實主義、自然主義の勃興を見たるが、其運動の根底に身自ら偉大なる模範と應援とを與へしはツルゲーネフに他ならざりき。古き技巧、古き形式を棄て、直ちに自然に行き、あるが儘の人生に行くべきを身を以て教へしはツルゲーネフに他ならざりき。佛蘭西自然主義は彼に負ふ處少からずといふべし。斯くて彼は西歐羅巴の透明なる空氣と芳烈なる美酒と、誠實なる友情との間に晩年を送りしが、一八八〇年ブーシキンの祭祀に列する爲め故國に歸り、其翌年又故山を訪ひしが、一八八三年、巴里の近郊ブーシバルなるフレネーにてピアルドの別墅に逝きぬ。齡實に六十五。

### 三 藝術家としての其特色

ゴーゴリを享けて露西亞自然主義の建設の巨匠たりし彼、五人會食會に列して佛蘭西自然主義の教導の一人たりし彼、藝術家としてのツルゲーネフの特色や如何。佛の文星ルナンが此僚友の棺前に追悼演説をなせる中に、彼は全人類の權化なり。全世界は彼の心裡に住み、其口をかりて思想を發表せりといへるは、蓋し

最も高價に彼を評價せるものなるべきか。丁抹の有名なる文藝批評家ゲオルグ・ブランドスが彼を以て眞の詩人たるべき能力即ち活人生を活寫すべき能力を備へたる大藝術家なりとし、讀者をして其描寫する人物に就て作者自ら感ずる興味判斷と讀者が描かれたる人物より受くる感銘との調和一致を感ぜしむと言ひ、バルザックを読み、デッケンスを読み、オーエルバハを読んで、果してツルゲーネフに接せし時の如き調和と一致とを感じ得るかと問ひ、彼等は讀者の驚異の感を刺激せんとして特に幼稚平凡に描かんとすれど、讀者は直ちに其處に一種の明かなる技巧を認む。而もツルゲーネフに至りては斯くの如き事なしと斷じ、且つ彼の作品に流るゝ一種の厭世的傾向に關して曰く、ツルゲーネフが心には憂鬱の流れ深く深く漲れり。されば其作到る處に其現れたるを見る。彼の描寫は客觀的沒個性的なりしと雖、其作中主觀と個性との影の侵入するを禁じ得ざりき。而して彼の個性は悲哀なり、感情に托げられざる悲哀なり。ツルゲーネフは自ら全く感情に打ち委す事なく、却つて常に之を抑えたり。近代の小説家にして彼の如く悲哀に充てる心を有するものなし。ラテン人種例へばレオバルデ、フォーレ

ル等の悲哀は外面的なり。獨逸の悲哀は常に感情に耽りて哀傷す。ツルゲーネフの悲哀や是等と全く類を異にし、實在その者を哀む。スラヴの弱點そのもの、悲惨その者を悲む憂愁なり。實にツルゲーネフの悲哀やスラヴ人種の俚歌民謠に唱はれし悲哀と共に、同人種の心性の根柢に横はる悲哀なり。ゴッホルの悲哀は絶望よりし、ドストイエフスキの悲哀は腐敗墮落の輩殊に罪囚に對する同情憐愍よりし、トルストイの悲哀は其宗教上の宿命説よりす。獨りツルゲーネフは哲人なり。彼は人間を愛せり。人間を研むること深きにあらず、信ずること厚きにあらずしと雖、彼は人間を愛せりと。

此ブランドスの言は概ね肯綮にあたるものと言ふべし。ツルゲーネフが一八四五年初めて文壇の人たりしより死に至るまで略四十年、其間露西亞の社會は三轉して常に舊き衣を脱ぎて新しき生活に入れり。彼は此過渡期に其銳利なる觀察眼を注いで時代精神を捉へ、時代を代表し表徴する人間を描き、精微縹渺たる技巧を以て偉大なる藝術品を作成したり。

彼が一度一個の人生問題を描かんとするや、之を考察するに論理的にせず、抽象

的にせず、現實的にし具體的にしたり。斯くて人生觀察、材料結撰の上に新機軸を出したる彼は、其技巧に於ても在來の修辭を棄て、只管に内容に適應する形式を工夫したり。内容と外形との間些の虚飾と些の誇張と些の銜氣と些の隙隙とをなからしめんとせり。斯くて彼の短篇は言はずもあれ、*新地* (Virgin Soil) の如き長篇すら、結構なく、脚色なく、意匠なし。されば興味と刺激とを中心としたる作物が故らに事件と感情とを作りて讀者を苛立たせんとするが如き趣は彼の作には見出されざるべし。たゞ活人生、眞の人間生活に没入して、低徊顧眄、滋々として掬すべきが如く掬すべからざるが如き一脈の情調を味はしめらるゝ、是のみ。斯くの如く人生を如實に寫し、現實生活の情味を味はしむるは歐洲近代文學一般の特色にして、ツルゲーネフは此特色を最も能く發揮したるものなり。

#### 四 其六大傑作

如上説き來りたる所によりて、藝術の人ツルゲーネフの生涯と其藝術の特質とを稍、知り得たれば、之より轉じて其藝術その者に一瞥を與へんとす。蓋し藝術の

人を解するに其藝術を捉ふるは道の最も自然なるものなればなり。

ツルゲイネフが前後四十餘年の藝術家としての生活は言ふまでもなく數多の作品を産みたりしと雖、其中量に於て質に於て大作と認め傑作と許されたるものは六を數ふべし。ルーデン「貴族の巢」其前夜「父と子」煙「新地」即ち是なり。ツルゲイネフが概ね題材を現實に得んとせるは已に述べたり。又一事を描かんとして常に其周圍を見るを怠らざりしことも前に説きたり。我等は此六大傑作が自から當時の社會問題を扱ひたる所謂社會小説なりしを怪まず。

ルーデンは彼の社會小説の最も早く生まれたるものにして、其中に描かれたる社會は一八四〇年代の露西亞なり。當時ニコラス一世の暴虐なる政治の下に壓迫されし社會は幾多の畸形兒を産出したたり。この専制君主政體に反對の思想を有するもの、或は祖國の現在と未來とを想ふて愀々の情抑え難きもの、皆共に其理想の行はれざるを知りて政界に望を絶ち、現實を離れたる空想の世界に遊び、藝術、哲學、宗教の考察に身を委ぬるに至り、失意の人相集まりては大言壯語自ら快とせり。斯くの如きは獨り學生間に於てのみならず、苟くも知識ある人々

の間において、是皆ありたる事にして、彼等は斯く哲學的思索を恣にし、藝術的冥想に耽れる間に、何時しか實務に疎きものとなり、了せり。ルーデンは實に斯くの如き階級の一人の戀と其周圍とを描けり。

此作の主人公はルーデンてふ男にて、女主人公はナターリアてふ少女なり。而して二人の戀を中心として、當時の露西亞の社會を描けり。當時の露西亞には農奴制度と云ふものあり、これ貴族地主等が多くの百姓を奴隸として使役する制度にて、百姓は些の自由をも與へられざりき。而して貴族等は安逸無事なる生活を送り居たり。此作の女主人公たるナターリアは斯くの如き地主の寡婦の家に生れし一人娘にして、幼より萬事内輪に、而して又貴族的に育てられたり。ルーデンは或る年の夏、此少女の家に寓し圖らずもナターリアと戀に落ちたり。ナターリアは未だ十七の少女にて、ルーデンが時に大言壯語し、又は詩情に富める辯舌を恣にするのを聞き、何時しか彼を慕ふに至り、二人は遂に結婚の約束を結びぬ。然るに此事何時しかナターリアの母の知る處となり、ナターリアは烈しき叱責を蒙りたり。されど少女心に深く思ひ詰めたる彼女は中々に男を思ひ斷る能は

ず、篤と男の意見を確めんとてルーヂンを或る近郊の森に誘ひ、之より共に驅落せんことを勧めたり。然るにルーヂンは之を拒絶したり。これルーヂンが常に口でこそ大言壯語し、情熱あるもの、如く言ひながら、其實心は極めて冷かなるを以てなり。即ちルーヂンは口の人にして手の人にあらず、言説の人にして實行の人にあらざるに困るなり。此後ルーヂンはナターリアと別れ、所々を放浪して遂に落魄の中に其生涯を終りぬ。以上を「ルーヂンの梗概」とす。

ツルゲーネフは即ち斯くの如き口の人にして手の人にあらずる人間、言説の人にして實行の人にあらずる人間を描きたり。而して斯くの如く手の人にあらずして口の人、人は當時の社會を通じて認めらるべき露西亞の一大現象なりしなり。ツルゲーネフは此外に「マコフ・バシニコフ」「無用人日記」「ハウスト」及び「アーシヤ」などの諸篇にて、何れもルーヂンと同様なる人間を描きぬ。ツルゲーネフの作の時代と離しては了解し難きは之が爲めなり。

次に六大傑作中彼の第二の作なる「貴族の巢」に就て一言すべし。此作の出でたるは一八五八年にして「ルーヂン」とは十年を距つ、従つて當時の時代精神も亦多少

の變更を來さざるを得ざりき。前にも一言せる如く、ルーヂンは口の人にして手の人にあらずりき。空想家夢想家にして實行家にあらずりき。四〇年代が去りて五〇年代となるに及びては、斯くの如き空想家夢想家は追々跡を絶ちて、時の青年も次第に實行的態度を取るに至れり。ツルゲーネフは此作「貴族の巢」に於て即ち斯かる傾向の人間を描けるなり。

此五〇年代に於て露西亞に一の新しき現象生れぬ。即ち所謂スラヴ民族統一主義 (Slavophilism) の勃興是なり。スラヴ・フィリズムは一の國家主義なり。此主義の要とする處は西歐の諸文明を咒ひて自國の文明を貴しとする處にあり。以爲らく我露西亞の文明は純粹の文明なり。西歐の文明は今や腐敗墮落の頂天に達したり。我露西亞の文明は現在に於てこそ多少は西歐の文明に感化されし處ありと雖、過去に於ては却つて西歐の文明を指導したりき。我等は今や腐敗したる西歐の文明を捨て、純粹なる露西亞過去の文明を復活せしめざるべからず。蓋し現時に於て如上露西亞生粹の文明は獨り之を百姓の間に於てのみ見るを得べし。露西亞の貴族社會及び上流社會は等しく西歐の文明に影響されて腐敗しつゝあり。

我等若し純なる露西亞文明を求むんには正に百姓の群に赴かざるべからずと。斯くして此主義を奉ずるものは皆民間に入る (Titiv Narod) の一語を口にしたなり。五〇年代は實に斯くの如き國民主義が一代を支配したる時と云ふべし。ツルゲ  
「ネフ」亦此作に於て斯くの如き思潮を描けり。

「貴族の巢」の主人公をラフレッキと稱し、又上述の國民主義を奉じたる一人なり。此前の作に於けるルーデンは口を極めて情熱ある言葉を逞うし、切りに自由を口にし、其自由と云ひ情熱と云ふもの、要するに彼ルーデンが多くは書籍の上より得來るものにて、百姓の群に交はる如きは到底彼の能くする處にあらざりき。ルーデンの非實際的、空想的なるに比すれば、此作の主人公ラフレッキは實に實際的、活動的の男子なり。但し茲に活動的と謂ふは、一切の空想を没し去るの謂にあらず、彼にも確に又一面空想的の性格を認め得べしと雖、彼は之にのみ執着せずして、更に進んで其空想を實現せんとしたるなり。即ちラフレッキは口と手との人、説と實行との人たるなり。ルーデンの長所を取りて更に其缺點を補ひたる人間なり。然しながら彼も亦悲惨なる運命を免れ得ざりき。彼は佛蘭西滞在

中、バンシンとなん呼ぶ華美好きの一女子と結婚したりしが、新夫婦は琴瑟相和すること能はず、遂に相別れて男は露西亞に歸り、此處にて又もやリザなる一女と通ぜり。然るに既に離縁したるバレシンは意外にも露西亞に彼を訪ひ來れば、彼とリザとの戀は爲めに遂げられずして、リザは遂に尼寺に入るに至れり。リザは此小説の女主人公にして、其性格は全然バンシンとは反對なり。彼女は元と貴族の出にて能く佛蘭西語に通じ、又巧にピアノを弾ずるも、幼よりして露西亞生粹の百姓女に育て上げられたれば、其思想感情は極めて平民的にして極めて單純に、随つて其道德觀念の如きも更に他の田婦と撰ぶ處なかりき。彼女は自己を犠牲にするを以て婦人の道と心得たり。彼女の尼寺に入りしは之が爲めなり。蓋しツルゲ「ネフ」の數多き女性描寫の中にて、リザの描寫は最も成功せるものにして、古今の文學中此點に於て最も價值ありとせらるゝなり。

次に六大傑作中の第三作「其前夜」一八六〇年作に就きて一言すべし。此作も亦五〇年代の同じ傾向の思潮を描きたるものにて、作の中心人物を極めて活動的なる女主人公エレンとす。彼はモスクヴァの某貴族の家に生れし女子なるが、其家庭

生活の餘りに無味乾燥なるに飽きて、切りに活動の世界を望みたり。彼其日記の一節に書して曰く、善なるのみにては未だ完しと云ふべからず。善をなすことこそは人世に於ける真に偉大なる事業なれと。以て彼の活動的なる一般を知り得べし。彼女に愛を寄せたるものに、シーピン、ベルセーテフ、及びインサロフと云ふ三人の男あり。シーピンは彫刻家、ベルセーテフは後に大學教授となりし當時有望の大學生にして、インサロフはブルガリア亡國の志士なりき。然るにヘレンは前の二人に行かずして、却つて其身をインサロフに寄せたり。これインサロフが三人中最も活動的にして百難を凌ぎて自國の恢復を計らんとするの勇氣勃々たればなり。斯くてヘレンは終に人知れず、インサロフと夫婦の約束を結びぬ。然るに之を探知せるヘレンの父親は大に憤り、母は又泣いて其約を撤せしめんとしたれど、ヘレンは聽かず、インサロフと相携へて終に露西亞を出奔したり。

以上は此作の梗概なり。蓋し當時斯くの如き活動的の露西亞婦人は所謂若き露西亞の自由の爲めに狂奔せしなり。露西亞の近代史は實に斯くの如き女性の目醒しき活動によりて一般の光彩を添へたるものにして、ヘレンの如きは實に其

一人なりしなり。

次はツルゲノフ自身も第一の傑作と許し、世間亦爾く認めたる六大傑作中の第四の作「父と子」(一八六二年)に就て一言すべし。ルーヂン以下之まで述べ來れる諸作は何れも其時代を離れては了解し難きものなりと雖、此性質は「父と子」に於て殊に著し。此作は主として五〇年代の末より六〇年代に涉りて露西亞全國に瀰漫したる所謂虛無主義を描けるものなればなり。

破壊主義と虛無主義とは往々にして同一視さるゝを常とするも、二者は元來其内容を異にし、前者は後者よりも其意義極めて狭し。即ち前者は重に政治上の主義に過ぎざるも、後者は寧ろ思想上人生觀上の主義と解すべし。破壊主義は其名の示す如くに、法律上の諸制度の一切を破壊し去らんとするものなるが、虛無主義はなほ遙に其歩を進めて、道德、宗教、及び習慣等の一切のものを信ぜざらんとするなり。即ち所謂文明を認めざるものたるなり。

此小説の主人公バザロフは實に斯くの如き虛無主義者の一人なりき。此作中の重要人物はバザロフの外に、ペテル・ペトロウイッチ、及び其弟ニコライ・ペトロウイッチ



の二人なり。ツルゲーネフは此二人を以て舊思想即ち在來の文物制度を信奉する人物を代表せしめ、バザロフを以て新思想即ち在來の文明を認めざる虛無主義の人間を代表せしめたり。即ち此小説の興味は全く新舊思想の衝突即ち父と子の關係に存すと云ふべきなり。

上に掲げし二人の兄弟の中、弟ニコライは少年時代にゲーテ、シルレルなどを愛讀せる程ありて、多少狂氣染みたる空想家なるも、其代りに極めて實務に疎く、田舎に埋もれて閑暇なる地主生活を送り居たり。されど己れの子供及び其子の友なるバザロフに向ひては、決して己れの時勢に後れざる事を示さんとて、強ひて新しき言葉を用ひ、勉めて新思想にも通曉せる如く装へり。其兄なるペテロは之に反して全く利己中心の男にて、今はニコラスと同じく地主生活に安逸を貪り居るも、其青年時代には多少交際場裡にも入りたる事ありと云ふ。彼は社會の法則國家の命令、教會の信仰個條などには一も二もなく服従するを以て人間の義務と思惟し居たれば、バザロフの如き虛無主義者は彼の最も嫌惡する所にして、彼が遂にバザロフと決闘するに至れるも自然の事と云ふべし。

之を父と子の大要とす。虛無主義を小説の材料に取り入れしは露西亞に於てはツルゲーネフを以て初となす。其後小説家のゴンチャロフは其作「崖」に於て、又ドストエフスキイは其作「惡魔」に於て何れも虛無主義者を描きたるが、是等の中にてツルゲーネフのバザロフを以て最も實在の人物に近しと評せらる。これツルゲーネフが實際實在の人物をモデルとして、バザロフを描きたるによるべし。ツルゲーネフ自ら語りて曰く、吾の父と子をか書んと思ひ立ちしは一八六〇年の八月にて、ベントノルの海水浴場に滯遊せる時なりき。吾は今まで屢、吾の小説が實在の人物を描けるにあらずして、單に自己の思想を書きたるものと云ふ非難を受けしが、吾は決して斯くの如く自己一個の思想を以て小説の人物を描ける事なく、必ず實在の人物をモデルとするを常とせり。父と子の場合に於ても然りき。主人なるバザロフは此地方の青年ドクトルにして、此ドクトルこそ今の新思想たる虛無主義を代表するものと思はれたりき云々と。ツルゲーネフの此言は偶、以て彼が小説家としての態度を知り得る好材料たるのみならず、明かに此作「父と子」の由來を知るべきものなり。

「父と子」一度世に出づるや、露西亞の讀書界は前代未聞の騷擾を極め、毀譽褒貶の聲四方に起れり。されど之を憂むるものは極めて少くして、寧ろ世を擧げて皆彼を罵るの有様なりき。舊思想の人間はツルゲーチフを以て虛無主義者なりと罵り、新思想の青年等は、吾等青年等は此作に描かれし如き虛無主義者にあらずと言へり。されど當時に文學批評家ビザレフの言ふ處によれば、バザロフは實際當時の青年の代表者なりき。ツルゲーチフは舊思想の人々の云へるが如き虛無主義者にあらずしは言ふまでもなしと雖、彼の少くとも之に同情を有せしものなることは争ふべからざるが如し。彼が後年或人に書き送りたる手紙の中に曰く、余はバザロフなるタイプを實際ある儘に少しも偽らず描けり。されど寧ろ之に同情して描けりと。彼又多くの批評家の嘲罵に對して答へて曰く、バザロフには一面粗野の質の存するは疑なきも同時に、彼には又賞すべき一面の性格あり。讀者にしてバザロフを読んで動かさるゝ事なくば、そは全く余が筆力の足らざるに原因す。されど如何ほど讀者の氣に入ればとて、バザロフを更により多く愛すべき人間に作り更ふることは余の到底なし得ざる所なりと。以てツルゲーチ

フの一面作家としての態度を窺ひ得ると共に、一面バザロフ即ち虛無主義者に對するの態度をも窺ひ得べし。ツルゲーチフは確に虛無主義者に同情し、之を愛せり。但し茲に云ふ同情及び愛は彼の心の底より出でし愛即ち感情より出でし愛にあらずして、寧ろ知識より生ぜる愛なり。換言すればツルゲーチフは他くまでも事實を事實として愛せるなり。冷に事實を觀照して、斯かる思潮も要するに時代が生める一現象なりとして之を愛せるなり。彼は他くまでも藝術家的にバザロフを愛せるものなり。若し彼が感情より之を愛せりとすれば、彼は必ず藝術家の域を脱して身自ら虛無主義者となり、乃至は革命黨とならざるを得ざりしなるべし。觀照的態度、他くまでも彼が取りたる此觀照的態度こそ、彼をして十九世紀中の否古今を通じての大作家たらしめたるものと云ふべきなれ。

次に「煙」(一八六七年作)及び「新地」(一九七六年作)の二篇を評せんに、二篇は共に上記の四大傑作に比して劣れり。煙は極めて陰鬱にして、落寞沈滞せる當時の社會状態を描きたるものにて、作の主人公はイレインなる女性とす。彼女は利己の念強く、自己の利益の爲めには其戀せる男をも振捨つる程の意氣組なれども、尙亦切

に男を戀せずんば満足するを得ざるが如き一種の性格を有する女なり。所謂男  
蕩らしと云ふべき女性なり。此作はイレーンの性格を描寫するに於ては盡せり  
と雖、其全篇の調子は六〇年代を描かけるものとしては未だ極めて不完全なり。  
六〇年代の實際的露西亞社會は決して此作に描かれたるが如き暗黒なるもの  
にあらざりしなり。

六大傑作中の最後の作なる「新地」は彼の最大長篇なるが、これ亦「煙」と同様の非難  
を受くるを免れず。こは前にも一言せる如く、民間に入ると云ふ思想の高潮を描  
かんとせるものなれども、惜いかな、真相の描寫なく、僅に此思潮の起り始めたる  
當初の社會の描かれたるに過ぎず。主人公「ズダノフ」は作者自身の知人をモデ  
ルとしたるを以て多少實在の人物らし、と雖、其他數多き人物に至りては凡て  
作者の想像になれるが如き觀あり。革命に狂奔せる當時の實際の人物とは極め  
て隔絶したるものなり。是等の非難に對してツルゲーテフを辯護するものは説  
をなして、斯くの如くツルゲーテフが當時の實際社會を描き得ざりしは、彼が全  
く當時佛蘭西に滞在すること多くして、自國の實際社會に接する機會の少かり

し自然の勢ひとして止むを得ざるに出づと言へり。これ亦一理ありと云ふべし。  
ツルゲーテフ自らも亦之を悟り、親しく露西亞の實際社會に接して活きたる社  
會を活現せる小説を作らんと、の意志の盛なるものありしも、不幸にして一八八  
三年、脊髓神經の病に罹りて歿し、遂に其志を果すこと能はざりき。

##### 五 其 哲 學

藝術家、作家としてのツルゲーテフは以上六大傑作によりて譽、窺ふを得べし。今  
暫らく哲學者、論客としてのツルゲーテフを一瞥すべし。之には、彼の有名なる論  
文の講演「ハムレット」及び「ドンキホーテ」が最好の研究材料なり。ハムレットは云ふま  
でもなく、十六世紀の英國の大詩人「シェイクスピア」の作「ハムレット」の主人公にして、  
「ドンキホーテ」は之と同時代なる「西班牙」の大詩人「セルバンテス」の傑作「ドンキホ  
ーテ」の主人公なり。ハムレットとドンキホーテとは互に相反せる性格を有するも  
のなるが、ツルゲーテフは一切の人間をば凡て必ずハムレットか、然らざればドン  
キホーテか、何れかの一方に屬するものなりと考へたり。彼は此二人物を解剖批

評して曰く、ドンキホーテは一身を献じ、自己の理想に向つて邁進し、理想の爲めには一切の障害艱難をも斥け、一身を殺すことすらも辭せざらんとす。彼に取りては生命は唯その理想を實現し、その眞理正義を發揮せんと勉むるの點に於てのみ價值あるなり。彼は唯同胞人間の爲めに存在す。之に害ある一切のものは彼の敵なり。されば彼は事に當つて恐るゝことなく、自ら鹿衣粗食に甘んじ邁往して屈せず、謙讓自ら持するも、その心は極めて尊大にして又極めて大膽なり。ハムレットは之に反す。彼の事に當りて第一に取る處は解剖分析と自己中心主義となり。故に彼は何等の信仰をも有せず。彼の此世に存するは唯自己の爲めにのみ。彼は尙森羅萬象の一切を疑ひ、之を解決せんが爲めには一身を捨つることすらも惜まず。彼は餘りに知識ありて之が爲め己れ自らを信ずる能はず。明かに自己の弱點、缺點を感知するも、自意識強烈に過ぎ、爲めに往々にして己れ自らを嘲罵するに至る。ドンキホーテの熱烈なると正反對なるを見るべしと。之をツルゲーネフが「ハムレット」及び「ドンキホーテ」の要旨となす。ツルゲーネフは斯くして總ての人間を「ハムレット」式の人及び「ドンキホーテ」式の二つに別ちぬ。彼自らは言ふまで

もなくハムレット式の人なりしが、彼は一面にハムレットを愛しながら、一面又ドンキホーテを尊敬したりき。即ち彼は實行の人を尊び、思索の人を愛したるなり。以て彼の人生觀の一面を推知すべきなり。

#### 六 其晩年の諸作

彼は社會小説の外に神祕小説をもものせり。これ彼が晩年太く其健康を害して多くは身を病床に横ふるを常とし、従つて活社會を觀察するを得ざりし爲めに、空想の世界乃至は内面的靈的世界に其觀察眼を向くるに至れる結果とこそは知らるゝなれ。最も好き代表作は「クラ、ミリッチ」、「幻影」、「戀の勝鬨」、「夢」等にして、何れも一八七八年以後のものなり。クラ、ミリッチは有名なる當時の某女優が悲慘の最後を遂げたるに材を得しものにして、晩年の作中最も長篇なり。戀の勝鬨は伊太利十六世紀の物語りにて、フビオてふ畫家とミジオてふ音樂家とが共に一人の少女を戀ひし、少女はフビオに靡きたるより、戀を失ひたるミジオは鬱悒の餘り遠く印度に至りしが、其處にて不思議なる魔術を習ひ得て數年の後伊太利に

歸り、其魔術を以て遂に少女を吾有としたり。爰に於てミジオとフビオとの間に種々の葛藤あり、遂にミジオはフビオの爲めに殺さるるてふ極めて面白き物語にして、全篇を貫きて魔術が作用する所にえも云はぬ夢幻的なる趣を認め得べし。此外、幻影、夢、何れも優艶にして讀者をして空想的神秘的なる情趣を味はしむ。又同じく夢幻的、空想的にてありながら、其中に哲理を含めるものもなきにあらず。是等は何れも其散文詩の中に於て見出さる。散文詩は一八七七年より一八八二年までの彼が折々の感想録とも云ふべきもの數十篇を集めたるものなり。篇中の「老婆」「乞食」「薔薇」等何れも詩趣豊かなるものにして、又篇中の「犬」「自然」の二篇は最も哲學的のものと評せらる。犬の梗概は左の如し。我る嵐烈しき日、彼と犬とは差向ひにて一室に籠り居たるに、犬はつくづく彼の眼を見詰むるまゝ、彼も亦つくづくと犬の眼を凝視したり。犬は何事をか彼に呷かんとしてをせず。彼此時以爲らく犬と吾と其眼には同じき光輝けり。所詮彼我の區別あるべからず。人間と謂ひ獸類と云ふも、まことは同じ自然の兒に外ならずと悟れりと云ふにあり。これ明かにツルゲーネフの自然觀を窺ひ得る最好の材料なりと見るべきなり。即

ち彼は一切平等、自他一體、萬物皆自然の兒にして、其間に些かの優劣もあるべからずと見たるなり。自然の一篇は云ふまでもなく、散文詩全體を貫くものは實に彼が斯くの如き、自然觀にあらざるはなし。

以上簡約ながらツルゲーネフの大家作家なる所以を評傳したり。最後に此大藝術家の我國の文壇に及ぼせる影響に就て一言せんに、其影響たる頗る大なるものありしなり。初めに此大藝術家を我國に紹介したるは長谷川二葉亭なり。二葉亭は明治二十一年頃の國民の友に早くもツルゲーネフの「獵人日記」中の「あひびさ」を翻譯して、當時の文壇を騒がせたるを初めとして、神祕物語の内なる「夢」及び「アーシア」「ルーチン」等を二十年代に於て悉く翻譯し、當時の日本文壇に多大の貢獻をなしたり。今日有名なる我國の作家にして事實ツルゲーネフの感化影響を蒙らざりしもの殆ど之なしと云ふも過言にあらず。二葉亭の優雅にして艶麗なる筆致のツルゲーネフの紹介者として、極めて其人を得たるものなりしは亦爰に云ふまでもなし。

## 第七章 モーパッサン

## 一 小傳

アンリ・ルネ・アルベール・ギョー・モーパッサン (Albert Guy de Maupassant 一八五〇年—一八九〇年) は佛蘭西の小説家なり。一八五〇年八月五日、佛國のディープの附近シャトール・デ・モワロンニール (Château de Maironnières) にて地頭の館に生れき。父は株式仲間なり。モーパッサンはイブトールとルツマンとの二校にて教育を受け、海軍省の官吏となりしが、資性疎懶にして規則的生活に適せず、久しからずして退きぬ。此官吏生活の記念は「遺産」(L'Heritage)、「家庭」(En Famille) となりぬ。

一八七〇年、普佛戦争始まるや、退職軍人となりて従軍しき。これ其二十歳の時なり。従軍中の経験は「肉團子」(Boule de Suif)、「マダム嬢」(Mademoiselle Fifi) 以下の好短篇となりぬ。

役終りて後、文部省に入り、高位の椅子を領しぬ。此頃は極めて體育に熱心にして、太くボートを好みき。後年モーパッサンの記せる「水上」と云ふ紀行あり。こは佛蘭西

の南海を快艇にて航せる紀行文にして、其船名を「ベル・アミー」と稱し、自己が作品の名稱に取りたるは恰もゾラがメダン村莊の池に泛べし小舟を「ナ」と呼びたるが如し。

モーパッサンの母は自然派の開祖として、當時の小説界に雄視せるフロイベルと親交ありしかば、彼はフロイベルに師事しき。此時露國の名士ツルゲーネフとも交はりぬ。當時フロイベル教訓すらく、總ての物皆異れり、その異なる點を捉へて明瞭に描寫するを小説家とは言ふなり。例へば此處に乘合馬車の馭者の一人ありとす。その馭者が斯くの如き衣服を着、斯くの如き容貌を有して、斯くの如き舉動をなすものなり。同じ馭者百人あるも千人あるもよし、其一人は其中にて他の馭者と異りて、判然截然たるものあるを示すは小説家たるに最も必要なる條件なりと。

フロイベル又曰く、文學は或事を説明すべきものなるが、其或事を説明するに適當なる文字は唯一なり。されば其適當なる文字を得るまでは推敲せよと。

一八八〇年頃初めて「詩集」(Des Vers) を公にせり。此詩集には凡そ二十篇餘の詩あり。

りて、多くは物語風のものなり、而して措辭華麗而も調子は大胆なりと云はる。此書不幸にして發賣を禁止せられ、之が爲めに世評は却つて高まりぬ。フロロベルは其作「マダム・ボツァリ」が同じ運命に遭へるを以て、其好運を祝したりと云ふ。此後モロバッサンはゾラ、ユイスマン、セラ、ホル、アレキシス等と共に、メダンのまどろみを出しぬ。モロバッサンは此中に「肉團子」の一篇をものしぬ。こは前にも云へるが如く、普佛戦争中の一事件にして、主人公が肥満せる肉團子なりしを以て、斯くは命名せるものなり。

彼は此作以前はギロド・ヴルモンてふ匿名にて著作せるが、これ以來は堂々本名を署し、モロバッサンは佛文壇の寵兒となりぬ。其著左の如し。

- La Maison Teller (1881), Mlle Fifi (1883), La saure Rondolè (1884), Yvette (1884),  
Contes du jour et de la nuit (1885), Contes et nouvelles (1888), Le Horla (1887),  
La père Nilon (1889), Une Vie (1885), Bel Ami (1887), Mont-Oriol (1885),  
Pierre et Jean (1888), Fort Comme la Mort (1887), Notre Cœur (1890),

等あり。彼が一生は好く其作品に現れたり。其郷土ノルマンデーの風光生活は、婦

人の一生 (Une Vie) 其他に「肉團子」フアン、嬢等には普佛戦争當時の生活憐むべき官吏の生活は「遺産」と「家庭」とに「色男 (Bel Ami)」には新聞記者の裏面を描き「仇花 (L'Innuitie Beauté)」イット、嬢 (Yvette) 「人心 (Notre Coeur)」等には巴里の華やかなる生活を描き「嬢 (Monche)」「ホルの情人 (La Femme de Paul)」遠足 (Une Partie de Campagne) にはセーヌ河上の清遊を描き「死の如く強し」(Fort Comme la Mort) には青年時代の眼病より來れる精神錯亂を描き「オルラ (Le Horla)」彼 (Lui) 「誰か知る」(Qui Sait?) 二篇に至りて益、其傾向著しさを示して、慘絶凄絶と稱せられ、オリオールの山 (Mont-Oriol) には嘗つて病を養ひたるオーベルン州の温泉場を描きぬ。

彼は漫遊を好み、足跡歐亞を印しき。ブルターニ、コルシカ島、伊太利、亞弗利加、及び地中海の沿岸各處に遊びて、諸の感想に打たれ、其觀光の結果は「沙漠の女 (Alloume)」 「一宵 (Un Soir)」 「山賊 (Vaudette)」等の諸短篇の外、三卷の紀行となりぬ。一八八一年に探險せる亞弗利加の冒險談は「日の國 (Au Soleil)」に詳しく、一八八五年地中海邊より伊太利の獅子島に到れる紀行は「放浪 (La Vie Errante)」の一卷なり。而してモロバッサンが巴里を去つてノルマンデーに歸り、エトルタの片田舎に別墅を築きて

故郷の友と或は語り、或は獵し、或は釣り、或は字煮句練に餘念なかりしが、痼疾漸く重く、遂に人間界の繁雜を厭ひ、穢土を厭離せんとし、母の南方ニースに獨居せるを以て、地中海濱に至り、一隻の快艇に乗じて波上に漂ひたる日記あり。此日記は斷片的にして毫も連絡なきものなり。日記は即ち「水の上」(On the Water)なり。モーパーサンが愛好せし快艇の名は前にも言へるが如く「ベル・アミー」と云ふ名稱なるが、彼が此快艇を愛好せる哀れなる物語あり。一八九二年の一月、ニースなる母を訪ひて後、其旅宿たるカンの家に歸るや、遂に敢なき最後を遂げて自殺したりしが、其親友某は彼が意識の尙正しきや否やを知らんとて、彼を濱邊に伴ひ、鏡の如き波上靜に浮べる快艇を示したるに、彼は物こそ言ひ得ざれ、眼を見張り唇を顫はし、而して友の彼を促して濱邊を去らんとするや、彼は残り惜げに幾度となく彼方の快艇——「ベル・アミー」——を顧み、徘徊回望去るに忍びざるが如くなりすと云ふ。左に「水の上」の一節を抜萃してモーパーサンが文體を示すべし。

アゲー

四月八日

「晴れたり、君よ」

吾は起き出て、甲板に昇れり。午前三時、限りなき空は燈火點々たる潤き圓天井の影にも似たり。微風陸地より來る。珈琲の熱きを啜りて、吾等は順風の一時だも仇にせじとて出發す。

波の上を滑り行きて忽ち大海の面に出れば、沿岸は隠れて暗夜の中一物の眼に映ずるなし。萬物より遠かりて、水の上、寂々の境空々たる夜中に進み行く。爽快と不安との感覺、感激の妙方に此時にあり。身は人の世に遠かりて、而も何處の岸邊にも達する事なく、夜も亦決して明くる事なきが如く感ぜずや。吾足許なる小き燈は進路を示すコンパスを照らす。日出る時、何方にも吹く風あらば、ドラモンとルアの岬を廻りて岸に添ひ、少くも三海里を走らざるべからず。不測の災禍なからん爲め、左舷には赤く、右舷には綠色したる燈を點じて、吾は恍惚として響なく絶間なき靜安の逸走を喜ぶ。

忽ち前方に一聲あり。われ戦く聲近し。されど目に入るものは吾を包み吾の後を遮る暗々たる闇の壁のみ。見張の船子レモンは言ふ、西の方に走る地中海の帆舟あり、吾等は其船尾の方を過ぎ行くべしと。



突如として朦朧たる恐しの怪物は近く屹立しぬ。高き帆の暗き影揺めくよと見る間もなく消え失せにき。海の夜に閃めき過ぐる是等の怪物ほど變幻極りなく恐しきものはあらず。漁夫、砂掘の人達は絶えて舟に灯を點すことなければ、人は危く相觸れんとする際ならてはそを認むること能はず。測るべからざる出會を思ひては胸引絞めらるゝ心地す。

遙に鳥の鳴く音を聞きぬ。近く來り過ぎて又遠し。如何なれば吾も亦其聲の如く彷徨ふことを得ざる。

黎明は雲もなくして徐ろに來れり。日はついて出てぬ。眞の夏の日なりき。

レ・モンは疑もなく東の風吹くべしと云ひしかど、ベルナルは依然として西の風を言張り、行方を換へて遙に聳ゆるドラモンの山を左に進まんと忠告す。吾は須臾にして其言ふ所に従ひたり。惱める如き軟風に従ひて舟はエストレルの港に近づく。岸壁の赤き影落つる處、青き水は紫紺の色をなせり。長汀の眺めは幾多の岬、無數の入江に岩石の可憐又豪放なる山姿の萬化を盡して、奇異突兀又佳麗なり。

岸壁の中腹に生じたる松の林は、城廓、市街、要塞などにも見違ふばかり。巖々相倚りたる石山の頂まで上れり。海は其麓に澄み渡りて、波の底なる彼處には砂此處には藻草の繁れるさへ見分け得べし。

斯くの如く山海の景に憧れて、自然の風光に憧憬し歎美し驚異せるモーバッサンが胸中は、宛ら狂へる浪の如く毫も靜安なかりき。

われ時として、山水、人物、思想の單調不變なるに對して、深甚の苦惱を感ずるや、死を想ふに至つて愕然として自ら戰くことあり。宇宙の凡庸は吾を驚かし、吾を憤らしめ、萬物の倭少は嫌惡を以て吾身を包み、人類の貧弱は寧ろ吾をして呆然たらしむ。

されど又吾は時として野獸の如くに欣喜踴躍することもあり。吾悶々の情懷は勞作によりて過敏となり、人の世のものとも覺えぬ種々の望みに馳すると雖、遂に寧ろ寂滅の虛無に如かざることを思ひては、世に抗ひ世を蔑むに及び、吾獸的の肉身は恍として唯生息の快感に酔はんとす。吾は鳥の如くに大空を愛し、彷徨ふ狼の如くに森を愛し、山鹿の如くに巖岬を愛す。横はり走らんが爲

めには馬の如くに茂れる野草を愛し、泳がんで爲めには魚の如くに澄める水を愛す。吾はその體內に凡ゆる獸類は愚か、更に劣等なる生物の本能と混亂せる慾情との蠢くを覺ゆ。吾の土壤を愛するは生物の土壤に於けるが如く、決して諸君人間のそを愛するが如きものにあらず。吾は何等の賞美するなく、詩化するなく、平然として土壤を愛するなり。獸的にして而も深重に、賤むべくして尙神聖なる愛情もて、吾は活けるもの、生ずるもの、目に觸るゝものゝ凡てを愛す。日夜、川、海、嵐、森、曉、婦女の眼、婦女の肉、是等は吾心を安んぜしむると共に、吾眼吾肉身を亂さしむればなり。

砂の上、岩の頂きに坐して流るゝ水に抱かるゝ時、想は動き柔げらる。風に追はれて波に運ばるゝことを知る時、歡喜の情措く能はざるは、全く天然野生の力に吾を委ね、原始の生活に復歸し得たるが故ならずや。

日は麗かに今日の如くに晴れ渡れば、吾は身中に豪慢放逸なる老牧神が血の流るゝを感ず。吾は已に人間の兄弟にはあらずして萬象の兄弟たり。

以て彼が懊惱の一端を知るを得べし。斯くして自然派の勇士、肉派の戰士は、悲慘

なる最後を遂げたるなり。左に其作品を評隲して、彼が思想の變轉を窺はんとす。

## 二 「婦人の一生」

「婦人の一生」は傑作なり。嘗にモーパーサン集中に並びなき傑作なるのみならず、恐らくユーゴーの「レミゼラブル」以來、佛蘭西小説中の傑作ならん。天才の激しき注意力が其描寫せる人生中に全く新なるものを認めたる上に、眞の藝術上の作品に缺くべからざる三特質——道德的關係、表現の明晰、眞摯——は殆ど同一の程度に於て悉く此一篇の中に備はれり。

此一篇に於て作者の眼に映じたる人生の意味は男女の種々なる淫行の中にあらず。茲に描寫せられたるは其題號の示すが如く人生にして、無邪氣なる心優しき一婦人の哀れなる生涯なり。其生涯は陋しき動物慾に打壞されながらも、心は常に善良なる方に傾けり。文も完全なり。殊に作者は心よりその描寫せる善良なる家族を愛し、而して此憐むべき家族より幸福と平和とを奪ひて、その女主人公の生涯を汚せる陋しき輕薄者を憎むの趣見ゆ。事件と人物とはありくくと生け

るが如し、氣弱く心善くして病身なる母親、正直温順にして立派なる父親、純潔樸直、善行にのみ心を傾くる美しき娘、この一家の有様、その初めての旅行、召使、隣家の人、さては狡き陋しき貪慾なる氣の僻める傲慢なる男、巧にこの一家に取り入りて、口先ばかりの甘言もて早くも此世馴れぬ娘の心を惑はし、戀て結婚するに至る、其結婚の場の有様、コルシカの景色の美はしき描寫、婿は見る／＼毒手を延ばして財産を搔き亂さんとし、斯くて舅と婿との間に一場の葛藤起る。されども人善しの舅は負けて、勝利は遂に悪人に歸す。——凡て是等の錯雜せる様々の人物事件は、到る處生ける人生の面影を宿す。此複雑なる人生の描寫は如何にも美しく、宛然紙上に躍如たるが上に、全篇を貫通して流るゝ情の籠りたる一種悲哀の調子は、楚々として讀者の心に迫り來る趣あり。作者は確に此婦人を愛せり。否その婦人の容貌にはあらず、其心、其胸中の美しき光を慕ふて、共に苦み共に悲む。其情は自然讀者の心に移り來りて、坐ろに感に打たるゝと同時に、何故に又何の爲めに此美しき人は零落の非運に沈むか、又如何にして斯くあらざるべからざるかの疑問は、自から讀者の心に起りて、人生の意味を考へざるを得ざらしむ。

### 三「色男」

「色男」は眞個に穢れたる作品なり。モーパッサンは茲に充分の自由を以て其觸目の事物を描寫したるが、されど此作は「婦人の一生」と同じく其根柢には極めて眞面目なる思想と感情との流るゝを見る。婦人の一生にては男の陋しき情慾に汚されたる美しき人の殘酷にして無意味なる苦痛の生涯を藉りて、此人生の紛糾を描寫することが其根本觀念たり。然るに「色男」に至れば、唯此人生の紛糾といふ事のみならず、其陋しき私慾のみの動物が、巧に社會の高位に達して富と榮とを恣にせる有様に對し、又斯くの如き動物に成功の花を與ふる社會全體の衰微に對して、明かに一種の憤激の情現れたり。前には、何故、何の爲めに、此美しき人が零落の非運に沈むか、其原因は何ぞやと問はんとせる作者は、此小説に於て其解答を與へんとせり。以爲らく今の社會にては一切の淨き者、善き者は既に氓び、又將に氓びんとせり。何とならば此社會は汚れ、狂ひ、且つ恐しきを以てなり」と。

此小説の最後の結婚式の場、レジオン・ド・ヌールの勳章に飾られたる勝ち誇れ

る悪人が、年寄れる善良なる母親を誑かして、純潔花の如き其娘と立派なる教會にて擧げたる結婚式、僧正は之が爲めに祝福を祈り、世間の人は何れも正しき美しきものと思へり。——作者は此一場の描寫に非常なる力もて人生に對する件の觀念を表せり。試に年老ひたる詩人と若きデロワ(Duroy)とが、食後の對話を讀め、老詩人は此人生を若き友人の眼前に露出し、人生と永久必至の仲間たる死をば宛らに描き出せり。

「そは已に我に取着けり、其惡魔がと彼は死てふ事を暗示して斯く言へり。

「そは已に吾齒を振ひ落し、髮の毛を引き抜き、手足を動かざるやうにし、今にも一呑みに呑み込まむとす。吾を其手より逃るゝこと能はざるものと見て、恰も猫の鼠を扱かふ如くに吾を弄ぶなり。名譽とや、富とや、——夫等は何するものぞ。それにては婦人の心を買ひ得ざるなり。人間の生けるは何と言ひても女の爲めなり。然るを死はそれを奪ひ去るなり。それを奪ひ去りて、夫れより順に健康力、生命を奪ひ去る。何人にては然り。然り、皆斯くの如くなり。」

老詩人の話は斯くの如し。此話がデロワの耳に入らざるにあらねど、争てか婦人

にちやほや言はれ、婦人の愛に成功せる此青春の活力に充ち満ちたる青年の心を動かし得ん。心此處にあらざれば或は聞き或は聞かず、或は解し或は解せず、之を聞く間も解する間も、己が身は諸行無常の真理にすら風馬牛なるばかり、意馬心猿は狂ひ始めたり。

斯く人生内部の矛盾を説破せる所、其全體の諷刺の色と相待つて此小説の特色をなすなり。即ちモーパッサンの人生に對する道德的關係は其小説の上にては他くまでも正當の路を失へりとは見えざれども、此後の諸作に至れば次第に亂れ來り、種々なる現象に對する評價動搖して曖昧模糊となり、最後の小説に至りて全然正反對となる。

#### 四 「オリオルの山」其他の作

オリオルの山(Mont-Oriol)にてモーパッサンは繁華なる温泉場を描寫して談話縱横の態を極めたり。其筋書は恰も先の「婦人の一生」と「色男」とを並せたるが如く、婦人の一生の主人公と同型のパウルといふ小人に、「色男」の女主人公を思出さしむ

る弱き温順しき淋しき同情すべき婦人あり。此婦人其無情なる男に誑され、操を汚され、憎むべき小人勝を制すと言ふにあり。是に至りては描寫上の作者の道德的態度は、婦人の一生よりも極めて低し。作者が心中善惡に對する評價は確に狂ひ來りしなり。ピエールとジュアン(Pierre et Jean)「ノール・コム・ラ・モール」(Fort Comme La Mort)「人心」(Noire Coeur)等に至れば益甚し。こは確にモイバッサンの名が文壇の流行兒として持囃されたる頃より起りたる事にして、彼は恐しき誘惑の犠牲となりたるなり。ピエールとジュアンの母は終生その良人を欺き通しぬ。而して今己が子の前にて一生の懺悔をなす時には少しく同情せしめられたれども、幸福の爲めなりとて己が不義を辯護するに至つては殆ど言語道斷と云はざるを得ず。ノール・コム・ラ・モールの主人公は其友人を欺きて、其妻を姦し、一生姦淫を恣にせる後最早年老ひて己が妻の伴れ子を自由にするに能ざるを悲むものなり。最後の「人心」に至りては兩性の愛のさまざまなる種類を描ける外、殆ど内に潜める何等の目的だになし。ピエールとジュアンと「人心」とには尙少しく人心を感動せしむるものあらざるにしもあらねど、ノール・コム・ラ・モールに至つてはたゞ惡感を催すのみなり。

のみなり。

モイバッサンが其最初の小説「婦人の一生」の中に提出せる疑問は左の如かりき。

茲に善良なる賢き愛らしき婦人ありて、其心は常に善行に向へり。然るに此婦人は或る理由よりして一旦陋しき僻める愚なる野獸の如き男の犠牲となりし爲め、次ぎには其性質を受けたる我子の爲めに苦められ、遂に一生浮む瀬もなく、此世に何物をも残さずして死に果つ。こは抑如何なる理由なりや。

此疑問を提出せる作者は何等の答案をも與へざりき。然れども彼の小説の全體一即ち女主人公に對する作者の同情と、女主人公の生涯を汚したる者に對する非難とは、既に此疑問に對する充分なる答案なり。若し此世に一人にても其苦みを解して之を表現するものあらば、それにて其苦みは贖はれたるものと言ふべし。第二の小説「色男」に至れば疑問は最早何故に罪なき者は苦むかにはあらずして、何故に悪人が富と名とを得るかなり。作者は又別に明答を與へざれど、前と同じく此場合にも疑問その者が一種の答案をなすなり。然るに「オリオルの山」に至れば是等の疑問は最早影さへも留めず。佳人は常に薄命なるもの、惡漢は常に榮

ゆるものと獨り合點し居る趣あり。更に轉じて其次なる二作「ビエールとジアン」及び「フール・コム・ラ・モール」に及びては全篇殆ど姦淫、誦詐其他の凡ゆる不徳より成りて、何等の道徳をも其中に認むべくもあらず。

最後の小説「人心」に表れたる人物の境遇は最も奇怪なる最も野蠻なる不道徳極るものにて、茲に至れば其人物は最早心中何等の苦む所なく、他くまでも果敢なき肉官、肉慾の満足を逐ふて陋しき劣情の快樂に耽るを以て、それを寫す作者の同情ある筆致は、讀過一番たゞ／＼卑猥なる觀念を與ふるに過ぎず。この最後の小説より得來る所の觀察は、人生の最大幸福は畢竟兩性の交りにあり、従つて人は出來るだけ最も愉快なる方法にてこの幸福を取るべしと云ふにあり。斯くの如き不道徳なる觀念は又「イヴ・ハート」(Yvette)の一篇にも現れたり。これは男子が少女の操を汚すことを精細に描寫せるに外ならず。

モイパッサンは明かに當代の多くの藝術家と相通せる考を有しき。即ち藝術上にては善惡に對して別に明晰なる觀念を定むる必要なし。否、藝術家は却て斯くの如き道徳上の問題を考ふべからずと。これは當時巴里は勿論歐洲到る處の藝術家

に泌み込みたる考にて、モイパッサンも亦其一人なり。此理に従へば藝術家の務は人生の眞を寫すにあり。たゞ事實をありの儘に描く。その事實が美しきを以て、そが我心を喜ばすを以て描寫するものなり。既に眞を寫すが藝術ならば、藝術は又直ちに「科學」の材料にも用ひらるゝものならざるべからず。如何なるものが道徳にて、如何なるものが不道徳なりや、如何なるものが正にして、如何なるものが不正なりやなど考ふることは、決して藝術家の天職にあらずと。モイパッサン自ら其「ビエールとジアン」の序文に記して曰く、作者は始終斯くの如き注文を受く、慰めよ、樂ましめよ、悲ましめよ。此胸を打ちて思に沈ましめよ、笑はしめよ、震ひ上らせよ、泣かしめよ、考へさせよと。されど汝の氣に入りし形式にて、何にても宜し、美なるものを作れと藝術家に注文するは、たゞ／＼或る一部の讀者に限らる云々。實にモイパッサンの作は何れも此一部の讀者(Chosen Minds)の要求を充さんが爲めに作られたるものにて、彼は自己一類の趣味を堅く持して、其認めて美となすもの、即ち藝術の仕ふべき美其ものなりと確信するものなり。モイパッサン一類の思想に依れば、藝術が必ず仕ふべき美の中にて最も主なるものは婦人と兩性の交と

なり。婦人と言へば若き美麗なる殊に裸體を貴ぶ。之を主張するはモリパッサンが藝術上の同人即ち畫家、彫刻家、小説家、詩人のみならず、新代の哲學者と云ひ、指導者と言はるゝ側にも亦尠しとせざるなり。

## 第八章 ゴラ

### 一 少壯時代

エミール・ゴラ(Emile Zola)一八四〇年—一九〇二年は一八四〇年四月二日巴里に生る。母は純粹なる佛人なれど、父の血統には伊太利人と希臘人との血液を混じたり。さればゴラは遺傳的にラテン人種特有の性質を有したり。此一事ゴラが人物製作を論議せんとする者の最も留意すべき所なり。ゴラが三歳の時、父は家を舉げてマルセイユ港附近のエルクス市に移住しき。ゴラの父は工業技師にして、市の溝渠の鑿通に従事せるなり。ゴラ七歳の折、父歿して、母は憐むべき寡婦となり、親戚の間にも不幸起りて、ゴラの母は里方の兩親をも養はざるべからずなりぬ。自然派の作者は若くして早くも人生を暗黒視すべき運命を荷へり。彼は他の多くの文豪の如く、二葉より香ばしき英才にはあざりき。彼は七歳の頃までは二十六文字すらも十分に記憶せざりし低脳兒たりしなり。彼は十八歳まで中學

に學び、科學を好み、ユトゴト、ミッセ、バルザック、フロロベル、テロヌ等の詩を愛し、最もテロヌに私淑せり。彼はロマンチストなりしなり。當時ゾラは貧困にして一家辛く飢渴を免るゝ有様にて、十八歳の頃巴里に歸り、亡友の厚意にて、巴里中學に入りたるが、文章以外には得意なる學科なかりき。一年餘にして試問に應じて口答試験に落第し、後マルセーユ大學に入らんとして龍門に登る能はず。さる程にゾラは孱弱き母の針仕事に依頼して生活するに忍びず、其好める學校生活を廢して、糊口の爲めに税關吏となり薄給を得て生計の補助となしぬ。

久しからずして税關の制度は改革せられ、不幸にも彼は免職せられたり。彼は何等の目的もなく、何の職業もなく、巴里の市中を彷徨せり。彼の囊中は空しく饑渴交、至る。されどゾラは毫も意に介する事なく、屢、ルクサンブールの公園にて作詩を試みたり。一日寒氣凜烈なる折、ゾラはバンテノンスクエアの腰掛に倚りて瞑想しつゝありしに、彼の知れる一少女寒氣に慄ひ齒を鳴らしつゝ近寄り來りて曰く、妾が懐には最早一錢もなく、食はざること既に二十四時間なり」と。ゾラは答へて、余も亦同様なり」と言ひ、暫時沈思の後その上衣を脱ぎ、之を少女に渡して、之

を以て古着商の店に行き給へ、一食の代は得らるべし」と。斯くて彼は其唯一の上衣を與へ、襯衣一枚となり、寒風に吹れつゝ僑居に歸りぬ。ゾラが二十歳より一年半の間は生活頗る慘憺たるものあり。後年ゾラ當時を追想して、至苦なりしも至樂なる放浪生活なりと言ひしかど、多くは麵麩と芋とを食ひて飢を凌ぎ、偶、一個の蠟燭を得れば夜學の友を得し心地にて天にも昇る思なりきと。以て其苦學を見るべし。一八六二年後父の親友の盡力にてアセット出版會社に庸はれ、發送係となれり。彼は晝間は書籍の荷造發送に忙段せられ、夜間は事務界より退きて詩人となり、私かに數十篇の詩を作り、之を社長アセットに示せり。アセットは識見博く、且つ趣味深き人なれば、忽ち其才幹を看破したれど、同時に氏は詩人と出版業とを兼ねる能はざるを説き、一を選びて他を捨つべきを以てせり。是に於てゾラは糊口の爲めに暫し作詩を廢し、専心職業を勉勵せるを以て、アセットはゾラの地位を進めて上級の書記となし、年俸三千法を與へたり。

されど彼は生れながらの文學者なり。實業界の功名手柄も亦彼の情火を満足せしむるに足らず。彼は閑を竊んで、多くの短篇小説を作り、題して「コント・アニオン」



(Contes a Ninon)と言ひて世に公にせり。此作は意外にも讀書社會の注意を惹き、ゾラは一躍して文界の人となりぬ。ゾラは此機に乗じて、フィガロ新聞の記者たらんとせり。時に主筆ヴィユメッサン氏は才人を集むるに汲々たりしを以て、直ちに彼を抜擢して新刊紹介係となせり。斯くてゾラは實業界を退き、又ロマンチズムに別れたり。ゾラは南人の熱火と北人の固執とを以て、猛烈に理想派と戦へり。自ら真理と確信する所の爲めに戦ふて勇敢なる事、ゾラの如きは稀なり。彼は自然主義のナポレオンなり。終始一貫よく、其主義の爲めに健闘して、之に裏切するることなかりき。

ゾラは眞精神、眞現象を示さんが爲めに傳説をも世評をも顧慮せずして、大膽に誠實に其所信を行へり。彼は決して嶄新なる事を書かず、又奇抜なる事をも書かず。唯世人の熟知せる事柄の真相を描かんとせるなり。自然と人生とを誠實に寫さんとせるなり。

ゾラがロマンチズムを棄て、自然主義に奔せ参じたる時は、自然主義の思潮が佛文壇に洋溢して、青年文士美術家等が争ふて之に棹したる頃なりき。フロ

ベル及びゴンクール等は自然なるものは凡て藝術的價值ありとなし、理想化せられたる人生よりも誠實に描寫せられたる世事人情は却つて眞美を發揮すとして、猥褻なる心情も不道德なる行爲も忌憚する所なく描きて小説となしぬ。畫家クザンヌ及びマチーは大に理想派を嘲笑し、印象的繪畫を描きてサロンより排斥せられ、益々激昂して四派の大家を攻撃しつゝありき。是等の少壯藝術家は皆ゾラの友人にして、彼は又クールベ、ゾランチ、ドーデー等と交はれり。ドーデーは他の流派を奉じたれど、下層の心情と生活との眞實を描寫する小説家詩人なるべからざるを説き、下等社會を理想化する詩人を攻撃せり。ゾラは實際巴里の最下等の社會の中に住み、他の小説家の知らざる所を知りしが故に、彼は最も眞實に人間の一面を描き得しなり。偏僻と想像とは眞實を寫す能はず。理想派の描寫する人生は人生にあらず。ゾラは人間に向つて人間の眞實——裸體の眞實を知らしめざるべからずと確信せり。而して彼は自然派の鼻祖となれり。彼の友人は或は小説にて或は繪畫にて自然派の敵と戦ひ、ゾラは日刊新聞によりて戦へり。されば舊派の攻撃は殆どゾラが一身に蝟集し、彼が筆鋒は愈々銳利を

加へ來り、彼は新派中の最も劇烈なるものとして目せられたり。恰もカサニヤクがボナパチズムの爲めに戦ひ、ロシヤが社会主義共産主義の爲めに戦ひたるが如く、渾身の精力を揮つて縦横奮闘せり。一八六七年、ゾラは「フィガロ」新聞の主筆の命により、巴里繪畫博覽會の批評を試みたり。彼は勇しく論陣を進めて先づ舊派の攻撃より、延いて佛國藝苑の名畫に及び、論鋒劇烈、大に舊派の怒を買ひ、さしもの「フィガロ」新聞も八方よりの論難に抗し兼ねて、遂に四回にてゾラの論評を中止するに至れり。彼は同時に解雇せられ、職を失ひて貧しき生活をなし、下等社會の罪惡及び苦難を實見し、他日の取材となしぬ。

辭職後、ゾラは貧困と苦闘したる後、再び或る新聞社に入りたれど、其論評の劇烈なるが爲め、永く在職する能はず。後彼は幾多の新聞社に入れど、同じ理由にて永續せざりき。例へば「ル・コレール」の如きはゾラの論文の爲めに發行禁止の厄運に遭逢せる事なれば、巴里廣しと雖、ゾラの論文を掲載する所なく、生活は益々困難となり、彼は再び小説に筆を染め、遂に小説家として一生を終るに至れり。

此時ゾラは一の希望を有せり。それは數年間金錢の缺乏を感ぜずして、小説の著述

に従事せんとすること。是なり。ゾラの描かんとする所は遺傳の法則に支配せらるゝ人間社會の描寫なり。彼は此希望を達せんとして出版業者「クロワ」を訪ひ、二十卷の叢書を以て第二帝國時代を舞臺として小説を書かんとする計畫を述べ出版を引受けしめたり。斯くてゾラは十年間毎月五百法づゝ「クロワ」より受取り、毎年二冊の小説を書くべきことを契約せり。之よりゾラは鶏と兎とを友とする静閑なる田園生活をなし、其夢想を實現して思ふが儘に小説の構思に耽ることを得たり。

## 二 ゾラの人物

ゾラが「クロワ」會社と契約せる二十卷の叢書、即ちバルザックの流を掬みたる「ル・ゴン・マ・カール」(Les Rougon-Macquart)の著作に従事し、僅に二卷を公にせる時「クロワ」會社は失敗して解散し、彼は空しく其大計畫を畫餅となさざるを得ざるに會しぬ。されど「シャルパンチ」と呼ぶ若くして大膽なる書林あり、「クロワ」會社の責任を引受け、ゾラをして後願の慮なからしめたり。

ゾラは性來遲筆なりしかば、契約通りに約束の原稿を引渡すこと能はず、されど生計の費用は契約通りに受取りしかば、三年目の終には彼は一萬法の債務を負ふに至れり。一日書林の主人は書を裁して來訪を乞ひぬ。ゾラは心中私かに安からず。蓋し債務の嚴談を受くべく豫期せるを以てなり。何ぞ計らん、面會すれば豫期に反して主人は大にゾラを優遇し、且つ曰く、余は貴下の小説によりて多額の利益を收めたり、余は貴下が已むを得ず締結せられたる契約によりて獨り利益を占むるを好まず。願くは契約を改正せしめよ。而して其初めに溯りて効力を有せしめよ。貴下は余に負ふ所一錢もなし、却つて余は貴下に對して一萬法を負ふ。此處に一萬法あり、之を領收せられよ」と。同時にツルゲーテフはゾラをして露國の一評論雜誌に寄書せしむる事とせり。さればゾラは出版業者と露國の雜誌社とより得る所の歳入は一年平均二萬法に及べり。

ゾラ筆を執つて論評すれば舊思想、舊信仰を破壊して所論劇烈に、小説を書きては凡ゆる惡徳をも淫猥なる事をも毫も忌憚なく描寫せしを以て、其人格を疑ふ人あらんも、彼は天性頗る善良なる人物にして、友に交はるに親切に、信義を重ん

じたるを以て大に友人に敬愛せられたり。彼の私生活は田舎の聖僧の生活に似たり。彼の日常生活は頗る規則的にして單調なるものなり。彼は毎朝同じ時刻に起き、同じ紙數の小説を書きたり。彼は怠慢して豫定の小説をかざる事なく、又神來若くは慾望に乗じて豫定以上の紙數を書く事なかりき。ゾラは常に豫定の行動を取りたるなり。

彼は一日を二分して、午前には小説を書き、午後には評論を書きたり。自鳴鐘十二時を報ずれば、彼の姿は必ず食堂に現れ、長時間を費してゆる／＼食事をなせり。彼は名に負ふ大食家なりき。食後彼は長椅子に倚りて午睡せり。眠醒ればゾラは小説家にあらずして評論家なり。而して鋭利なる論說をもて戯曲を論じ、繪畫を評し、或は政治又は社會に關する論議を試み、之を露國に送れり。彼は其評論に對して佛國の社會が甚しく激昂するを怪めり。而して常に冷然として謂へらく、彼等をして勝手に余の事業を攻撃せしめよ。これ彼等の權利なり。而して余も亦自ら思考する所を自由に吐露する權利を有すと。

彼の小説も絶えず劇しく攻撃せられたり。而して彼を攻撃するものは佛國に於

ける舊派のみならず、世界の各地に散在せり。道學先生は彼の小説を以て人心を墮落せしむるものとなし、彼の小説を排斥するは道德に對する防禦なりと考へたり。ゾラにして其取材に留意せば、彼の小説は歓迎せられしなるべし。されど彼は文學者として賞讃せられんよりは、其主義によりて佛國の中等社會を改革せんと欲せり。而して全力を注ぎて、彼等の罪惡を描寫しき。

ゾラは劇しく攻撃せられたり。されど彼を攻撃するものは彼の小説を精讀せざるものにして、眞の文學批評家の多くは彼を以て不道德家となさざるのみならず、佛國小説家中の最大なる道德家となす。彼は罪惡を描けども、罪惡を以て人心を誘惑せざるなり。彼の描ける罪惡は其香氣を放たずして、臭氣を散ず。彼が描寫せる人間の實相を觀たるものは罪惡の恐るべきを悟り、自ら靈魂をその渦中に投ぜざらんとするの貴なる感情を起して、卷を閉ぢざる能はず。ゾラは大膽に罪惡を活動せしめて、讀者の心に不道德に對する反感の起るを禁じ得ざらしむ。ゾラの小説を半ば繙きて之を足下に擲ち、不道德小説家の名を與へんとせるもの、通讀精讀卷を蔽ふて瞑想すれば、其眞價を認識すること難からざるべし。

### 三 ゾラと社交

ゾラは交際社會に出るを好まざりき。彼の敵は言ふ、これ彼の容貌風采の美ならざりしに加へて、彼が頗る會話に拙なりしが爲め、交際社會にて人に蔑視せらるゝを恐れしが故なりと。こは餘りに酷評なり。彼が交際を好まざりしは、蓋し其思想と生活とを交際社會の調子に合はず事の煩に堪へざりしが故ならん。彼は其友シャルパンチエの家に至りて、食事を共にする外、他人の饗應の招待は悉く謝絶して受けざりき。彼は會話に拙なりしと雖、頗る談論に長じ、親友と會して談語興に入る時は、或は手足を動かし、或は起ち、或は座し、少しも靜止する能はざりき。彼は食事を終れば、直ちに快眠を貪るの習慣を有せり。而して一晝夜に少くとも十二時間睡らざらば、彼の精神は爽快なる能はざりき。彼は人を訪問する事を好まざりしも、友人の來訪を好み、ゾラの最も親密なりしはフロイベルにして、屢々彼を訪へるは、ドーデー、ゴンクール、マチー、及び少數の青年文學者と藝術家なりき。ツルゲーネフ、フロイベル、ゴンクール、ゾラ等は、毎月一回朝餐を共にし、食卓を

圍んで大に文藝を論評せり。彼等は談論佳境に入れば半日以上食卓を離れざり  
 きとぞ。ゾラはフローベルを自然派の首領として尊敬せしが、實際の首領はゾラ  
 にして、彼は自然派の責任を双肩に負ひ、敵の攻撃を一身に集めて奮闘せり。彼が  
 大に劇戦せしは自己の名聲の爲めにあらずして、友人を敵の攻撃より救はんが  
 爲めなりき。人或は彼を目して虚名を好める傲慢なる人物とし、彼の論戦を以て  
 他人の名譽を毀損して自己の功名を顯さんとするものとす。ゾラと共にフイガロ  
 「新聞に執筆せるウアルフの如き、ゾラの幾分を理解せしに拘らず、ゾラ氏の夢想  
 なる一文を草し、彼の傲慢と虚榮心とを罵れり。乃ちゾラは之に答へて曰く、  
 同じ新聞に職を共にしたる貴下よ。貴下は余を以て虚名を欲する事甚しきも  
 のとなすか。余が筆にする所は悉く余が虚榮心の發揮にして、余は己が虚名の  
 爲めに同胞文士を傷害しつゝあるか。貴下が余を月旦せられし言の何ぞ夫れ  
 奇怪なる。願くは余をして茲に少しく言ふ所あらしめよ。  
 余は自ら思ふ所を忌憚なく吐露す。而も余が言は果して野心家の言なるか。人  
 の低唱する所を高聲に叫ぶものは必ず四圍に敵を作らざるべからず。報酬と

榮譽とを忘れずんば忌憚なき言論をなすこと能はず。野心あるものは其言行  
 大に柔軟ならざるべからず。余豈に之を知らざるものならんや。貴下の叙述せ  
 られたる所はユーゴー若くはクールベールの夢想にして、ゾラの夢想にあらず。  
 余は唯一の理想の爲めに戦ふ兵士なるのみ。余は常に同じ立場に於て畫家、戯  
 曲家、及び小説家を批判す。故に名聲を思ふの暇あらずして、忌憚なく叫ばざる  
 を得ざるなり。嗚呼余は貴下の想像せらるゝが如き強き人物にあらず。余は數  
 週間自ら白痴の如くに感じ、吾原稿を悉く破棄せんとして過したることあり。  
 余の如く自信弱く、自ら疑つて煩悶する人間は少かるべし。余は一種の熱に冒  
 されて執筆す。されど余が書く所久しからずして自ら満足すべからざるもの  
 となるべしとの掛念常に余が胸裡にあり。

一八七八年十二月二十三日

ゾラ

#### 四 如何にして小説を書きしか

ゾラは如何にして小説を書きしか、彼自ら語りて曰く、

余は小説を書かんとする時、卷中に如何なることを起し、如何なる人物を出し、如何に始め、如何に終るべきかを考へずして、先づ主人公の性格を明かに吾心裡に描く事に専念し、其性格を寫し出さんが爲めに、其人物の氣質と、其生れたる家族と、其受けたる感化と、其住める境遇とを深く考へ、而して次に主人公の關係すべき人物の性質、習慣、職業、境遇等を研究す。此研究によりて小説中に書くべきこと自から定まるなり。若し第一流の劇場の光景を描き、第一等の料理屋の有様を書かざるべからざる時は、余は是等の場所を熟知するに至るまで之を實地觀察するに力めたり。斯くて二三ヶ月間熱心に研究觀察すれば、余は描かんとする所の生活状態を知悉し、其眞の色彩と眞の香氣とを吾小説に與ふるを得るに至る。殊に余が描く所の社會は吾生涯と最も密接なる關係を有する社會にして、余は重に吾心裡に活きたる記憶を筆端に喚び起せしが故に、余の描きし人生は、眞實の人生にして空想の人生にあらず。余が活きたる記憶を喚び出すは容易なれども、記憶を綴り合はすべき糸を求むるは困難なり。余は之を綴るに空想の糸を以てせずして論理の紐を以てす。余は如何なる小事

にても、之より論理的に自然的に又必然的に生ずべき結果を有するを信ずるが故に、人の性格及びその境遇より來る所の結果を示すは余の最も苦心する所なり。余はかの些少なる手掛りより、探りく／＼て複雑なる關係を辿り、遂に秘密なる大罪を發見する探偵と同じ方法によりて小説を作る。若し如何にしても事實の關係を發見する能はざる時は、余は之に就て思考するを廢止す。何とならば余は必ず其關係の發見せらるべきを信ずると同時に、時來らずんば發見し難きを知るが故なり。斯くて三四日も経ちて後、天氣爽快なる朝、食卓に座しつゝある時前に搜し出す事能はざりし關係の糸不意に發見せられ、凡ての困難忽ち除去せらる。

事柄の關係未だ發見せられず、困難胸に蹠る間は、何となく不安の感あるも、困難の悉く消ゆると共に心は平和を回復し、余が仕事より苦しき分子は全く失せて、殘る所は唯筆を執りて書く事の氣樂なる業のみ。余は殆ど一字も消さずして原稿を書き、書き終れば印刷せられ終るまで一回も讀まず。余は毎日三頁づゝ書くが故に、余の小説は何日間に書かれたるか、正確に計算するを得。余は

「ユンヌ・パージュダムール」に六ヶ月を費し、「ラッソモワ」には一年を費せり云々。ゾラが著作法は斯くの如し。斯くしてゾラは一八九三年「パスカル博士(Dr. Pascal)」を著し、其契約せる叢書「ルイゴシ・マッカル」を終れり。此年ゾラは新聞記者會の招待を受けて倫敦に赴き一場の演説をなしたり。此叢書中最も傑出せる作物は言ふまでもなく「ラッソモワ」「ジャルミナル」にして、「ナ」は初版五萬五千部を印刷したりといふ。讀書社界の好奇心を挑發せる知るべし。佛國出版界のレコードを破れるもの。此叢書は小説家としてのゾラが地位を決定せるものにて、之より以後ゾラが自然派の泰斗なることは何人も疑はずなりぬ。「ラッソモワ」は既に百數十版に達し、「ジャルミナル」も百版以上に及べり。以て其盛況を見るべし。「パージュン・マッカル」の目次左の如し。

- |                                     |  |
|-------------------------------------|--|
| 1. La Fortune des Rougon (1871)     | 2. La Curée (1872)                     |
| 3. La ventre de Paris (1872)        | 4. La Conquête de Plassans (1873)      |
| 5. La faute de l'abbé Mouret (1874) | 6. Son excellence Eugène Rougon (1875) |
| 7. L'Assommoir (1877)               | 8. Une Page d'amour (1877)             |

- |                                 |                              |
|---------------------------------|------------------------------|
| 9. Nana (1880)                  | 10. Pot-Bouille (1881)       |
| 11. Au bonheur des dames (1883) | 12. La joie de vivre (1883)  |
| 13. Germinal (1885)             | 14. L'Œuvre (1886)           |
| 15. La terre (1887)             | 16. La rêve (1888)           |
| 17. La bête humaine (1890)      | 18. L'Argent (1891)          |
| 19. La débacle (1892)           | 20. Le docteur Pascal (1893) |

等なり。此叢書は一八五〇年より七〇年頃まで佛國に流行せる遺傳説の立場より觀察したるものにて、各編の主題は左の如し。

第一、佛國地方の都會生活。第二、商人生活。第三、レザール(les Halles)(魚市青物市とを兼ねたる如き建物)の内部生活。第四、第五、僧侶生活。第六、上流政治社會。第七、勞働社會。第八、婦人情慾の生理的及び心理的解剖。第九、遊女生活。第十、巴里の商人生活。第十一、巴里勸工場生活。第十二、人生の苦痛。第十三、鑛山生活。第十四、美術家生活。第十五、農夫生活。第十六、夢。第十七、鐵道生活。第十八、銀行生活。第十九、普佛戰爭期の軍人生活。第二十、科學者生活等なり。

「ルン・マクナル」(Rougon Macquart)を完成したる後、ゾラは「ルールド」(Lourdes)「羅馬」(Rome)「巴里」(Paris)の三部より成る所謂「三都市譚叢書」に着手し、此叢書の目的は如何。ゾラ曰く、

第一卷に於て余が書かんと欲する所は、現時の科學の進歩は凡ての社會に新希望を與へたれども、其希望は實現せらるゝとも多くの人を満足せしめず、科學の起せる希望に満足せざる者は科學以外に依頼すべき力ありとの信仰に歸れりと謂ふことは是なり。第二卷「羅馬」に於ては近世カトリック教會の野心と苦心とを併せて描き、而して之をルールドに到れる巡禮者の純潔なる宗教心に對照せんとす。第三卷に於て余は「巴里」の腐敗と罪惡とを描破せんとす。巴里に於て余が描く所は凡ての文明國共通の弊害なり。

ゾラは「三都市譚」に於て其理想を發揮せり。彼は決して沒主觀の自然主義者にあらず。

ゾラが理想とせし所は、よく活き、よく愛し、よく働くにあり。疑惑に亂され、失望落膽煩悶の生を送るものに對して彼は曰く、汝の生命を重んぜよ、汝に再び平和と

健康とを與へ得るものは獨り生命のみ。汝は働かざるべからず、汝は愛せざるべからず、汝は罪惡の觀念を以て一種の病氣となし、神に對する思想を精神の錯亂となし、來世の信仰を夢魘に過ぎずと。

ゾラは神の存在も靈魂の不滅をも信せず、又神に對する義務の爲めに苦み、若くは來世を望んで煩悶すること、人生の自然に逆ふものとなせり。而して彼は自然に従つて楽しく生活するを人生の理想とし、想念を現在に限り、現在を慮り、現在を信じ、現在の義務を盡して生命の要求を満足せしむる所に眞の幸福は存すと教へたり。

神の爲めに苦む勿れ、永遠の爲めに煩ふ勿れ。汝の全力を擧げて汝の生命の爲めに働け。信神は幸福と伴はず、不信仰必ずしも不幸を意味せず。生命は労働なり、労働せよ。慰安此處にあり。幸福亦其中にあり。愉快に労働し、労働して幸福を得るは、これゾラが世に傳へたる福音なり。彼はかの蜜蜂が花を尋ねて蜜を集むる爲めに労働すれども、其勞作に苦痛なく、却つて労働によりて幸福を得るが如く、人も樂しき労働の生涯を送らざるべからざるを説きたり。



ゾラは舊宗教の信仰の破壊者なり。彼は「三都市譚」の主人公ピエール・フロマンをして云はしめて曰く、

余がルールドに行きしは、單純なる信仰に接觸して吾心の迷を解き、古代の信仰に復らんが爲めなりき。余が羅馬に行きしは、今の平民主義の時代が要求する所の新宗教を發見せんとする正直なる希望を有したるが故なり。然れども余は失望せり。否甚だ馬鹿らしかりき。吾靈魂は些の光明にも接觸する能はざりき。余は他の人々に信仰を與ふるの道を發見せんが爲めに巡禮し、却つて自ら全く信仰を失へり。嗚呼余は最早一の信仰をも有せず。何事も何物も信仰する能はず。

彼はカトリック教會を敵として戰へり。彼が「三都市譚」は蓋しカトリック教を其根柢より破壊すべきものなり。彼は基督が罪惡の觀念を人間に與へ、人間を苦ましめたる事を攻撃せり。ゾラは「三都市譚」を公にせる後、一八九九年「生殖」(Fécondité)を、一九〇〇年「勞働」(Le Travail)を著し「正義」(Justice)を執筆中なりき。一九〇二年六月二十九日不幸にして煖爐のガスの爲めに窒息して死せり。

##### 五 佛國の政界とドレフー事件

ドレフー事件は佛國近年の最大事件なり。一國の國威國信は擧げて之に繋りき。而してゾラは一管の筆を以て堂々此不幸の年少士官の爲めに其冤を鳴らしぬ。抑佛國の政黨は右黨に保守黨あり、君政派、ボナパルト派、復古派等より成立す。されど一八八九年の失敗以後、保守黨は全共和政府に反對するの念を絶ち、其僧侶派は一八九二年以後法王の訓令に基き、共和政府を奉戴して、唯立法上に依り舊教の主義を貫徹するの方針を取り、常に中央黨に聯合せり。之を保守黨の聯合派とす。共和黨は分れて二大部分をなし、其一部分は漸進派又は時宜派と言ひて中央黨を組織し、他の一部分は急進派と稱して左黨を組織す。常に政權を争へるものは、共和黨内の此二派なり。而して其孰れの一派も獨立して多數を制すること能はざるにより、漸進派は常に保守黨の聯合派即ち僧侶派と提携し、急進派は常に左黨中の他の二少群と提携す。其一を國民派とし、其二を急進社會派とす。國民派は即ちかのブライランゼー黨の遺物なり。

又急進社會派は共和政體の下に於て立法上に依り社會黨の主義を實行せんとするものにして、孰中税法に關し多數の無資力社會を代表し、努力漸次増進す。急進社會派の外、別に極端左黨に於て純粹の社會黨あり。これ共和黨以外に立ちて社會共產の主義に依り、國家組織を根底より改造せんとするものなり。又猶太人排斥黨と云ふものあり。こは經濟社會に於て、猶太人の跋扈を制する爲めに起りたる爲めにして、此輩國民派と協力せり。

ドレフナーが佛國の軍事秘密書類を獨逸に賣りたり云ふ事件は、軍法會議の認むる所となりて、結局彼を遠嶋に流すこととなりたるが、其後彼は冤罪なり、猶太人の跋扈を嫉む陸軍部内の計畧の爲めに無實の罪を被れるものなりとの論盛に起り、續いてドレフナー夫人の再審請願となれり。ゾラも一八九七年を以て大に此事件の不正を論じ、佛國政界の腐敗を抉發し、ピカール少佐と相並びて陸軍反對運動を試みれば、之によりてドレフナー・シンデゲードなるもの組織せられ、猶太人排斥熱と衝突して動もすれば大事に至らんとせり。是に於て佛國政府も最早黙視する能はず、民意を容れて再審を命じ、軍法會議は又もや永き審理に従事し、

其結果此度はドレフナーに無罪を宣告するに至りたり。ゾラは之より先此事件の爲め三千法の罰金と十二ヶ月の入牢を申付けられしかば、英國に逃れ、一八九九年事件落着後歸國せり。英國に追放中のゾラ關する著書あり、此間の消息を傳ふドレフナー事件は人種問題なり、政治問題なり、而して實に人道問題なりき。ゾラが椽大の筆を揮ふやゾラの人格も亦千載不朽の光彩を放ちぬ。ゾラは獨り小説家の重鎮なるのみならず、又實に人道の戰士なり。他日バンテオンに合葬せられしは、そもく故ありと云ふべし。

#### 六 ゾラを論ず

我文壇に於てエミール・ゾラの英名は甚だ高かりきといふべからず。吾人が前章に説明せるが如くドレフナー事件はゾラをして世界的ならしめ、遂には彼をしてバンテオンの靈廟に祭らるゝ光榮を贏ち得しめきと雖、其自然主義はモイッサンの如く爾く我邦の文壇を風靡するに至らず。嘗つては紅葉山人の一派、即ち硯友社の文士は寫實主義を標榜してゾラに擬せんとしき。されどゾラを本尊とし

て其流風餘韻を崇拜せるにはあらず。自然派勃興以來自然主義者と號する輩頗る多し。されど多くはツルゲーテフ、モトパッサン等の短篇小説を祖述する者のみにして、ゾラを我文壇に移殖せんとするものには長田秋濤、飯田旗軒の二氏あるのみ。就中飯田氏はゾラが「巴里其他を翻譯して、ゾラの移植に努力せり。他は從影附聲の徒のみ。

ゾラが大小説叢書「ルイゴン・マッカル」中最も名高きは「ナ」なり。彼の説く所は人生の腐敗にして、人は如何なる點にまで腐敗し行くものなりやの點にあり。ナは巴里の女優なり。彼が幾多の男子を弄び、弄び盡して、彼も亦利刃として使用したる己が容貌の爲めに却りて自ら弄せられ終る状態を描けるものなり。ルイゴン・マッカルは實に彼一代の文名をなし、更に一方に於て蛇蝎も當ならざる如くに嫌忌せられしものにして、彼が旌旗は正に此二十冊にありて、其色を鮮かならしめしものなり。要するに彼が描く所は單に人類の醜點のみにあらず、彼は忠實に人心の活動する多方面の活畫を寫せるなり。彼の書を読み、所謂醜と云ふものは、裸體畫を觀る能はざるの徒なり。裸體畫を觀て偏に其醜を叫ぶものは、到底共に

我自然派の小説を談ずべからず。

彼が「ルイゴン・マッカル」に續いて稿を起したるは「三都市譚」なり。「ルールド」「羅馬」「巴里」是なり。吾人は是等の書を読み、更にゾラの大なる所以を觀ずると共に、彼が所謂自然派の文學の如何なるものなるかの概念を得ること益多きを感ぜずんばあらず。試に其梗概を擧げんか。

巴里の加特力教會を牧せる一人の牧師ありき。名をビエロル・プロマンと云ふ。幼より學を好み、長じて深く究め、篤學自ら處るの好牧師なりき。かれ常に加特力教の腐敗を慨し、其信仰の如何にも儀式的なるを厭ひ、人類發達の初頭に於ける信仰の如く、爾く清く、爾く淨からざるを慨し、一度杖を曳いて北方ルールド市に到り、諸邦の巡禮者が如何なる信仰を以てルールドに來れるかを觀察せんとせり。彼がルールドに於ける觀察は自ら満足するに足るべき結果ありしか。否、彼は却つて其信仰の餘りに幼稚に、餘りに無邪氣に、餘りに無意味なるに驚けり。これ「ルールド」篇なり。彼は今何處に行きてか、人類の清淨なる信仰ある宗教を觀るを得べきか。彼は更に杖を轉じて南の方羅馬に行きぬ。羅馬は加

特力教の本山なり。プチカノ宮中には如何なる信仰ありや。加特力教は果して如何なる信仰の基に立てりや。これ彼が羅馬に於て觀んとしたる所なりき。彼の望は凡て失望に屬せり。これ羅馬篇なり。彼は詮方なく更に巴里に歸り來れり。而して更に教會の任に當りぬ。而して人は彼によりて尙能く信仰を持續し居れり。人の倚つて頼みとする所以の彼の信仰は、次第に動搖し來れり。彼は特に加特力教を捨てんとして捨つる能はず、把持せんとして把持する能はず。良心と信仰との争闘は彼をして苦悶の極に達せしめぬ。ピエールに一人の兄あり。彼は科學者にして社會黨の人なり。牧師や其昔不羈なる兄と意相合はず。屢次の調停成らずして、心ならずも其兄と相別るゝこと數年、弟は信仰なき宗教に苦み、兄は科學に一身を委ね、己が社會主義より案出せる方策を實行せんが爲めに、爆裂彈の製出に意を専らにし、前途に多大なる希望を抱き、此希望の内に安らかに其世を送れり。弟は以爲らく人類の理想は活動にあり。活動は人類至大の宗教なり。我心を加特力教に苦むる所以のものは全く無意味なり。人は勞働せざるべからず。科學は人類進歩の根原なり。科學は人類の宗教なり。勞働

は至大の福音なりと。彼は此一刹那に於て意を決して僧衣を脱し、勞働者の服を着し、一女と婚し、戀て一兒を擧ぐ、名けてジアンと云ふ。ピエールプロマンは此處に至りて愈、人生の活社會に入り、人生の活動に入りぬ。之より夫妻は營々として勞働し、ピエール今は其心安く、又昔日の苦悶を見ずと云ふ。これ「巴里篇」なり。

ゾラは確に加特力教に對する一敵國なりき。其本領は正しく加特力教の形式的なるを破壊して自然に歸るにありき。彼が理想は人の自然の理性に従つて組織せる社會を實現するにありき。今日の所謂宗教は人類の自由に對する首枷なりと云ふ。これ彼が「三都市譚」中の一大精神なり。三都市譚に亞て成れるは彼が最後のものにして、一九〇〇年の頃より發售せる「四福音譚」なりき。四福音とは何ぞや、生殖なり、勞働なり、眞理なり、正義なり。意義に於ては先の「三都市譚」と相關聯せり。彼已に前書に於て人生の意義は活動にありと言へり。更に曰く、人類の發達は其第一歩に於て生殖なかるべからず。男女相婚して家を成す所以のものは即ち生殖の根本なり。人類の繁殖は直ちに人類の發達を意味するなり。我邦の俚諺に子

實長者とは即ちゾラの理想なり。彼の理想なるのみならず、人類の繁殖は人類の理性に根原せる自然の理法なり。これ人生の第一福音たる「生殖篇」なり。彼は此書中に於て巴里に行はるゝ殺兒罪を飽くまでも攻撃せり。而して殺兒罪の如何にして行はれつゝあるかを精細に記述し來つて、姦淫の記事あり、殺兒の記事あり、墮胎の記事あり、公立育兒院に行はれつゝある罪惡の記事あり。斯く人生の非自然なる凡ゆる方面に就て精細に記述せり。而して他方に於ては更に夫婦相和し兒孫團樂の狀を記し、自然の如何に美なるかを寫し來つて、人をして轉た恍惚として人生樂哉を謳はしむるものあり。

更に轉じて「勞働篇」を繙かんか。社會は益、非自然に陥れり。貧富は益、懸絶せり。多數の赤貧なる勞働者は如何にして苦境を脱すべきか。同盟罷工か、同盟罷工可なり。然れども尙社會の根本的改良をなすに足らず。然らば社會の改造か、曰く賃金組織を全廢すべし。社會の事業は凡て資本と知能と勞働との三者によりて成れり。果して然らば利益は此三者に平分せざるべからずと。これ此篇の大意なり。其間點綴するに佛國に於ける勞働者の非運の狀態を以てし、夫は深夜に酒亭に飲み、

妻と兒とは暗黒なる陋屋に泣き、或は妻は衣食を人に乞ひ、兒は路次に窃盜をなす。夫は妻を顧みず、妻又夫を棄て、去る。宛然これ修羅場なり。更に繙つて他を見んか。ゾラの所謂三者利益の平分は能く整然として行はれ、人各、その處を得て、社會は凡て幸福に生息し、兒はよく智能の啓發を得、妻は夫と共に其業に就く。小兒に光明あり。婦人に自由あり。男子には獨立あり。宛然これ黄金時代なり。人をして始めは慄然として驚き、後には陶然として酔ふの思あらしむ。而して次に出づべき「眞理」の未だ公にせられざるに、ゾラの一生は終焉を告げぬ。ゾラは「眞理」に於て加特力教と女權との關係を論述せんとせるものにして、加特力教は社會進歩の敵なり。若し夫れ婦人の自由を保護せんとせば、須らく婦人をして加特力教の羈絆を脱せしめよとの主意を書きたるものなり。以てゾラの理想を想見するに足る。彼は人の自然の理想に従つて社會を改善せんとせるなり。彼が人道の戰士としてドレフターの爲めに奮闘せるも亦此理想の發現に外ならざるなり。彼は決して尋常市井の瑣事を描寫して得々たる一小説家にはあらず、假令小説家たるゾラの高名は文壇より忘却せらるゝ時ありとも、彼が人道に貢献せる任侠の活精

神に至りては千歳青史を照らして朽ちざるべきなり。

### 第九章 メレデイス

一、評傳

メレデイス

ジョージ・メレデイス(George Meredith) 一八二八年—一九〇九年)は十九世紀の末葉より二十世紀の初頭に亘り、英國文壇の耆宿と仰がれし文豪なり。斯くの如く彼の名聲が一代に傑出し、世人の渴仰を享くるに到りし所以は何ぞや、其資縁する所頗る多かるべしと雖、就中彼が當代の趣味の標準と舞倫の調子とを能く看取體得して、之を其作中に發揮せしに、職由せずんばあらず。

按ふに其如何なる時代たるを問はず、一時代には必ず其時代の人心に瀰蔓し、鬱結する特殊なる觀念、即ち時代思潮とも稱せらるべき者ありて存す。而して斯かる觀念にも二種類ありて明かに區別することを得べし。其一は當代の多數者の心に存する觀念にして、凡衆の人々に依りて日常論議せらるるもの、乃ち一般世俗の明かに認め居る觀念なり。他の一は之と異り、唯明識ある少數者に依りてのみ知り得らるるものにして、其時代を超越し、豫言者の權威を以て未來を宣明し

煥發し、戀ては世人の熟思焦慮せざるを得ざる觀念として認識せらるゝものなり。メレデイスの如きは斯かる觀念を其作中に煌かす者と云はざるを得ず。凡そ其詩たると小説たるとを論ぜず、其謠ふ所のもの其描く所のものは往々市井の俗事たるを免れず。然れどもそがぬ、たとならず、三面記事とならざる所以は、唯或種の觀念が其裡に伏在するが爲めなり。されどメレデイスは單純なる觀念派にあらず。彼は文筆を事としてより其死時に到るまで殆ど六十年の長き間、終始變はる所なく、其結果は如何ならんとも、我は人を人として描かむと云ふ彼の主張を勇ましく把持して變はる所なかりき。彼の自己修練の堅持、其態度の精緻にして而も峻嚴なる、聊かも自然の法則を曲げずして公平なる、民衆の喧囂を意とせずして自適の趣味を立て通せし忠實さは、何人も看取するに難からざる所に於て、世間の批難、無頓着、冷淡等を意に介せず、泰然として穩健雅醇の裡に、向上の一路を辿り來りし雄々しさは、何人も敬仰せざるを得ざる所なり。彼颯言して曰く、

名聲に憧るゝ徒よ、名を竹帛に止めんと欲する輩よ、爾等は古史を按じて三思

するを要す。古來向上渴仰するもの、彼が如く夥かりしも、十に八九は死滅阻喪の厄を免れず。唯盤根錯節を凌ぎ、堅持するもの洵に天幸を享く。されど人の命運は其基固し。全智なる神は弱き者を強くし、毅實を毅毅より分つ。

と。斯くの如き彼の抱負は其晩年に及んで實現せられしなり。彼が老齡に及んで一代の敬仰を享くるに到りしも寔に所以なきにあらざるなり。

メレデイスは一八二八年二月十二日を以て、英國ハンブリアに生る。愛蘭人を母とし、ウェールズ人を父とせる彼の血肉に、冥想的精神が宿りて夙に天然自然を渴仰する傾向の存したるは、惟むに足らざるなり。而して英國に生れ、此處に居住せりと云ふ事實は、又明かに其所作の中に認むるを得べし。その文致の晦澁にして思想の深玄なる邊は、幼時留學したる獨逸學風の影響する所頗る大なりと云ふと雖、此見解は未だ遽に信ずべからざるものなり。赤兒なりし中に兩親を亡ひしかば、後見人の手に依りて鞠育せられ、幼にして一裁判所の門番となり、後獨逸に赴きてノイギルドの學校に學ぶこととなりぬ。幾許もなくして故國に呼び戻され、てよりは、倫敦に於て懸命に勞働せざるを得ざりき。當時菜食主義を奉ずると云

ふにはあらざりしが、約一年間は日々燕夢にて、纔に露命を繋ぎたることもありしと云ふ。國こそ異にする所あれ、彼と同時代なる北歐の文豪イブセンは、其處女作を金に代ふること能はざりし爲め、路傍の商賈に之を賣つて漸く一飯の食を獲しと云ふ。メレデイスの處女作は當時なか／＼の聲價を博せしを以て、イブセンの如き窮厄に遭遇することなきを得たり。イブセンは若くして醫藥の業に従ひしが、メレデイスも亦最初は法律の研究に身を委ねたり。二十一歳にして其作詩を雜誌に寄稿し、是より七八年の間は新聞記者として、モーニング・ポスト及びイブスウッチの爲めに筆を取りぬ。一八六六年の埃伊戦争には、モーニング・ポストの戦事通信員となりて従軍せしが、實際的戦争には注意をなさず、ベネチア等に遊びては伊太利の人民を観察して、以て彼が小説の材料となしたり。その後彼の親友なるジョージ・モイレーが米國に赴きて不在なりし間、代つて隔週評論を主幹し、或は書肆チャップマン・エンド・ホール(Chapman & Hall)の顧問となり、書肆の顧問としては、彼は常に出版書に就ての非凡なる見識を示したるのみならず、其選に入らざりし作家をも推奨することを怠らざりき。斯くして當時彼と親交するに到りたる

作家の中にはロドリゴ・リットンあり、トーマス・ハーディーあり、ジョージ・ギンシングあり、皆彼のさかしき推奨に與りし人々にして、後には一代の作家として名聲を擧ぐるに到りしなり。彼は此間他人より蒙りたる負債を消却し、遂に後顧の憂なくして一意専心、故國の文藝に盡瘁することを得るに至れり。彼は三度娶れり。前の妻はトーマス・ビーコックの女にして文學的素養ある婦人なりしが、結婚後十二年にして逝りぬ。第二の結婚をなすと共に、彼は家族を携へてサリトのボクスヒルに隱栖し、妻及び二息一嬢を相手にして適意の生活を送り居りしが、後妻も亦一八八五年彼を後にして此世を去りぬ。彼は時々倫敦に到りて、當代の名士なるジームズ・タムソン、スウィンバーン、デァステイン、マッカーシー、ジョン・モイレー、ダブネルド嬢と交款を事とせり。この間一時の好尚に傾倒することなく、自己の天職を確信しつゝ、徐に作一作と公にし始めたり。されど彼の作は未だ容易に世人の歡迎する所とならざりければ、彼は時には歎じて云へり、英國の人民は余に就て何等知る所なし、彼等と余との間には生來相容れざる一物あり。一作又一作、毎に詆誹嘲罵の聲あるのみ。初めには意に介する所ありしも、爾來は



著作を自己悦樂の爲めになすに到れり」と。

彼の作物は故國に於てよりも米國に於て早く其眞價値を認めらるゝに到りしなり。斯くの如き事例は、嘗にメレデイスに於てのみならず近代の文學界に於て往々見る所なり。近き例を以てするもワグネルは英國人によりてよりも米國人に依りて早く解せられ、イブゼンに到つても其理解力は英國人よりも米國人の方が進みたりと云ふて可ならむ。殊に奇とすべきは、メレデイスと同じくケルト種族の血を受けて、頓才、詩言、空想、過激、理窟等、孰れとも軒輕し難きパーナード・シーが英國にあらずして米國に其知遇を得居ること是なり。

一八六七年の事なりき、批評界の飛將軍なるゲオルグ・ブランデスがイブゼンの名作「ピアギント」を評して、こは劇詩にあらず歴史なりと云ふや、イブゼン之に應へて曰く、我作は詩なり。好し假に現在に詩と云はるべきものにあらずとも、應ては詩と云はるべき時の來るべきなり。他國に在りてはいざ知らず、我諾威に於ける詩と云ふ觀念は、必ず此作に吻合するに到るべきなり」と。流石に北歐に獅子吼をなせしイブゼンなり。其抱負の大なる量り知るべからざるなり。斯くの如き

挑戰的なる態度氣魄はメレデイスには見得べからざる所なり。されど小説の職能と技巧とに關して、世人の趣味の一變すべき事を期待し居りしは明かなり。嘗て彼の一作を月旦せし一評家に與へて曰く、貴下が余の著作に對する評言の結末に言はれし、何時かは必ず公衆の趣味一變すべしとの言は、寔に余に對する知言と謂ふべきなり。余按ふに吾人の一生を正しく用ふる唯一の秘訣は、吾人に次いで來るべき人々の爲めに鞏固なる目的に達すべき道途を築くに在り。されば余は自己の著作に鮮からざる瑕疵の存するを知ると雖、如上の目的を心とし、幾分か之が幫助となるに於て價値の存することを認めざるを得ず。人生を精密に研究し、實在の因果法則等を究むることは、やがて世を文明に導く一方途たるべく、人の一生を剔抉描寫する小説は、斯くの如き第二義の賜物を齎らす者と思惟すと、以てメレデイスの抱負を見るべきなり。

トマス・ハーデーは嘗て「小説は人物の性格情緒を描寫するを以て満足せず、今や是等の者を解剖する傾向を取るに到れり」と言明する所ありしが、寔にその如く、三文小説は暫らく言はず、苟くも價値ある小説ならば、讀者は決して茶菓子代り

に小説を読むと云ふが如き態度を持するを得ず。近代の小説は吞込まんには少しく尖り過ぎたるやの感なくんばあらず。形骸的の動作は作中に在りて、主要の位置を占むる能はざるなり。偶然の行動及び突飛なる行案は次第々々に小説的價值を減じ、嘗ては小説の最も重要なりとせし説話の如きにてさへ實際の出來を主要とせざる小説中に在りて重要視せられず、作中人物の行動を惹き起すべき微妙にして往々描寫し難き程複雑なる動機衝動の下位に立たざるを得ざるに到れり。又作中に存する情意に到つても然るなり。若し之が思慮或は智識に依りて導かれ動作するにあらざれば従前の如く讀者の注意を惹くに足らざるなり。心理小説の泰斗ヘンリー・ジェームズは、余の見る所を以てすれば、心理上に於ける推理の作用ほど興味深きものはあらざるなり。之を觀察すれば恰も一幅の繪畫に對するの感なくんばあらず。之に色彩を施したらんには、テイシヤンの繪畫を見るが如くなるべく、而して又心理上の事柄ほど我を刺戟するものはあらざるなり」と謂ひしが、メレディスの作全體を通じて、彼が斷えず訴ふる所は、吾人の思慮の中に伏在する叡智なり、説話の如きはその重しとする所にあらざるなり。彼は

曰く、説話の如きは余が尊ぶ所の哲理の器なり。一篇の要旨は動作に依りて闡明せんとする觀念たるなり」と。以て彼が作意を見るべきにあらずや。

メレディスの小説の哲理、否哲理的小説の根本觀念は實に此邊に存するなり。彼が英國の文壇に勢力ありし所以は、觀念派の矯態と寫實派の媚態とを看破して、彼獨得の健實にして確固たる態度を固持せし所にあり。彼も時に空想の羽翼に乗じて高く中天に飛翔することなきにあらずれども、こはケルト種族の血を双親より受けたる穂差しに過ぎざるなり。彼が自己修練より得來りし正義の觀念、此觀念の前には如何なる物をも顧みざる冷酷とも見らるべき態度が、彼の眞面目と云ふべきなり。彼は生得のロマンティックなる傾向と、リアリストティックなる性格とを調合して、夙くより次の如き見解を以て其作に臨みしが如し。

彼は小説を以て單純なる想像的説話なりとせず、又寫實的なる客觀描寫なりともなせず、實在の合理的なる解釋的描寫なりとしたり。故に彼は小説を以て單純なる人生よりは數層教訓的旨意を含める者なりとなせり。此主張を實現せんが爲めには彼は容易ならざる困難を凌ぎ來りしなり。思想に伴はざる技巧は死物

なりとは、彼の遵奉する信條にして又其實行せし所なり。ロマンスのみを以てしては實在に繋はらざる觀念化せる日常の人生を示すに過ぎず。寫實のみを以てしては合理的精神に鑑照せられざる實在物の皮相を示すに過ぎざるなりとは、常に彼が口にせし所なり。メレデイスの見解にては、文人の天職は其談る所に據りて思想を會得せしめ、其所作に依りて教訓的、倫理的、社會的なる旨意を示すべきものとなせしが如し。藝術は叙述にあらずして綜合なり。説話にあらずして解釋なり。概念を完全にし、事件を眞理に依りて啓發し、説話を機宜に適せるエンフ、シスに由りて潤色する等、是等の事は當來小説家の光榮とする所なると同時に其責任なりとは、メレデイスの揚言する所にして其主張の存する所なり。

パーナード・シ、は藝術を以て世界に於ける道德擴布の最も巧妙にして、最も有効なる方法なりとし、唯之に優る者は個人的善行なりと斷言せり。されど演劇に於ては斯かる除外例をも斥く。蓋し世人の多數は組織的省慮の明なきが故に、實際生活は彼等に取りて往々無意義なることあるも、演劇に於ては明かに之を表現し、觀者をして容易に會得せしむるが故なりとせり。メレデイスは小説を以て道

德擴布の器具なりとなさず。彼は、人類の實際生活の要領を描く小説は哲學の侍女なり。故に合理的なる智慧を以て小説を生動活躍せしめ、歴史と同位を占めしむるひる技巧なかるべからずと云へり。彼は又、小説の主材は人間の精神的歴史なり。哲學なき歴史が事件の骸骨を示すに過ぎざるが如く、人生を描寫する小説も哲學なければ、終に骸骨解剖に了はらざるを得ざるべし。小説豈に斯くの如くにして、可ならんやと敢言する所ありき。

然らば如何なる程度までメレデイスは其巧妙なる推理に由りて闡明する主張を實行し得たるか。而して又彼が斯くの如く重要視する所謂哲理とは如何なるものを指して言ふか。こは最も究問すべき事にあらずや。彼の作品を讀む者は容易に其中に彼の閱歷を讀む事を得べし。彼の小説は自己實現の境地に到達せんとする個人の失敗、苦悶、盛衰等の道程を示す者なり。彼は斯くの如く種々の險難苦楚を舐めて自己實現の域に達し、茲に初めて地 (Earth) が自己を生みし眞の母なりと云ふことを發明するに到りしなり。故に彼は、地は生命の源なり、安心の家なりと謠ひたるなり。地は人間の活動の中に最高の生命を有し、人間は地より其精

神的資質を享く。吾人は地に即ける者なり。然らば母とも云ふべき地を振り棄て、如何にして天に達することを得む。吾等人類に取りての眞生命の秘論は地に即することが萬事の端緒なりとの確信を懐くにあり。されど吾人は自然より不當なる利己的恩恵を得んと望むべからず。唯自然を正しく讀み所謂自然の嚴肅なる喜悅を見んことを冀ふべきなり。人は時として精進向上することあり。又時として失望退轉することもあるなり。されど自然は是等の事象を毫末だも意に介する所なきなり。自然は人々の温かさ汗を吸ひて其必要を充たすことを敢てするも、決して其慾望を満たさざるなりと。メレデイスの人生觀は擧げて此中にありと云ふべし。

斯くの如き自然に對する信仰よりして、合理的推論の有効なること、其正確なること、に對する彼の信頼が生ずるなり。彼は「バイナード・シ」と同じく人生には智(Intellect)の極めて必要なるを説く。蓋し智に據りて導かれざる自然に對する信仰は、吾人人類を正當ならざる方向へ導く事あるを以てなり。天稟の資質が智に依りて導かれ、醇正なる情熱に依りて勵まざるに因りてこそ、人類の性能は

初めて可能の最高所に達するを得るなれ。故に「智と情と精神とは離るべからざる三位一體なり。三にして一、一にして三、所謂完全なる人格とは此三者を圓滿に具有するものなり」と。

斯くの如く常識が情熱の爲めに勵まされ、智に依りて制せらるると云ふメレデイスの觀念に依りて見るも、謂ふ所のパッシンなるものは高貴なる情念を云ふものにして、決して劣等なるものとして排すべきにあらず。メレデイスの小説に於て、其主人公が時として行動に迷ふ事あるは、乃ち三者の一に依つて云爲し他を閑却せし時にあり。故に我は吾運命の主なり、吾精神の長なりと言ひ得る人は、メレデイスの作中の人物と同じく、我は圓滿具足せる我性、即ち完き我より出る刺衝にあらずんば従はずと言ひ得る人ならざるべからず。吾人は茲に於てゲーテの名句を想起せざるを得ず。ゲーテは「爾が完全なる人生を美の中に、善の中に、否事物完全の中に享けよ」(Im Ganzen, Guten, Schönen, resolut zu leben.)と云ひしが、メレデイスの意も之と多く異なるなし。

メレデイスは樂天家なり。されど世の常の樂天家の如く、希ふ所凡べて叶ふ、天上に

肯定の聲を聞くにあらずやと云ふが如き感想を有する樂天家にあらず。世には三種の樂天家あり。例へばブラウニング、シェリーの如く、信仰を確實と云ふ程度にまで思ひ込むが如き樂天家、その第一種なり。又ステイブソンの如く、生死の結果は皆それ自身價值ありと見、單純に人生を享受する者その第二種なり。而してメレディスの如きは、總ての事物が終極には完了する者なりなどは明かに信ぜざるも、希望の眼光を以て永遠に擴がる進歩發展の道程を看取し、現在の事物を來らんとする善の爲めのみならず、計るべからざる將來の爲めにも喜んで犠牲に供するの樂天家にして、其第三種とも稱すべき者なり。

斯くの如くメレディスは進化論者なると共に、其世界觀は樂觀的なるなり。彼は乃ち世の推移を見るに、悉く進化論的立脚地より出立し、宇宙を支配する種々なる法則の傾向は皆可能的至善の方向に在る事を信じ、同時に吾人の現世界は人類が希望し得べき最良なる世界なることを疑はざりしなり。随つて人生に存する凡ての不幸と悲哀とは其無智にして種々の弱點を有するが爲めにして、吾人の世界は寧ろ吾人に與ふるに凡ゆる快樂と凡ゆる強健と智力とを以てせんとす

る者なりと宣言せり。彼は自然の伶俐なると、其確實なるとを看取し、單に心に於てのみならず、身自ら自然界の巧緻にして活潑なるムードに面接することを得たりしなり。これ彼の自然觀に強大なる神祕的傾向の存する所以なり。

世界の進化發展を信ぜし彼は、吾人に教ふるに精進向上の宇宙の大法に遵據する者なる所以を説いて曰く、努力は宇宙の大法なり。道義的成分の至高なる者なり。人は何事を企つるにも其全力を盡して倦むことあるべからず、最大なる罪惡は薄弱なることにあり。道德的虛弱も肉體的虛弱も共に罪惡なり。されど道德的虛弱は肉體的虛弱に比して一層卑むべきものなること論を俟たず。道德的虛弱は人生の目的に於ける衰亡を表象するものなり。吾人の進歩は單に自然的なる自己の情慾、好惡と戦ふのみならず、進んでは或る意味に於て社會生存の自然分子となり來りて、而も多少の弊害たるを免れざる凡ての舊習舊慣等と戦ふに依りて致さるべきなり。されば偉大なる徳操は要するに勇氣にして、動物に取りて肉體的勇氣の貴重なる如く、人間に取りては道德的勇氣最も大切なる者なり。吾人若し自然を恐れなば、自然は吾人を蹂躪し、吾人の肉を喰はずんば已まざるべ

きも之に反して吾人若し私慾を離れて雄々しく自然と戦はゞ、自然は即ち吾人を愛し吾人を導きて、遂には全人類をして神たらしむることに力を致すべし。而して斯くの如きことは抑、何れの時に起るべきか、未だ容易に庶幾する能はざるも、吾人は此現宇宙消滅の後に於ても、尙他の數多の宇宙に於て永久に存在することを得べきを以て、吾人にして賢明にして勇氣あらば、一步々々絶えず向上をなすべきなり」と。

是に由つて之を觀るに、進化論者としてのメレデイスは極めて道義的にして又極めて樂天的なり。彼は所謂宇宙の演劇的傾向を信ぜし者とも見るべく、萬有の趨向を以て悉く善に向へるものと信ぜり。然りと雖、吾人は直ちに彼を呼んで萬有教信者なり、若くは無神論者なりと稱すると能はざるなり。彼は至善に向つて進化する進歩發展の大秘密に於ける自己の所信を告白せるなり。人或は謂はむ、斯くの如くんばメレデイスは文學界に於けるハーバート・スペンサーなりと。固よりスペンサーの最良なる思想の一部は之を彼に於て見出すを得べく、メレデイスは文人なるも其思想の深遠なることに於ては、スペンサーの上にあること數歩な

り。メレデイスは不可思議説が人智の範圍を限りて、一定の境界を越えて進むの權利を拒否するに肯せず、此境界を超越して無限の域に到達せんとする所、恰も宗教家の如きものあればなり。彼が説く所は遂に一種の自然宗教とも稱すべきものにして、其深遠なること到底スペンサー一派の及ぶ所にあらざるなり。

斯くの如き哲理的小説家たるメレデイスは、文學界に於ける幾多の盤根錯節を凌ぎて英國文壇の耆宿となり、彼が所謂足れる貧の中に、老來圓熟せる文思文藻は、幽邃閑雅なるボックス丘に練られつゝありしなり。一九〇八年の春、彼を敬仰する人々集まりて、其八十歳の賀筵を張りし際には、洋の東西を問はず、英文學に親める名士より送られし祝辭は其數夥しく、實に一代の盛事なりしが、越えて一九〇九年の初夏、彼は詩宗スウィンバーンの後を追うて逝去せり。時に齡九十有一歳なりき。

## 二 著作

メレデイスの著作は、小説、物語、詩集、及び論叢等を合して、其數三十餘種に及ぶべし。

次に公にせられし年次を追うて列記すべし。

- Poems. (1851)
- The Shaving of Shagpat. (1856)
- Furina: A Legend of Cologne. (1857)
- The Ordeal of Richard Heveral. (1859)
- Evan Harrington. (1861)
- Modern Love and Poems of the English Roadside, with Poem and Ballads. (1862)
- Emilia in England. (1864)
- 原註 4 Emilia in England 4 終に Santa Helena と改題せられたり
- Rhoda Fleming. (1865)
- Victoria. (1867)
- The Adventures of Harry Richmond. (1871)
- Beauchamp's Career. (1876)

- The Egrotist. (1876)
- The Tragic Comedians. (1880)
- Poems and Lyrics. (1883)
- Diana of Crossways. (1885)
- Ballads and Poems of Tragic Life. (1887)
- A Reading of Earth. (1888)
- One of Our Conquerors. (1891)
- Jump to Glory Jane. (1892)
- The Tale of Chloe, The House of Bench, The Case of General Ople and Lady Camper. (1894)
- Lord Ormont and His Aminta. (1894)
- The Amazing Marriage. (1895)
- An Essay on Comedy and the Use of the Comic Spirit. (1897)
- Selected Poems. (1897)

Odes in Contribution to the Song of French History. (1898)

Nature Poems. (1898)

Reading of Life. (1901)

Short Stories. (1902)

上記の著作年表に依りても知らるゝ如く、メレディスが文學者として世に出ては最初詩人としてなりしなり。其詩は一八四九年七月七日發行の「チェムバー雜誌」(Chamber's Journal)に掲載せられしものなるが、後二年にして「詩集(Poems)」として出版せられたり。其小冊子は未だ一般公衆には迎へられざりしも、當代に於ける文壇の耆宿テニスンとキングスレーとは、此詩集に注目して賞讃の辭を惜まざりき。斯くの如き先輩の推稱は、新進の士に取りては確に有利なる保證と云はざるを得ず。テニスンは其調子の豊艶にして獨創的なるを賞揚し、「谷間の戀」(Love in the Valley)の一篇の如きは、到底自己も及び難きものとしたり。キングスレーは「フリーザー雜誌」(Fraser's Magazine)に於て、精細に此詩集を評釋し、其調子の豊艶にして

奇巧なる事、各詩の完全均勢なる事、全體の詩風の如何にも佳麗にして健全なることを讚へたり。去れど斯くの如き長所と共に、メレディスの作全體に亙りての特色なる音韻の弛緩と、彫琢の不備とを挙げ、事物の精細なる叙述に急にして、却て中心の情調に缺く所あるを指摘したり。

後幾干もなくして、フリーザー誌上に、メレディスの詩二篇表はれたるが、爾後五箇年間は何物をも公にせざりき。彼は斯かる沈黙の五箇年間に充分なる修養を積み、繼ては一代を驚動するに足る物を作せんと欲せしなり。果然一八五六年に至りて彼は *Shaving of Shagpat* と云へる小説を公にしたり。當時英國の文壇に於ては、幾多の人々に依りて多くの傑作の世に公にせられし者ありしが、メレディスの此作の奇怪なる想像と、豊富なる興味とは、讀書社會に多大の影響を及ぼせり。第一に此作を傑出したるものとして賞揚せしは、ジョージ・エリオット女史にして、ダンテ・ガブリエル・ロゼッチも亦その稱讃者の一人なりき。此作は一般讀書社會の嗜好に投ぜしものとは云ふべからざるも、其斬新なる點は何人も看過するを得ざりしなり。アラビアン・ナイトの型を踏襲して、これに東洋的の驚異峻怪なる趣味



を加へしものにして、黄金色の屋根、黒色の樹木、銀色の泉水等の文字、妙からざるも、讀者をして其筆の趣く所に従はしめ、東洋趣味の奇怪を想見せしむるは、大成功と云はざるを得ず。

此作に次ぎて一八五七年に公にせられたるものを *Enriana, A Legend of Cologne* とす。これは前作の東洋的怪異趣味の豊なるに反し、獨逸ライン地方の傳説を材料としてものせられたるなり。されど、これは前作に比するに寧ろ失敗の作と云はざるを得ず。フリナの技巧は連絡を缺き、其動機も瞭かならず、ユトモアや談話や物語の要素が各平均を失するの短所あり。

その翌年は *Ordeal of Richard Feval* を出し、彼は更に新しき境地を開拓し初むるに到れり。即ち従來の荒唐無稽なる傳奇物語より一轉して、現實生活を描寫する小説に筆を染むるに到り、彼の特色なる哲理的、心理的傾向が初めてその作中に現はるゝに到れり。人事の發展と動機との綿密なる關係、性格の銳利なる研究、之等の諸點をその作中に發揮するに依りて、メレディスは直に當代小説界の第一位に列することを得たりしなり。故にリチャード・フエバルはメレディスが出世作とも

謂ふを得べし。この作の題材は小兒の教育と云ふ事に取りしものにして、傲慢にして頑固なる父親が、理論と條規とに依りて自己の子供を飽くまで思ふが儘に教育し、成人に到るまで決して他人の感化を受けしめず、自然の傾向にも向はしめず、其の思ふが儘に人間を作らむとする心的經路並に性格發展を、最も綿密に研究し描寫せしものなり。此作中に於ては、戀愛を描き出せし一節最も清新にして力強く、従來平穩緩和なる感情を寫し居りし英國小説界に、一新生面を拓きしものと稱するを得べし。

*Evan Harrington* は、その翌年 *Once a Week* 誌上に連載せられたるものにして、一八六一年一書として出版せられたり。此書も亦近代的生活を描寫せしメレディスの第二の作にして、全篇ユーモアに充ち、まゝ諧謔に過ぎたりと思はるゝ節なきにあらざれども、作中人物の性格の發展を研究し描寫するや、實に驚くべきほど綿密精細を極めたり。

翌年彼は詩集 *Modern Love* を公にせり。此詩集に關しては、*スペクテーター* 誌上に於て論難盛に起り、或る評家の如きはメレディスを以て、充分なる自信を持たざる

深奥なる心理上の問題に就て、輕々しく論じ歌ふ者なりと爲せり。此評語に對しては、詩宗スウィンバーンが一八六二年六月七日の同誌上に於て力強き反駁を試みたり。詩人の題材を取るは、必ずしも理論を理論として論ずるにもあらず、又其題目に依りて事態を明にせんとするにあらざるなり。只其信ずる所を歌へば足る。モダーンラブの如きも斯くの如き材を取りて光彩陸離たるものあり、何の非難すべきことか之あらむと。此モダーンラブは獨特なる十六行のソネットを連ねたるものにして、其詩的結構の精麗にして巧妙なる、拾九世紀の韻文中に在りて最高位に列せらるべきものなり。

メレデイスはまた小説に立ち返りて、一八六四年 *Emilia in England* を公にせり。後に *Sandra Belloni* と改題せられしもの之なり。此作は音楽小説にして、音楽に堪能なるエミリアが流離落魄の後、其眞の愛人に添ひ遂ぐる次第を叙せしものなり。全篇にメレデイスのマンナリズム横溢すと雖、キットの光彩ありて活氣に滿てる作なり。翌年現はれたるものは *Rhoda Fleming* とす。而して *Rhoda Fleming* に次いで「ナイトトリー」評論に連載せられたる *Vilronia* は一八六七年一冊として出版せら

れたり。こは英國に於けるエミリアの續篇たるものなり。

其後四年にして *The Adventures of Harry Richmond* と云へる小説、一八七〇年より同七一年に亘りて「コーンヒル」*Cornhill* 誌上に連載せられたり。而してその續篇とも見るべき *Beauchamp's Career* は、一八七四年より同七五年に亘りて「フォートナイト」リイ評論誌上に掲げられしものなり。こはメレデイス得意の作にして、その主人公は自己の妹婿なるアドミラル・マックスの一面を描寫せしものと稱せらる。此作は社會的、政治的問題の複雑なる記述の中に、巧に作中の人物を點綴す。作中の主人公、ポーチム、ポーチムは、高貴なる血統を受け、貴族的周囲を有する英國の年少海軍士官なるが、偶然に受けたる之等の位置を嫌ひ、國士たるの氣魄を以て、國の爲めに一身とその門閥とを犠牲にせんとす。偶、北伊ヴェニスに於て、佛蘭西の少女レネーに逢ふ。レネーは父の旨に依りてルエラー侯爵に婚約せられ居るなり。然るにポーチムとレネーとは、忽ち相思の仲となり、ポーチムは性急にして粹を解せず、人道の利害より打算してルエラー侯爵に對する婚約の不自然なるを説き、自己の意に従はんとを迫る。而もレネーは父に對する義務を大なるものと考へ、ポーチム

チャムの言を聴かざるなり。ポーチャム失望の餘り、次第に狂奇の政治家となり、英國に歸りて平民政治の熱心なる主唱者シユラプナル博士及び其養女なるジェニー・デ・ンハムの感化を蒙る。此に於て彼は其國民と日夜奮闘せざるを得ざるなり。蓋し英國國民は保守的傾向を有するに反して、彼は急進黨にして共和主義を奉ずる者なるが故なり。決死の彼は國民の嘲笑を物ともせず、彼の思慮は其刺戟に應ずる程深からざれども、其失敗の中に在りても能く名聲を保ち居るなり。時に前の戀人レナーは、其所天を棄て、英國に來り、彼に其身を委ねんとせしが、ポーチャムが叔父の家守たるロザマンド・クリングの爲めに阻む所となる。終に年少なる過激家はジェニー・デ・ンハムと戀愛なき結婚をなし、幾許もなくして彼はサウザンプトンの一港に於て名もなき小兒を救はむが爲めに自ら溺る。斯くの如きもの此書の大要にして、全篇悲哀の調子に満てるものなるが、最も能くメレディスの特色を發揮し居る作と云はざるを得ず。

次に注目すべき作は一八七九年に出でたる *Egoist* なり。こはメレディスが作中、名篇と云はるゝものゝ第一位に置かるゝものにして、彼が其友に贈り、或は崇拜者

の爲めに自署するとを敢てせしは實に此書なりしなり。一八七七年、メレディスが倫敦學士會院に於てなせし講演の重なる題目は、滑稽の趣味なき人は精神の優雅なる情趣を解せずと云ふにありたるが、*Egoist* の中心的人物なるサー・ウィロービー・バターン (*Sir Willoughby Paterne*) は實に斯かる觀念を體現せしめしものなり。主我主義者なるウィロービーは富裕にして門地ある紳士なるが、其性僻と生立とに依りて自己の完全なる境遇を矜持し、求婚場裡に於ける價值の大なるを念ひ居るなり。故に比隣なき彼の境遇にふさはしき配遇者を選択せんが爲めに頗る慎重の態度を持す。而して此主我主義者をして益、高く標置せしむるが如き求婚を列記し、終にウィロービーの醫すべからざる自己満足の憔悴に筆を擱く。プロットのなき完全なる小説のいみじき描寫なり。

メレディスが長篇小説の一に數へらるゝ *The Tragic Comedians* は一八八〇年に公にせられたるものにして、獨逸の社會主義者なるフェルディナンド・ラザルの物語に、悲劇と喜劇との精神を宿したるものなり。而して一八八五年に現はれたる *Diana of Crossways* は、メレディスの文學者の行動に一時期を劃するものにして、一般公衆

を驚かせしもの此作の如きはあらざりしなり。一篇の女主人公ダイアナは、美貌と才智と高貴なる品性とを兼ね具へたる活動的婦人なり。メレディスの筆致に依りて、ダイアナの面目は紙上に躍動するの概あり、此女主人公のあるに依りて、他の男女は生動し、其威光に依りて他は皆批判せらる。ダイアナは愛蘭の良家の女なりしが、早く己を解せざりしワロウィックに嫁して不幸の身となる。ワロウィックはダイアナの眞性を解せず、ダンニスブルグ侯と結んで陰謀を企つるものとなし、謀反人として彼女を處置するに至る。ダイアナが其良人と離別せる後の行動は、數寄を極むると同時に光榮あるものにして、メレディスは斯かる叙述に一生の心血を瀧ぎし觀あり。此書が公にせられし當時に於ては、シエリダンの孫娘にして其美容、其機才、其見識等に於て名聲噴々たりしカロリン・ノルトン夫人を描けりとの風評高かりしが、今日に於ては斯くは信ぜられざるなり。されど斯かる風評が大に此書の聲價を高めしは否むべからざる事實なり。

是より前一八八三年に *Poems and Lyrics of the Joy of Earth* と云へる詩集現はれた。こはメレディスの詩人的特色なる自然的實相主義(Natural Realism)を遺憾なく發

揮したるものにして、特に「ウエスター・メーソンの森」と云ふ一篇の如きは、自然と人間との神秘的感應と云ふが如き感慨を充分に據べたるものなり。一八八七年に公にせられし *Ballads and Poems of Tragic Life* 及び一八八八年に現はれたる *A Reading of Earth* の二篇の如きは、最も能くメレディスが作詩上に於ける思想の豊富と表現の氣力とを示すものなり。メレディスの詩を解せんとするには、散文を解する時以上に、作者獨特の神秘的傾向と哲理的思想とを能く會得して、其作に臨むの要あり。斯くの如くにして、作者と同等なる見解に倚つて其作に臨む時は、最も難澁なる作と云はるゝものゝ妙所をも容易に會得するを得べし。

*A Reading of Earth* を公にせし一八八八年には、メレディスは恰も其六十歳に達せしの時なり。其期に及んで彼の特色は益々發揮せられ、其文致の難澁なることも甚しきに到れり。一八九一年に現はれたる *One of Our Conquerors* 及び一八九四年に公にせられたる *Lord Ormont and His Aminta* の二小説の如きは、益々彼一流の特癖を餘蘊なく藏する名作なれども、前時の名作の如くなること能はざりき。一八九五年に現はれたる *The Amazing Marriage* は小説としては彼が最後の作にして歸り咲

きとも觀ずべく、天才の面影を偲ばしむるものなり。此時に當つては、メレディスの文豪たることは一般に確認せられて、其名聲は一代に高く、當初多く世人に顧られざりし此作家も、漸く萬人渴仰の標的となるに到れり。此に於て彼は詩宗テニスンに次いで、著作家協會の會長に選ばれ、一八九八年その第七十四の誕生日に際しては、當代著名の文士三十名に依りて頌徳祝辭を呈せられたり。斯くの如くにして彼は當時に於ける英國作家の最大なるものとして一般に認めらるゝに至りしなり。評家は競うて彼を批判し、長く需要少かりし彼の著作も、漸く新版を發行せざるを得ざるに到れり。之が結果として、彼は前時代の諸作を改版するに當つて、大に筆を加へし所あり、一八九七年コンスタブル社に依りて出版せられたる彼の全集に於ては、その中の或ものは甚しく變改せられたるものなきにあらず。リチャード・フエツェラル及びエヴァン・ハリーントンの初版と新版とを比較するに、殆ど面目も一新せし觀なくむばあらざるなり。蓋しその氣力旺盛の時にものせられたる箇所を、老後の圓熟せる見解に依りて變改する所ありしは、彼自身に取りては諒とすべき事ながら、讀者より見れば未だ容

易に首肯し難き節なきにあらず、故に今後出版者の讀書界になすべきの義務は「リチャード・フエツェラル」或は「エヴァン・ハリーントンの如きメレディスの出世作を、其當代ありしが儘に復舊する事なり。一八九八年には彼の *Odes in Contribution to the Song of French History* と云ふ詩篇現はれたり。此詩の中に宿されたる感想は甚だ高貴なるものにして、其句法も莊嚴にして彼一流の特色を有するものなり。一九〇一年には詩篇 *A Reading of Life* 現はれ、その翌年に *Short Stories* 公にせられたり。

メレディスの著作中には、其理窟ぼき叙説あるに拘らず、其過ぎたりと思はるゝ哲學的觀想あるに拘らず、其往々作中の人物に依りて自己を談るの弊あるに拘らず、將た其動もすれば自己の性癖を以て其人物を色彩するに拘らず、活動的情熱を以て其人物を生動せしむると同時に、時宜に處するの思慮を失はざらしむるは其手腕の尋常ならざるを示すものにして、大成功と謂はざるを得ず。偶、其懷抱する抽象的理論によりて、作中の人物に、あらずもがなと思はるゝ性格を有せしむることあるも、こは彼が希有の思想家なるの餘弊にして、又已むを得ざる所な

り。而も彼が藝術と人生とに對する哲學的態度は、其著作をして優に社會的道德的過渡時代に於けるイボグ・メイキングのものたらしむ。彼の小説は哲學的思慮に依りて我人生を描寫し、以て將來の小説的技巧に道を備ふると同時に、又之を完からしむる較著なる努力とも見るべきなり。

## 第十章 トルストイ

### 一 露國の國民的氣質とトルストイ

一八八七年の頃まではトルストイ自身も純乎たる露國のトルストイとのみ思ひ居り、露西亞人もまたトルストイを目して、純粹の露西亞的文學家とのみ思ひ居たりき。然るに小説「アンナ・カレニナ」發刊後、告白「イースポウエディ」に著筆する間に於て、トルストイの腦裏に起りし精神的革新は、彼をして豁然世界のトルストイたらしめたり。而して今日のトルストイは如何。吾人は斷言せん、一時的世界のトルストイにあらざして、世界文學の恒久的偉人、世界宗教の恒久的大賢人なりと。嗚呼人類は長へに彼の美的文學を賞せん。宗教的教訓に浴せんか。

斯くの如き偉大なるトルストイは露西亞の産なり。露西亞は眞にこの偉人を産するに適せし地なるか。佛蘭西の文豪ルナンは、大なる土地は大なる人物を産すてふ説を唱へたり。果して彼の説の如くんば、露西亞は幾人のトルストイを産せん。千里一望の平野、人煙稀にして土地豊饒ならず、隨處森林の鬱蒼たるものある

も形状極めて一樣にして没趣味なり。加之、春秋は短くして、濕潤、夏冬は長くして、單調なり。夏の溫暖は頗る愉快なるも、近寒の凛烈を償ふに足らず、冬の夜は長くして、誠に人文發達、社交進歩に益あるも、夏期に於ては夜なき程の長日の不快を補ひ得ること能はざるものなり。之を要するに、露西亞の天然は偏屈なり、我意なり、かくの如き天然のうちに住む人民は、自ら活氣に乏しく、進取の氣象に缺く、悠悠々自適、野心活動に乏しきは、此國民の特質なり。然るにトルストイは如何果して能くこの民族的特質を備へたりや、換言すれば、天然の反應兒なるか、彼の性質は全くこれに反す、恰も水と火と相反するが如く然り。

トルストイは幼時より活氣に満ち、進取の氣象に富み、事毎に故きを温ねて新しを求むるの風あり、誤を改むること頗る敏にして、踏襲せる虚偽を棄つることは、弊履を棄つるよりも猶易し。彼の眞理を求めてこれに移ることの快速なるは、恰も蟹民が水草を逐うて居を移すよりも猶速かなり。彼の爲には唯眞理ありて我意なし。唯仁愛ありて憎惡なし。

トルストイの生ひ立ちには、沈思黙想にのみ耽溺する者にはあらずりき。然れども

彼は天性既にこれを有せり。少童時代、家庭教師の獨逸人が普通學を教へし頃、彼は既に黙想を愛し、カウカス地方にありて土匪討伐に従事する時にも、セワストポリの戰役、彈丸雨飛の下に奔走する時にも、沈思することは須臾も廢せざりき。而して其沈思黙想の題目となりしものは何ぞ。曰く人間なり。人間の天性は如何。天命は如何。徳義は如何。行爲は如何。個人としての人間は如何。社會團體としての人間は何如てふ諸問題こそ、所謂その題目なり。時として翁の生活上、この題目が隠れて表面に現れざる時あるも、能く裏面を探查推考する時は、明かに其存在を見ることを得るなり。

この大問題を解決せんとして、トルストイが研究精勵せること、實に言語に絶するものあり。而して個人に於て最微の智情意の顯現より、古今東西人類の團體的動作に至るまで、細大洩さず、彼の觀察究理を経たり。故に人間中最も劣等人の精神的活動は、カウカス地方の記事に於て、進歩せる大團體の活動發展は、小説「戦争」と平和に於て能く其經路を明にせり。其他「アンナ・カレニナ」「イワン・イリイチ」の死、「クレチッコワ・ソナタ」復活等に於て彼の研究の結果は、瞭然として披瀝されたり。

文學と謂へば翫弄物の如く思ふ人多し。稗史小説と謂へば、あること無きことを書き列ねたる一種の慰安具消閑器の如く心得る人甚だ多し。一般に文學を以て職業とし、稗史小説を編むを以て大工が鑿鉋を用ひて箱機等を作るが如く心得つゝあるは、尙今の小説家比々皆然るが如き觀なき能はず。トルストイは然らず。人生を研究し精査し熟考し、其結果を生けるが如き勢力ある文字に寫して、以て我等人間に示せるなり。故に彼の文章は一種の大勢力を含有す、理屈以外に一種謂ふべからざる感化力あり、世界を風靡するの潜勢力を有するなり。

トルストイの文章が斯くの如き大勢力を有するは偶然にして得たるにはあらず。苦心慘憺到底吾人の思ひ及ばざる辛苦勤勉の致す所たるなり。至聖至潔の思想は、汚穢腐陳の心裏より發現さるゝものにあらず。清淨無垢の精神ありてこそ始めて至高至遠の卓説あるなりとは、彼が一八八二年にもせし「徳義の第一段」てふ論文の骨子なり。支那哲學は齋戒沐浴を聖にすゝむの門の如く見做せり。トルストイは食物の精進、行爲思想の清淨潔白を以て眞理を得、徳義に進むの道途なりとせり。

かくの如く眞面目に所謂齋戒沐浴して發せらるゝなれば、彼の至言は讀む者をして隨喜崇服せしむる一種の勢力を有したり。これ苦心慘憺の間に收め得たる人生の觀察なればなり。

## 二 トルストイの家系

トルストイ家の遠祖は獨逸普魯西の産にして、チック(Dick)は其姓、名はビートル、稱はアンドレイウイチなり。チックてふ獨逸語の苗字は稱呼に不便なりとて露譯してトルストイ(太きてふ義なり)と云ひぬ。十七世紀の末葉、彼得大帝が其姉ソヒアと政權を争ひ、雙方鏑を削りて相拮抗せるとき、ソヒアの麾下を脱して大帝の幕下に走せ、參じ功勞少からざりしかば、大帝はかれに爵位を授け、領地を與へて優遇せり。亂平ぎて後、ビートル・アンドレイウイチは土耳其駐劄の大使となり、大帝と土耳其皇帝との間にありて、折衝宜しきを失はざりしと云ふ。宮闕にありても亦華族間にありても、萬人が希望する地位と財産とを遺して遠祖の伯は逝きぬ。爾來トルストイ家は代々露西亞の名族と縁組し、貴族としての名聲は隆々た



るものあり。本傳トルストイの祖母は、有名なる侯爵ゴルチャコフ家の出、トルストイ母方の祖母は、侯爵ツルベッキ家の出、而してトルストイの生母は、實に名族ヲルホンキ侯の女なりき。

トルストイの祖父なるイリヤ・アンドレイウイチは、何かの失敗により借金の山を作りて死し、其子ニコライ・イリイチはトルストイ家を嗣ぐの不幸に逢著せり。ニコライ・イリイチは毅然として父の後を襲ひ、祖先傳來の資産を惜氣もなく賣り拂ひ、得たる金を以て債主の要求を充たし、奈落の底に沈まんとせりし家の榮譽を保ちしも、この後如何にして一家を支へんかは彼には大問題なりき。未亡人なる老母は、名門ゴルチャコフ家に育ち、驕奢に慣れ、かくの如き窮境に甘んずること能はざる婦人なり。この時にあたり、彼を慰めこれを和らげ、トルストイ家の急に赴きしは、親戚なるエゴリスカヤ夫人なりき。夫人は實にトルストイ幼時の守護神にして、トルストイの今日ある蓋し與りて夫人の力なり。

ニコライ・イリイチは陸軍中佐なり。而も美男の聞えある年少士官なりき。中佐として得る俸給にては到底一家の生計は六ヶしく、何等かの方法を講じ、一家隆興

の基礎を確立する必要は目前に逼れり。自國の文學史を専攻する或露西亞人は、ニコライ・イリイチは此危急の場合より逃れ出てん爲に富豪の令嬢と結婚し莫大の持參金を得んと企圖せりと云ひ、又或文學者は依然たる理想的の愛情によりて結婚せりと云へり。真相果して二者中の何れにあるか、吾人は茲に之を明言するを得ざるなり。

名族ウオルコンスキ侯に一女あり、マリヤ・イワノフナ嬢と云ふ。容貌甚だ美ならず、年齒既に結婚の好期を逸す。然れども、侯は有數の富豪なり。嬢は才智にして柔順の噂ある賢婦人なり。ニコライ・イリイチは心を決して結婚の申込を爲し、快よくこれに應じたる嬢は、幾旬ならずして伯爵夫人となり、ウオルコンスキ家に傳來せるヤスナヤ・ポリヤナの畑地園圃百四十餘町歩と石造家屋數棟とはマリヤ夫人の嫁資としてトルストイ家の有となりぬ。苟くもトルストイを知るものは、必ずや彼の有名なるヤスナヤ・ポリヤナの別墅を知らん。かくの如く全世界の視線を集むるに至りし別墅は、此時よりしてトルストイ伯爵家の有となりしなり。新夫は致仕して夫人を携へ、母とエゴリスカヤと共に夫人の邑なるツौरラ縣下

クラビウスキ郡ヤスナヤ・ポリヤナに移れり。新生活は波瀾なく、靜かに且樂しげに送られ、幾年ならずして家庭は呱呱の福音もて賑はされたり。

ニコライ・イリイチ伯に關して何等の口碑に傳はる所あらざれども、夫人マリアに關して人口に膾炙さるゝ逸事甚だ多し、かれ頗る想像力に富み、また談話に於ける文學的表象法に熟達せり。宴會の夜酣なる化粧室の一隅、一團の處女はかの女を取り巻き、樂しき奏樂の調、足音高き舞蹈の響に耳をもかさず、一意専心にマリア嬢のお伽話を聞くを常とせり。一起一伏の語調、天與の美音は聽者をして酔へるが如くならしめ、想造趣向の完備、其一喜一憂の配合調和は眞に聽者の心を溶すの力ありきと云ふ。夫人は穩和にして思慮あり、而してまた仁愛の心に富みしかば、一家は平和の生活を送りたり。

結婚數年を出てずして四男一女の子實は得られき。我トルストイは實に第四子にして、男兒中の末子なり。彼の後には唯一人の女兒ありしのみ。然るに、夫人マリアはかりそめの病より夫と幼兒とをのこしてみまかりければ、一家の悲嘆は言を須ひず、良人ニコライ・イリイチと、かのエゴリスカヤとは、五兒の世話は勿論家

事萬端を料理するの止むなき窮境に陥りたり。

### 三 孤兒

トルストイは、一八二八年の露曆八月二十八日(即ち陽曆九月十日)を以てヤスナヤ・ポリヤナの邸に生れ、三歳にして母を失ふ。九歳の時、三兄一妹と共に携へられてモスクバに移り住む。此年また不幸は幼兒の一團を襲ひ、父のニコライ・イリイチを奪ひ去りぬ。杖たり柱たる父を失へる幼兒は、又其方向を失へり。フスケン・サケン伯夫人(ニコライ・イリイチの姉妹)は大に幼兒の行末を慮り、早くもモスクバ大學に入りて勉學しつゝありし長兄ニコライを己が家に引きとりて世話し、三男兒一女兒はエゴリスカヤ女史と共にヤスナヤ・ポリヤナに還り去れり。

幼兒は深き注意を以て教育され、早くより獨逸人カール某は家庭教師として聘せられ、普通學を授け、且つ日常起臥の世話をやけり。學術の教授は獨逸流の規律を以て實行されしに拘らず、天性活氣に富める麒麟兒は放逸に馳け回り、且つ腦中種々の空想を畫き、時として沈思默想に長時を費すことありき。トルストイは

この時代の記憶を人に告げて曰く、七八歳の頃奇妙なる考を抱きしことあり、以爲らく、或熟練を得ば空中に飛行すること難きにあらずと、或時如何にもこの奇術を得たるが如き感想あり、窓縁に攀ぢ登り空中に向て飛出して、忽ち二層の樓上より地上に墜落して負傷せり、家人驚きて扶け幸に大事に至らざりしと。名著生ひ立ちの記を以て單に彼の想像を寫し出せしに過ぎざるもの、毫も實際の分子なきものとせばいざ知らず、露國文學界の定論に隨ひ、生ひ立ちの記は、著者幼時の記憶に想像的の彩色を加へたるものとせば、其喜其憂眞に羨望に堪へざるなり。然れども些細なる事輕々に看過して差支なき小事も、彼の爲には默想攷究の材料たり、人生觀察の習練場なりし事明なり。若し夫れ、早く兩親を失ひし兒童の心と思へば、左の一節の如きは人をして誠に斷腸の思あらしむ。

眼は醒めた併し神經は過敏になりて心は落ち付かぬ、何だか人に馬鹿にされたやうな氣持がする。カール教師が群れ來る蠅を打ち損ねたのも氣にくはぬ。兎角涙が出たがる。泣き度くなる。何てこうなのかと彼が問ふから、お母さんが死んで柩を持ち出すところを夢に見たから悲しいと出鱈目に答へ

た。實は唯心中寂寥を感じるから涙が出るのぢや、泣きたくなるのぢや。かく不幸打續けるトルストイ家は、又も不幸の襲撃を蒙れり。五人の遺兒が杖と頼みしオステンサーケン伯爵夫人は一八〇四年俄に病氣にて逝去し、孤兒は今は唯東方ヴオルガ河畔なるカザン市に住めるユシコウ夫人(トルストイの叔母)によるの外なきに至れり。このユシコウと云ふは、爵位こそなければ、露國の貴族にて資産も甚だ豊なり。夫人はトルストイ家の出にてニコライ・イリーチの姉妹なり。其カザン市に在住せしは、ユシコウが學區監督の榮職にありしが爲めなりき。ユシコウ夫人はトルストイ等兄弟をカザン大學に入校せしめんとし、數百露里の遠路を態、ヤスナヤ・ポリヤナに迎として赴き、相携へて歸途に上りぬ。勿論汽車は無き時代、因るべきの水運の便とてなければ、止むを得ず馬車にて旅行の途に就けり。當時のトルストイは常軌を逸せし事少からざりしとて、ユシコウ夫人は語つて曰く、

レオ(トルストイ)の通稱には實に困りましたよ。モスクバより歸路、或宿場で晝支度を濟し、暫らく休んで居ると、レフが居なくなつたんです。どう探して

も居ない。困り切つて居ると隣りの散髪屋の二階から半分刈り込んだ頭を突き出して、叔母さん、鳥渡です、すぐ濟みますと云ふんで、仕方がない、馬車は馬を付けた儘で暫く待されました。これは唯一例で……

カザン市に移ると共に獨逸人の家庭教師は解雇され、佛蘭西人セント・トーマス之に代りぬ。別に國語教師として宗教學校生徒某ありて、國語、歴史、算術等の教授を分擔せり。トルストイ素より修學の念なきにあらず、又孜々勤勉の精力なきにあらざりしも、ユシコウの家風、殊に當時カザン華族の驕奢放逸は彼をして岐路に迷はしめぬ。彼は自ら善事にあらずとは知りながら、豁然覺醒するの勇氣も出でず、碌々として偷安の生活に甘じ居たりき。

#### 四 大學の嫌はれ者

當時富豪の子弟は家庭より直ちに大學へ入校する風習あり。トルストイ家の如きも其一にて、四人の兄弟皆中學を経て大學に入るてふ順路によらず、家庭より直ちにカザン大學若くはモスクバ大學に入學したるなり。トルストイの家庭に

於ける勉學は、一向専念なる能はざりしと雖、三ヶ年の日月に於て多くの知識を注入せられたりき。一八四四年五月廿九日附を以て彼はカザン大學に入學願書を提出せり。然るにこの一八四四年は大學入校者にとり洵に不幸なる年にて、カザン學區の監督ムーシン・ブシキンは特に大學校長に公書を送り、是まで毎年入校試験の寛に失せるを責め、此年の入學者に對しては充分嚴格に且つ注意周到に試験すべしと訓令せり。トルストイの家庭に於ける修養は、十分なりとは云ふべからず、若し試験官に於て寸毫の鹽梅なく、冷鐵の嚴酷を以て受験者に望まば、その苦痛や知るべからざるものあるなり。十六歳の少年、將來の大文豪レオ・トルストイは試験に於て見事に失敗せり。五點を以て満點とし、三點以下を以て落第點とせる評點法に於て、古代史、中世史、近世史、露亞西史、地理學、統計學は一點、羅甸語は二點、アラビヤ、土耳其語、獨逸語は三點、佛蘭西語は五點なりき。されど彼は強ひての請願によりて再試験を許され、辛ふじて及第點を得たり。

一般露西亞の大學は法、理、文、醫の四科學制に則りつゝありしに拘らず、カザン大學は、東洋語學の一科加はりて五科學制となり居りき。如何なる動機がトルスト

イをして此東洋語學科に入るに至らしめしか。そは何人も之を知らざれども、聊か異様の感じあるを禁ぜざるなり。或る文學批評家は、少壯なるトルストイ伯の好奇心は彼をして此特殊の分科大學に入らしめしと云へり。然り少壯銳意の求知心は、彼を驅つて此科に入らしめしならむ。

今日の露西亞大學は組織に於ても、學識に富める教授の數に於ても、決して他國の大學に譲るものにあらずと雖、今より六十餘年以前の大學、殊に新設のカザン大學は此點に於て缺くる所甚だ多かりき。例へば教授の多數は露西亞語を解し兼ねたる獨逸人にして、殆んど露語の文法すら諳んぜざる者のみなりき。

學問の園に入りたりとの觀念を抱ける小年が、前述の如き杜選なる講義を數限りなく聽かされなば、果して如何の感想かある。偶、抱ける好尙心も求知心も消え失せて、殘るは唯失望のみならん。トルストイは大學入校後三四ヶ月は熱心に勉學せしも、其後は絶えて大學の講堂に入ることなく、學年試験の頃、法科への轉學願をば、俄に校長に提出したり。校長は寛大の人なりければ、一八四五年トルストイは免されて法科生となり、第一年は無事通過したるが、第二年に至り又々一蹶

蹟を生じたり。此年彼は殆ど大學に登校することなく聽講せしことなし。當年の教授日誌中、彼の頁には、民法註釋は平常點なく、獨逸語は一回も聽講せず、露國史は怠慢、萬國史は怠慢と明記しありしと云ふ。以て其一班を窺ふに足らん。加之、彼は殊の外、名門の出なることを誇り、常に傲然として、人に近かず、彼と席を同うして聽講せし同人にすら敢て言語を交ふること無かりければ、彼は爲めに衆人の指彈する所となるの有様なりき。彼は斯くの如く、番に學生の嫌惡を蒙りしのみならず、教授中よりも種々の缺點を指示されければ、終には多少の衝突の後、斷然退學願を出してカザンを辭せり。彼は斯くてヤスナヤ・ポリヤナに歸りしが、淹留久しからず、又もや去りて彼得堡に至り、法科大學に入りて、全科卒業免狀を得んとせり。一八四八年、試験期は目睫の間に逼れり。彼は俄に教科書、參考書、講義録等を繕き始め、一科目一週間の復習の後、試験官の前に立てり。質問の亂矢は都合能く切り抜けられぬ。

彼はかくして月餘を出でずして新進の法學士となりしも、帝都に於て任官の運動もなさず、ヤスナヤ・ポリヤナに歸り、是より農作に従事して以て一八五一年に

及びぬ。

## 五 カウカスの軍陣生活

事毎に沈思默想、其根柢を解得して後、始めて休むトルストイの求知心は、少年時代より人生問題の上に止まり、容易に解決するの機を得ざりき。されど此心が彼の精神的生命となり居りては、假令一時、農業に従事せんと決心するも、到底永く彼を繋留し得べくもあらざるなり。彼がヤスナヤ・ポリヤナに入りてより漸く三四年は、農業の爲め、七百の農奴の爲めに、未だ何事をもなすこと能はざりしにも拘らず、否最初の決心の一部分だも成功すること能はざりしにも拘らず、彼はヤスナヤ・ポリヤナを棄て、カウカス遠征軍の士官、長兄ニコライ・トルストイの許に赴きぬ。蓋し軍籍に入り、或種の名譽を得んと、の虚榮心は、彼を驅つてこゝに至らしめしなり。

一望千里の平野、至る所同一の風景、波瀾少き天然のうちに生成したるトルストイは、忽然として一步一景、奇巖雲を凌ぎ、疎林密樹、細流巨水、縈廻崎嶇の勝景に富

むカウカスに入りぬ。カウカスはブシキン、レルモンツフの如き第一流の文豪を始め、末派文學者たる新聞小説家(フエリトニスト)に至るまで、詩情の淵源、文章の活泉なりとせしところ、想ふにトルストイも、この天然に接して、天與の詩情勃然として腦裏に踊りたるならん。カウカスに長兄ニコライを訪ひたる彼は、幾許もなく軍籍に入り、砲兵第二十聯隊に属する第四十四大隊の見習士官となりぬ。何物が動機となりてトルストイは、陸軍士官となりしやは、彼之を言明せしことなく、露國の文學史家また之を知らず。唯或る雑誌記者は之を慥断して曰く、當時のカウカスに在りて勇氣拔群の聞え高かりし一將軍の切なる慫慂によりて見習士官となりたるなりと。カウカスの天然は、トルストイの精神に大變化を喚起したるもの、如く、此日までも大熱心の農業家なりしトルストイは、俄に功名心に驅らるゝ勇氣勃々たる士官となり、如何にもして軍功の表彰たるヂオルギ一勳章(我國の金鷄勳章の如きもの)を得んと冒險的襲撃を敢てし、屢、危険の間に往來せしこそ不思議なれ。彼の戦功は殆ど屈指に遑なき程なりしも、彼を喜ばざる將軍ありて、部將の推舉に同意せざりしより、この榮章は遂に彼の手中に落ちざり

き。カウカス陣中に於けるトルストイの生活は、一般青年のそれと少しも異なる所なく、休戦の日、何等の陣地勤務なきの時には怪しき魔窟に出入し、酒に酔ひ、女に戯れ、遂には骨牌遊びに耽り、而して骨牌遊びの爲めには、數千金の損失を被り、進退谷まりて殆ど自失の悲境に沈みしこと一再ならずと云ふ。滞陣中の彼は愉快なる青年士官にて、同陣の士官團は彼を以て其中心となし、彼の談話は全團の慰藉となり、輕快なる動作は同人の賑となり、時々弄べる樂器は衆を樂ましむるものなりき。

又、軍陣附近に住み、既に露西亞に歸服せしカウカスの蠻族は、亦彼との交友深くして、ソードと呼ぶ青年豪族は、信に彼の益友なりき。ソードとの交友中面白き逸話を傳ふ。乞ふ、今其梗概を述べん。

ソードは或る時駿馬を得、之をトルストイの覽に供せんとして、陣中に曳き來りぬ。彼此駿馬を見、稱賛措く能はず、自ら之に乗り、ソードをして我馬に跨らしめ、外に二人の同輩と轡を列べて遠乗を試む。カウカスの連山は雪を戴き、溪谷の青藍はこの麓を圍み、崎嶇の巨巖起伏の丘岡、眞に繪畫中の行軍の如し。不知不識、道はは

かどりぬ。五六哩の程はいつの間にか過ぎ、流水奔流の溪道に馬を立て遠近を見渡せば、計らざりき、山寨の蠻兵五六十騎四人の冒險者を包圍せんと進撃甚だ急なり。遠乗の途上、士官は素より身に寸鐵を帯びず、用心深きソードは短銃短劍の用意はあれども、これとて多數を敵とする所以の兵器にあらず。唯活路を求めて遁れ去るの外、策はなかりき。トルストイの乗れる駿馬は、飛鳥の如く退却して、乗馬の術に精通せるソードは終始彼を擁護せしが、同行の二士官は惜むべし蠻軍の急進亂撃の下に斃れ、一は即死し、一は氣息奄々の裡に捕虜となれり。あはや今一撃にて玉の緒の絶えなんとせるトルストイとソードは、圖らざる味方の援軍を得、逆撃一番、殺到せる蠻軍を追ひ掃へり。若しソードの駿馬なく、ソード自身の掩護なかりせば、トルストイは蠻軍重圍のうちに陥りしならん。

ソードの友情は、之のみならず、或る時、トルストイは骨牌遊びに大失態を來せるも、年少の士官殊に虛榮心に富める貴族の士弟たる彼の事とて、債主の前に頭を垂るゝ事を好まずして、苦悶せし際、ソードは計らずも得たる骨牌の金數千を携へ來つて彼を救ひしとぞ。

以上述ぶる所は唯一場の佳話のみ。トルストイの生涯に於て左ほど重大なる意味あるものにあらずと雖、彼のカウカスに於ける滯陣、殊にこの蠻界、この天然裡に於ける生活は、彼の生涯に於て露西亞文學、否世界文學の發展上に於て新時代を作り出す動機となりしなり。彼が文學に筆を染めたる始めは、實に此カウカスに於てなり。其文學家としての技倆を試み、最良の成績を認められしは、洵に此カウカスに於てなり。生ひ立ちの記の第一章、地主部の作業「カザコフ」等は實にこのカウカスに於て起稿せられ、このカウカスよりベテルブルグの時代記者の机上に送られ、直ちに上梓せられて一世を驚倒せしめしなりき。

或る人曰く、カウカスの天然、滯陣中の出來事は、トルストイをして筆を文章に染むるに至らしめしと。或る人曰く、長兄ニコライが文筆の嗜好は、トルストイを驅りて此道に入らしめしなりと。思ふに紛々の諸説は、唯其一端を窺へるのみ。全部を盡したるものは一も之なきなり。

カウカスの天然は今尚依然たり。文筆嗜好の父兄は今尚其數少なからず。されど第二のトルストイ出てざるなり。蓋し母體より享有せられし遺質、詩情、觀察力求

知心は、長兄の傾向、カウカカの天然、かの地に於ける周圍の狀況によりて動かされ、其天職に就くの好機を與へたるに外ならざるなり。

一八五二年、即ちトルストイ二十四歳のとき、其處女作たる「生ひ立ちの記」第一章は脱稿し、當時露西亞文學界の北斗星たる詩人ネクラソフが主宰せる文學雜誌「時代」は此名文章を得たり。ネクラソフは一讀又再讀、其觀察、意匠、文章の嶄新なる、趣味、氣韻の高尙なるに驚きしも、逸名の寄稿何人の筆に成りしか知るに由なく、此好文章を「時代」紙上に掲載すると共に、逸名著者に向ひ、若し公然己が氏名を發表するを好まれば、秘密のうちにて、速に貴名を余に告げられたしと度々懇請せり。カウカスが如何にトルストイの詩情を動かし、如何に彼の心理に聳動を與へしかは、次に掲ぐる斷片文字によりてこれを知るべし。

この邊陲に滯陣する余は、圖らずも友人の危惧を喚起したるぞおかしき。かれ等の曰く、蠻人間の生活、奇景に富む天然、永き滯陣は、トルストイを德義的に殺さん。假令殺さざるまでも終になすなきの人たらしめんと。あゝ此友人は人の幸福は那邊に在るか、人の生命は抑、如何なるものなるかを辨へざる



人ぞかじ。天然未だ人工の毒煙を被らざる。天然の美中に生命を保つこそ、眞正の幸福なるにあらずや。……眞と美との何者なるかをよく心に解得せし人は、決して上述の如き危惧を心に抱くこと無し。天然の眞美中にあり、これを眺め、これを語るを得るなれ。

### 六 セヴストポリに闘ふ

露西亞の勇將エルモフ戰術家たるの眼に映ずるカウカスには戰爭と名けらるる程の戰爭は演出せざりき。唯守備隊の小部隊と蠻族との間に屢次惹起せられし小競合ありしのみ。換言せば、暴行を逞する惡徒の團體を、巡査に代りたる兵卒が襲撃鎮壓するものなりしと。眞に然り、當時のカウカス蠻族は、甚しく露國の壓抑を嫌ひ、如何にしても之を脱して自由の翼下に棲息せんとの希望より搔擾を起したる土匪的集合體なり。されば露西亞軍隊との争闘も水滸傳的のものなりき。トルストイは一時此水滸傳的將校となりて、彼等と路を交へしなり。然れども、この兒戲的戰爭は未だ以てトルストイの好奇心を満たすに足らず。カウカスに

於ける各方面の觀察終らば、更に一段の光彩ある趣味ある人生研究に移らんと希望は、この時既に彼の心裡に熟しつゝありき。好機は愈、近接し來れり。この時露土の形勢は日を追うて險惡狀況を呈し、兼て一世ニコライ帝の專横を憤れる英佛埃三國は土其古を煽動し、モルダイアの一角に於て露土の衝突の端を開かしめたり。破竹の勢を以て土領に入りし露西亞陸軍の大部隊は立どころにモルダイアを蹂躪して土其古國境に迫り、その海軍は一舉して土其古の海軍を滅盡せり。當時のオトマン帝國は眞に風前の燈の如き觀ありき。こゝに於て三國は起りて、神速に聯合軍は組織せられ、英佛の堅艦は露艦隊を壓迫して、セヴストポリを封鎖せり。

斯くの如くにしてセヴストポリの役は開始せられぬ。この役は一八五三年に始まり、同五年に終れる大戰爭にて、當時の世界を震動し、戦後五十餘年を経過せし今日に於てすらも、この戦記を讀む者をして尙盾に粟せしむるなり。觀察緻密にして詩情に富み、勇敢にして好奇心に驅られつゝあるトルストイは、この千載一遇の大戦に逢着して、如何てかカウカスの一隅に安んずる者ならんや。一八五四

年某日セフストボリの防禦軍の轉勤願はトルストイより提出せられ、其筋の嘉納する所となり、直ちに指令部付の參謀官たる榮位を辱うし、同年十一月を以てセフストボリに着任せり。カウカスにありては、ゲオルギー勳章を得んと、の企望を以て勇敢の將校たりしが、之を得るには意外の困難ありと自覺するや、弊履の如くにカウカスを棄てたり。彼はセフストボリに來りて果して何をか希望せしや。想ふに彼は二ツの企望を抱きて砲彈下のセフストボリに來りしならん。曰く、戦功により侍從武官たらんこと。曰く、カウカスに於て始められ、未だ終了に至らざりし戦闘中の人生研究を完成せんこと是なり。

此戦争中に於けるトルストイの武者振は、眞に賞讃に堪へざるもの少からざりしと傳ふ。砲彈雨下、劍光閃々の際、尋常人は魂飛び氣消ゆるの時と雖、毅然として能く部下を指揮して防禦に勤めたり。一八五五年には、山砲隊の指揮官に任ぜられ、露軍の最も難戦となせる黒山の役に於て最も勇名高かりき。彼の軍功斯くの如し。その企望なる侍從武官職は殆ど手中の者の如くなりしが、彼の筆になりしと云ふ長久の狂歌忌、憚なく軍指令官等を批評せし諷刺は端なくも、老朽將軍等

の怨を買ひ、終にこれを得ること能はず、マラホフ丘の激闘後、戦況報告の要務を帯び帝都に急行せり。これ、彼が軍務を抛棄する端緒にて、帝都の用向、終るや休職を出願し、直ちに文學者の團體に投ぜり。

### 七 二回の外遊

帝都たるペテルブルグは、彼を歓迎せり。既に名聲を博せる文豪として、またカウカカ、セフストボリの戦場に於て拔群の軍功ある將校として歓迎せり。加之、貴族中有數の名家資産ある有爲の青年として、帝都の名家は彼を招待し、彼が客室に現はれ、群れ居る來客と握手の交換をなすを以て、こよなき名譽となすもの少からず。山海の珍味、内外の美酒さては音楽、觀劇の樂は云ふも更なり。花なす美人は常に彼を包圍して媚を呈し、又當時の文學美術の大家は喜んで彼を迎へ之と交際せり。美文を以て一世を風靡し、なほ其餘黨の衰へざる文豪ツルゲテフ、ゴンチャロフ、チクラソフは彼の技倆を認め、殊にツルゲテフの如きは、トルストイを評して、露西亞に於ける拔群の著作家なりと謂ひし程なりき。然れども一種の觀察眼

を備へ批評眼を有する彼は、帝都歡迎の裏面、文學家稱讚の真相を看破し、永くここに留まるを願はず、速に去りてヤスナヤ・ポリヤナに歸れり。彼此時代の思想を寫して云へるや、余が戰場よりペテルブルグに凱旋せしは實に余が廿六歳の時なりき。……直ちに時代の精神を丸飲し、……文明と其人生の最大目的なりと考へ、而して此文明を進むる者は文學者なり、美術家なり、而して余こそは即ち此文學者、美術家なりと思へり。……然るに我と我心に、如何なる能かある、何を知れるかと問へるに、如何なる能ありとも、如何なる知識ありとも答ふることは、又文明其ものも甚だ疑はしき點少からず。……遂に余の所信の誤れるを認め、如何にしても文學者たり、美術家たる虚名を脱せんとまで企圖するに至れりと。此思想たるや、後年彼をして復活せしめたる、心裡革新の思想と同一のものにあらず。彼告白して曰く、文章によりて得らるゝ虚榮、稱讚、金錢は余の靈眼を暗まし一旦起りし此思想も數年間は尙舊套を脱するを得ざりしと。

ヤスナヤ・ポリヤナに入りたる彼は専ら農事に心身をさゝげ、耕耘播種一切の事に執掌せり、又、問を得ては讀書に耽り、運動體操に口も猶足らざる程なりき。機械

體操具を弄して日雇農民に耕耘の指圖をなし、鑄鐵鈴を握れるまゝ、召使の農業監督に播種の方法を説き聞かせたること少しとせず。或日雇農民が當時の彼を評せる言は、能く真相を穿ちしものと謂ふべし。曰く、地頭様の御仕事は先づあの位が關の山でしやうと。彼が八十の高齡に達し、尙壯者も及ばざる健康を保ちしは農事運動體操等にて鍛へこまれし、身體を有せしが故なるべし。

この短期なるヤスナヤ・ポリヤナ在居中、而も其農事其他に忙殺さるゝの時に於てすらも尙彼は文事を忽にせず、生ひ立ちの記第二章戰闘隊中に於ける邂逅「雪風」下士の日記「二人の士官等の短文を公にせり。

田園生活の單調は永く戰陣にあつて多感多趣の生活を爲せしトルストイの興趣を起すこと能はず。早くも彼は西歐漫遊の企をなし、匆々行李を收めて程を起し、先づ波斯に入れり。彼のこの行必ずその目的希望なからざるべからず。而して彼自らは之を公言せざるも、思ふに一八五七年より同九年に至る四ヶ年に亘る前後二回の外遊は、彼が農民教育方法其他所謂文明其ものゝ實質研究のために外ならざりしならん。

トルストイは獨逸より名醫ポトキンに書翰を寄せたり。ポトキン其概要を評して曰く、トルストイ氏の書牘は、唯一の紙片に過ぎざれども、思想の健全氣力の旺盛は其紙上に躍如たり。氏は獨逸研究に頗る趣味を感じ、深く其奥密を探らんとする者の如し。一ヶ月の後ローマに赴くなるべしと。此行トルストイは文豪ツルゲテフ氏と會談するの機會ありしと見え一八五七年のツルゲテフの書牘に、トルストイ氏と余とは終に友情を厚くするに至らざりき。蓋し彼の嚮ふ所全く余の向ふ所の反對方面なるに依るなりとありたり。

伊太利より佛蘭西國に入りたるトルストイは、巴里に於て慘刻なる死刑の執行を見、英敏なる感情は、非常なる刺撃を被り、心中悶々の際、最愛敬の長兄ニコライ、肺患に罹り、療養効なく不歸の客となりぬ。彼の悲嘆一入なりしは理なり。あゝこの才智に富み徳心厚く且つ萬事に眞面目なる長兄は逝きぬ。壯年の長兄は肺患に罹り苦しむこと一年餘、彼は何の爲めに此世に生れしか、何の爲めにかく死するかを解得するに至らずして逝きぬ。余が生涯、兄の死ほど甚しき刺撃を余に與へしことはこれなし。死は萬事の終焉、あゝ今世に於て生命程悪しきもの無きぞ

かし。蓋し生命無くんば悲みも無く死も無ければなりと云へり。以て彼が心情の一斑を窺ふに足るべきなり。

彼は急速歸國傷心悼惜のうち一年を過したり。而して長兄の死は人生の大問題、死の研究に彼の全身全力を注がしむるの端緒を開き、徳義的革新の遠因を作りしものなりき。この歸國は、彼の爲め、殊に露西亞に於ける初等教育の爲めに眞に至重なる時機を作り出すものとなれり。皇帝ニコライ一世は崩じ、歴山二世踐祚するに及び、農奴解散の準備成り、露西亞の有志家は其善後策の講究に孜々たるの時、トルストイは闕らずも郷里にあり、平常親近し、愛撫する所の農民の子弟を如何に教育すべきか、獨立生活に經驗乏しき農民を自由の巷に捨て置かば、寸毫の善事を行ひ難からん。否如何なる窮境に陥るか知るべからず。良法を講究して彼等の子弟を教導し、少くも第二の農民の徳義的健全を謀らんと。の念は、再び彼をして西歐行の途に上らしめたり。獨逸の農民教育組織は殊に彼の注意を喚起し、數月の日時は此爲めに送られ、有名の教育家、學者、文學者、大概彼の訪問せざるはなかりき。

當時獨逸に有名なる著作家あり。アウエルバと呼ぶ。其傑作にエウゲニー・パウマンてふ思想家を描出せり。パウマンの思想はトルストイの思想傾向と酷似せるを以て、彼は夙にパウマンたるを自認し、此行アウエルバを訪ひ、自らエウゲニー・パウマンと稱して面接を求めぬ。アウエルバは愕然自失謂ふ所を知らず。トルストイの去りしのち、人に語りて曰く、あゝ恐ろしや、彼の何を演出するや知るべからざりしと。それよりトルストイは宗教改革家ルーテルの墳墓に詣て、嗚呼健人なる哉の一語を残してドレスデンに向ひ、ケッセンゲンに暫く足をとめて教育史を學び、ベーコンの文章を研究せり。これより伊太利、瑞典、佛のマルセーユ、巴里、英の倫敦を経由し、再び獨逸に入り、ワイマルに淹留して幼稚園を視察し、その利害を考究し、ウーインを過ぎて露西亞國境に歸著しぬ。

#### 八 郷土の教育事業

ヤスナヤ・ポリヤナに歸來せるトルストイは、農民の子弟を教育し、文明的國民を作り出さんと決心し、校舍を新築して小學校を開き、西歐各國に於ける教育法研

究の結果たるその理想教育法によりて授業を開始せり。此教育法の主眼は生徒の自由を絶対に容認するにありて、座して教師の講義を聞くも、横臥して教師の質問に答ふるも、又校外に出て、遊ぶも、庭園に座して讀書するも、そは生徒の自由なり。教師は教ふべきことを細かに親切に活動的に説き、生徒をして自ら進んで聴講せしむる様盡力するを以て責任ありとせり。讀本はトルストイ自らこれを著作し、自ら教鞭を執り、唯僅に一名の補助教員を雇ひしのみ。生徒はトルストイ家所有に係る畑地を耕作せる農民の子弟にて、十名若くは十四五名、最も多人數の時にても二十四五名を超えしことなかりき。學校の附帶事業として彼は、ヤスナヤ・ポリヤナてふ教育雜誌を印行し、同誌に於て教育一切の事を掲載し、以て世に公にせり。雜誌は至つて小規模のものなりしも、教育法の新規なると、作者天成の美文は全露國の教育家、文學家を動かさしき。こゝに於て、内務大臣はこれを以て容易ならざる現象となし、文部大臣に書を與へて大に其注意を促せり。其書翰に曰く、トルストイ伯が發兌され候雜誌ヤスナヤ・ポリヤナは全く新想の教授法を宣傳すると同時に、現行小學校の基礎を破壊するものに有之候。萬一此儘棄て

置く時は其害の及ぶ所尠ならずと存候。殊に閣下の注意を喚起致したき儀は、此雜誌が論議致候教育法の根柢には倫理及び宗教の本源を覆へす思想の伏在候こと有之。筆者文章の雄健艶麗は、能く士人を瞞着するに足る事に候。茲に於て閣下は檢閲係に命ぜられ、一層嚴重の御取締あらんことを希望致候云々。これに對する文部大臣の答書は亦一異彩を放てり。曰く、余の所見に依り候時はヤスナヤ・ポリヤナに掲載せる文中には、少しも公安を害し、倫理宗教を危ふするものなしと存候。新想の教育法中には、多少如何哉と存候。廉も無きにあらずと存候が、それは假令或種の補助を與ふるも斯學進歩の爲め試験致度と存候所のものに有之候之を要するに、閣下よ、トルストイ伯の教育上に於ける功勞は、眞に稱賛に堪へざる所のものにして、其極端の議論は經驗を重ね斯學研究の進境に逢へば、忽ち自ら抛棄さるゝに至るものと信じ候。

この論戰は内務大臣の緘黙によりて一時局を結び、ヤスナヤ・ポリヤナ學校は勿論同名の教育雜誌も數年間は其の存在を保つを得たるも、トルストイ所有地の小作人間には之に入校する少年無きに至りたれば、學校は閉鎖され、雜誌は廢刊さ

れき。

十數年に亘れるこの教育事業は痛くトルストイの健康を害し、身體衰弱、胸部の疼痛忽諸に附すべからざるものあり。彼はフルカ河東部の平原に轉地し、新鮮の空氣を呼吸し、中央亞細亞民族の好める馬乳を飲用せり。幾許もなくその健康回復し、以前に倍する體力を得たれば、彼は意氣昂然としてヤスナヤ・ポリヤナに歸り

## 九 結 婚

ウオルガ河東平原に於けるトルストイの滞在はその生涯にとり非常なる變動を惹き起すの近因となれり。この時までには専ら獨居生活をなしつつありしに、彼は良妻を迎へて樂しみ多き家庭生活を爲さんと決心せり。是實に一八六二年にして年正に三十六の歳なりき。

十九世紀の中葉、モスクバにベルスと呼ぶ名醫住みけり。此人に三人の令嬢あり。艶名あると同時に淑徳の聞え最も高かりき。トルストイは年來このベルス家に

出入し、至つて懇親になりしが、河東より歸來一層親密を増し、彼は終に意を決しベルス氏に向ひ次女ソヒア嬢と結婚希望の趣を打明け、其允議を求めしに、昔堅氣のベルス氏は次女を長女に先んじて嫁がしむるを喜ばず、躊躇して容易に決せず、トルストイ殆ど失望の窮狀に陥りしが、僅か十八歳の少女たるソヒア嬢は彼と直接懇談の端緒を啓き、互に意志の投合を認め、父母に乞ふにトルストイの懇情に應ずることを以てせり。ベルス夫妻即ちトルストイの求むるがまゝにソヒア嬢との結婚を允諾したれば、一八六二年九月十日を以て結婚の式はモスクバなるベルスの邸に擧げられ、新夫新婦は相携へてヤスナヤ・ポリナに歸れり。ヤスナヤ・ポリナ邸は久々に新婚の主人を迎へ、邸内の事々物々皆喜瑞に満ちぬ。蜜月の樂しき日に、彼は詩人ヘト氏に書を與へ、成婚漸く二週に過ぎざれども、新生活の樂しみは余をして全く新人とならしめたりと報せり。

斯くの如き樂しき家庭は物質的の幸運を以て確保されぬ、財産よりの歳入、著作によるの收入、年を追うて額を増し、富數十萬に達しぬ。而して子寶も亦、年と共に殖え、一八九一年に生れし末子イワンは、實にトルストイの第六男にて、彼は五人

の兄と三人の姉あり、男兒は大概大學校、若くは兵學校に入りて相應の位置職業を得、女子は女學校の教育を受けて家居せり。

#### 十 「戦争と平和及び「アンナ・カレニナ」

家庭生活の始めは、トルストイの愈々文學界に名をなすの端緒なりき。彼の大傑作、否露西亞文學の精華たる小説「戦争と平和」(ライナ・イ・ミール)に筆を染めんと、念はこの時代に發萌し、歴史の研究に摸寫人物の表象に、活劇舞臺の意匠に意外の日月を要し、一八六四年に筆を起し、其翌年よりモスクバの文學雜誌露西亞報の紙上に掲載せられ、文學家は云ふに及ばず、軍人、學者、官吏、商工業者、争うて之を読み、婦女に至つては殆ど狂せん計りに愛讀したり。一八六九年に至る六個年間殆ど毎冊連載したる露西亞報の賣れ方は實に前代未聞の部數に達し、讀者は彼が流麗なる文章に眩せられ、その描出せる人物に酔ひ、報知は、之が爲めに國民の愛玩措く能はざる讀物とはなりぬ。されば此小説によりトルストイが得たる名譽は非常なるものにて、露西亞文豪中彼と比肩する者なき勢力と同情とを





しも道心の光明なき、罪惡の暗黒、悔悛の活水なき死境の人とするか、又は良心の苛責に堪へず、所謂文明の利器を利用して、自ら進んで死の暗境に陥るの悲況を演ずる者たらしむと云ふにあり。道念の革命期にありし彼自己を「レウイン」てふ名の下に、小説の下半に描出し、自ら經たる懷疑の徑路を示し、解説の大道を明かにせり。

アンナ・カレニナは、戦争と平和の浩瀚なるに比し、國民的の含意あるに比して、讓る所あるべきも、其着想、描寫、心理分析の的實、舞臺の優適、行文の華麗、健強等に於ては、毫も讓る所なきなり。此後トルストイの心理は、革命期に入り、一八八〇年の頃よりは、専ら勸善小話の著作に従事し、可憐の小品、多くは此際に刊行せられたり。斯くしてトルストイの生涯に於て意味ある一八八三年に至りぬ。

### 十一 告白

人生研究は「戦争と平和」「アンナ・カレニナ」兩大作の材料蒐集によりて愈、その範圍を廣うし、益、其詳細を加へ、問題は多岐に分れ、紛々悶々、彼をしてあゝ人は唯單に

死せんが爲めに生を受くるものなるかと絶叫せしむるに至りぬ。彼は失望の極に於ては、世の中に生命を尊重する程、恐なることあらじと主張するの窮境に陥れり。かくの如き絶體絶命の場合に於ける彼は始めて新生命の曙光を認め、斷然舊套を脱し、新衣を得ることゝなれり。彼以爲らく人生の災禍、罪障、迷惑、誤謬、換言せば人間總ての不幸は文明てふ廢物に魅せらるゝに始まる。文明の獨占的跋扈は基督の眞意を誤解、歪曲解するにより生ずと、茲を以て彼は毅然として起る。己が誤謬過失を公認し、人がこの過失誤謬を再びすることなからんことを誓ひ、告白の一書を著はせり。彼の文章、殊にこの「告白」の大文字は、文豪ツルゲネフの艶麗華美なきも、ゴンチャロフの整美、優雅を缺くも、而も字に畫に鋼針の利鋭を備へ、直覺的に心情に迫り、理性を動かし、之を讀む者をして直ちに筆者の心を己が心となさしむるの怪力を備ふ。筆を竭くして世を罵り、己を罵るの警語は、一句は一句より深甚に、一字は一字よりの切なり。蓋し「告白」の一書は東西文字のうち稀に見るの活文字なり。「告白」を著者寓意の方面より觀察せんに、實に思ひ切りたる大思想なり。其思出の飛躍の方面より觀察せんに、直に悟道の極致なり。「告白」は一八八

○年頃より彼が連続して世に公にせられし神學、倫理、哲學に關する大著述の序文とも謂ふべき書なり。我信仰「福音」天國は爾のうちにある。宗教と國家はその本文にして、孰れも萬世の師表たるに足る名著なり。試みに「福音」てふ一書をとりにて細心熟讀せよ。彼が如何に基督に忠實なるか、如何に其教訓に重きを置きしか、如何に之に歸依信頼しつゝあるかを明にするを得ん。獨逸の碩學テッセンドルフが苦心慘憺査究、考證を的確にせし新約經典、所謂シナイの原文を重んじ、一言一句の翻譯にも細心謹嚴、一點一畫を忽にせざりしを見るべし。若し夫れ、此書を彼の著述基督傳となさば、蓋し凡ゆる基督傳中の巨擘ならんか。行文の簡明圓熟、而も奔馬も管ならざる文字の大活動に至つては、古今基督傳これに比すべきものはあらざるなり。

「我信仰」はトルストイが一刀兩斷的基督教觀なり。彼の眼青に映ずる基督の教は、直覺的の明教にして、實に寸毫の假借を許さざるものなり。保羅の書牘に現れたる基督教すら、既に牽強附會の私説を交ゆるもの、既に幾分基督の眞精神を毀損せるものとなす。況んや時代神學の趨向解説に於てをや。十二使徒の如く、基督に

親近し、口より其教導の恩恵に浴せしものすら、彼の目には絶対的の傳者には見えざるなり。彼以爲らく福音教に現れたる基督教の眞意を悟得するには、些少の誤謬なく傳へられたる確證ある基督の教を標準とし、多少疑惑を感ずる教訓を比較研究すべし。斯くして得たる基督の眞教こそ絶対の眞理なり。福音經の著者筆者は古代の意味を以てしても、また今代の意味を以てしても、教育ある開明の人にあらず。時代の妄信、時代の誤謬以上に立つこと能はざる人なり。假令基督の明教は、彼の輩の頭腦を洗滌し、思想を革新したりとするも、僅々三ヶ年の短日月を以て絶対的の別人とはなし能はざりしならん。この人の筆に成りし福音經、豈上記の心得なくして之を讀むべけんや。之を以て讀者は寶珠を瓦礫のうちより選り別くる精神を須臾も忘るべからずと。

かゝる大抱負を以て基督の眞教を悟道せし要點を詳述せし書は、我信仰なり。この心をもてこの書を繙かば、我信仰の趣味は一層深きを感ずべし。

トルストイの厭世的失望の思想は、大革新の鍛鍊を経、絶対の勢力を有するものなり。終に後日の新人たるトルストイ、宗教家にして忠實なる基督の僕たるトル

ストイを産みぬ。この大革命に際する彼の逸事にしてモスクバに傳へらるゝもの頗る多し。今其一二を記すべし。

モスクバの近郊に住める老醫士あり。奇人として突飛なる思想家として知らる。新人たるトルストイをヤスナヤ・ポリャナの別墅に訪ふ。綠樹の下、清風細葉を搖すの夏の夕ぐれ、茗を煮茗を蒸らしつゝ談笑す。トルストイ今しも茗を手にして、燦なる白煙は氣中に半輪を畫き、一種の快味を食りつゝありしに、突如醫は猿臂を延べ、トルストイが手にせる茗を氣早やに奪ひ、叢中に投棄せり。驚けるトルストイは呆然たること少時、而して虎將は逆立せり。怒氣は眉宇に滿てり。

「失敬な、何をす。」

と。彼は詰問の矢を放ちぬ。醫士從容として、

「先生、近來頻りに徳義を談じ、宗教を説かると。抑も宗教にしても徳義にしても、之を談ずる者は、最も警醒すべき筈。然るに先生未だニコチン麻酔劑たる煙草を用ひらる。これ我輩の太だ敬服せざる所。これ余が進んで之を取り棄てたる次第なり。」

と答へぬ。トルストイは恰も大木に打れたるが如く撫然として默想し、而もまた須くにして釋然として自得。

「君の説には真に敬服です。醉へる世を警醒せしめんとする者、宜しく自ら醒むるを要するや當然なり。今後は屹と慎みます。」

この後、彼は漸じて酒煙を絶ちたり。或る時、この醫士、トルストイをヤスナヤ・ポリャナの別墅に訪ふ。トルストイ、銃を肩にして獵犬を携へ、まさに出獵せんとするに逢ふ。醫翁嚴然として曰く、

「先生出獵せられんとせば、先づ自ら己が妻子眷族を銃殺して然る後にせられよ。」

トルストイ、之はまた奇態なことを承るもの哉。何うして己が妻子を銃殺するところが出来まじやう。

醫翁、鳥にも獸にも、兄弟あらん、妻子あらん、不幸にして先生の爲めに銃殺さるゝ禽獸あらん、その妻子眷屬若くは父母兄弟の悲歎は如何ばかりならん。先生先づこれを己に試みられよ。」

トルストイ「嗚呼我れ誤れり。今後は決して銃獵致すまじ」  
トルストイは其後亦曾て出獵せざりしと云ふ。

## 十二 「クレイ・ワットソン」教會と國家

「ニコライ・バルキン」復活

トルストイの主義主張は愈々鮮明となり、その利刀は直裁的となりぬ。由來彼は無知文盲の農民を愛し、文明の先達、社會の中心てふ自信を有する中等以上の國民を愛せざる傾向を有せしが、前章所述の精神的革新ありてより一層この傾向を増進せり。蓋し基督の教意は中等以上の社會に於てより農民社會に於て實行さるゝもの多きによりしならんか。加之彼自ら農民に伍するを以て心中安を得るの一要素となし、農民の衣、農民の靴は最新流行の善盡し美盡せる貴族のそれと代れり。この新思潮は詩化されて小説「クレイ・ワットソン」となり、彼特得の男女同權論となれり。この小説の主人公は、神經過敏のホズシフにして、彼と妻女との關係、妻とその戀人との關係を描出して、所謂文明界に於ける夫婦關係の虚偽に

陥れることを痛撃せり。滾車の進行、車輪の動搖が如何にホズシフの神經を昂騰せしめしか、妻を刺殺する一瞬の如何に寫實的なりしか、之を讀めば眞に躬自ら其場合に居合したるの感に堪へざるなり。男女同權論の根據は、全く基督教觀の最も進歩したるものにして、而も實驗的の平民思想なり。トルストイ以爲らく、額に汗して勞働する男子の天職と、吾人の後繼者を社會に供給する婦人の天職とは、同一重荷にして、而も同一權利に屬す。これ眞に男女の同權なる所以にして、男女相俱に地上に於ける神の國を形成する基礎たるに外ならずと。彼の其後の思想は、何時しか倫理問題、個人問題の境域を超越して社會問題となり、國家問題となり、茲に端なくも露國の國立教會との衝突を喚起し、國家に激甚なる痛棒を被らしめぬ。露西亞教會の攻撃は、短文「教會と國家」に於て、政府の攻撃は、お伽噺「ニコライ・バルキン」に於て之を遺憾なく發揮せり。

「ニコライ・バルキン」を讀みたる爲政者は、彼を目して國の干城を覆へすの逆賊となし、教會と國家とを讀みたる教役者は、彼を目して異端者、邪教師となし、所謂「アナヘマ」(放逐)の刑に該當する重罪とし、終に世界を驚かせし、ルーテル以後第一の